福岡市

公民館建設関係
埋蔵文化財調査報告

（博多区那珂遺跡群第７次
西区拾六町ツイジ遺跡第２次
西区拾六町コノリ遺跡第２次）

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第162集

1987

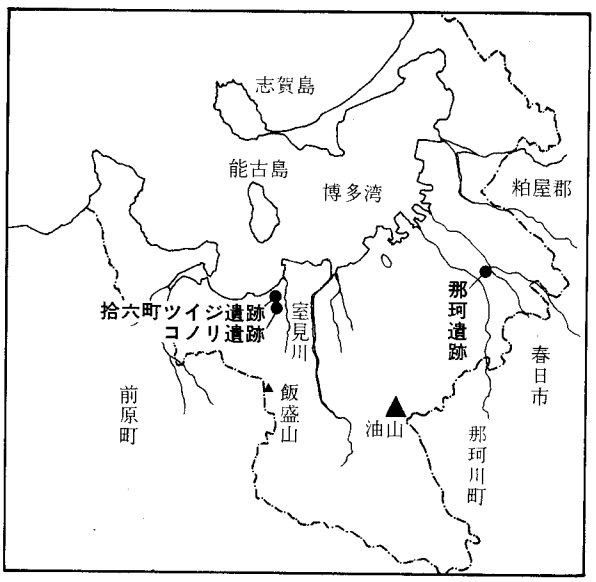
福岡市教育委員会

福岡市公民館建設埋蔵文化財調査報告 正誤表

頁	行	誤	正
46	3	３１１・３１１は	３１１・３１２は
PL.11	左2段目	１０	１４
PL.11	右2段目	１４	欠番
PL.12	見出し	291は柱穴SD299出土	291は柱穴SP299出土
PL.13	左2段目	１１６	１１８
PL.13	左3段目	(欠番)	１１７
PL.13	左6段目	(欠番)	１３５
PL.17	左4段目	２２９	２４９
PL.18	右1段目		天地が逆

福岡市

公民館建設関係
埋蔵文化財調査報告



1987

福岡市教育委員会

序　　文

福岡市教育委員会では、地域の社会教育、文化活動の場として、社会教育諸施設の拡充に努めているところですが、その一貫として、那珂、城原、壱岐地区の各公民館の新築、改築を実施することになりました。

これに伴って、社会教育課より埋蔵文化財の調査依頼を受けた埋蔵文化財課では、試掘調査に基づき、昭和60年、61年度にかけて各地点の調査を行いました。

本書は、その調査の結果について報告するものです。本書にみられるように、今回の調査におきましては、それぞれの地域の歴史を知る上で貴重な、多くの成果を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深めるための一助となるべく、広く活用されることを願うとともに、発掘調査から資料の整理にいたるまでの多くの方々の御協力に対して心から感謝の意を表するものであります。

昭和62年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐　藤　善　郎

例　　言

1．本書は、昭和60年度・61年度にかけて、福岡市教育委員会が発掘調査を行った、博多区那珂遺跡群第７次調査、西区拾六町ツイジ遺跡第２次調査、西区拾六町コノリ遺跡第２次調査の報告書である。

2．各遺跡の発掘調査は、福岡市教育委員会社会教育課が計画した公民館建設に伴って、事前に調査されたものである。事業年度、公民館名、調査地点名は下記のようになる。なお報告書の記載にあたっては、下記の順序で収録している。

昭和60年度　那珂公民館（移転改築）　博多区那珂遺跡群第７次調査

昭和61年度　城原公民館（新築）　西区拾六町ツイジ遺跡第２次調査

壱岐公民館（改築）　西区拾六町コノリ遺跡第２次調査

3．本書に収録した各遺跡の発掘調査は、那珂遺跡群第７次を田中壽夫、荒牧宏行が、ツイジ遺跡第２次を二宮忠司が、コノリ遺跡第２次を吉武学がそれぞれ担当した。

4．本書掲載の写真については、那珂遺跡群第７次；遺構・遺物ともに田中が、ツイジ遺跡第２次；遺構、遺物を二宮、コノリ遺跡第２次；遺構・遺物を吉武がそれぞれ担当した。

5．本書掲載の遺構、遺物の実測・整図は以下の分担で行った。

那珂遺跡群第７次　遺構実測―主として田中が行い一部を荒牧が補った。遺物―ＳＣ01・03・04、ＳＥ01～03の出土土器・木器を荒牧が、他の遺構出土の遺物はすべて田中が行った。整図は、執筆分担に従いそれぞれが行った。

ツイジ遺跡第２次　遺構、遺物ともに二宮が実測・整図を行った。

コノリ遺跡第１次　遺構実測―主として吉武が行い、田中稿二・加藤元信（明治大学）、山村信栄（慶応大学）、大庭友子が一部を補った。遺物―吉武が行った。整図―吉武が主として行い、藤村佳公恵が一部を補った。

6．本報告書の執筆分担は下記のとおりである。

那珂遺跡群第７次　Ⅱ章と、Ⅲ章のうちＳＣ01・03・04の遺構と遺物の説明、ＳＥ01～03の遺物の説明、及び第Ⅳ章―２を荒牧が、残りを田中が担当した。

ツイジ遺跡第２次　二宮が行った。

コノリ遺跡第１次　吉武が行った。

7．本書の編集は、田中、荒牧、二宮、吉武が地点毎にそれぞれ行い、田中がまとめた。

調査番号	遺跡名	遺跡略号	調査地地籍	分布地図番号	開発面積	調査対象面積	調査実施面積	調査期間
8530	那珂７次	ＮＡＫ	福岡市博多区那珂３丁目128	23-A-1	495㎡	495㎡	450㎡	1985年11月７日～1986年１月23日
8523	ツイジ２次	ＪＲＴ	福岡市西区拾六町490－１	(013)	495㎡	495㎡	220㎡	1985年７月25日～８月20日
8631	コノリ２次	ＫＮＲ	福岡市西区拾六町784	104-A-6、A-7	1007.4㎡	500㎡	360㎡	1986年８月５日～8月30日(延べ17日)

本　文　目　次

那珂遺跡群第７次調査　　頁

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．調査の経過 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 3
第Ⅲ章　発掘調査の記録 …… 7
　1．発掘調査の概要 …… 7
　2．遺構と遺物 …… 8
　(1)竪穴住居址　（ＳＣ01～11） …… 8
　(2)溝状遺構　（ＳＤ01～05） …… 19
　(3)井戸　（ＳＥ01～03） …… 24
　(4)掘立柱建物　（ＳＢ01～19） …… 40
　(5)甕棺墓　（ＳＫ01） …… 43
　(6)その他の遺構と遺物　（ＳＸ01・柱穴・表土・包含層） …… 43
第Ⅳ章　まとめ …… 51
　1．発掘調査成果の整理と問題点について …… 51
　2．井戸出土の遺物について …… 53

拾六町ツイジ遺跡第２次調査

第Ⅰ章　はじめに …… 61
　1．調査に至る経過 …… 61
　2．調査の組織と構成 …… 61
　3．遺跡の位置と周辺遺跡 …… 61
第Ⅱ章　調査の記録 …… 65
　1．遺構 …… 65
　2．遺物 …… 65

コノリ遺跡第２次調査

第Ⅰ章　はじめに …… 67
　1．調査に至る経過 …… 67
　2．調査の組織 …… 67
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 67
第Ⅲ章　調査の記録 …… 70
　1．調査の概要 …… 70
　2．遺構 …… 70
　3．遺物 …… 72
第Ⅳ章　おわりに …… 72

挿　図　目　次

那珂遺跡群第７次調査　　頁

Fig１．　周辺遺跡分布図　（１／25000）　……　4
Fig２．　遺跡の立地と周辺地形図　（昭和５年、１／10000）　……　5
Fig３．　遺跡周辺地形図　（１／800）　……　5
Fig４．　調査区北壁部分土層断面図　（１／80）　……　7
Fig５．　ＳＣ01平面及び土層断面図　（１／40）　……　8
Fig６．　ＳＣ01出土土器実測図　（１／３）　……　9
Fig７．　ＳＣ02出土土器実測図　（１／３）　……　10
Fig８．　ＳＣ02平面及び土層断面図　（１／40）　……　折込み
Fig９．　ＳＣ03平面及び土層断面図　（１／40）　……　11
Fig10.　ＳＣ03・04出土土器実測図　（１／３）　……　12
Fig11.　ＳＣ04平面及び断面図　（１／40）　……　折込み
Fig12.　ＳＣ05平面及び断面見通し図　（１／40）　……　13
Fig13.　ＳＣ05出土土器実測図　（１／３）　……　14
Fig14.　ＳＣ07平面及び断面図　（１／40）　……　折込み
Fig15.　ＳＣ06平面及び断面見通し図　（１／40）　……　15
Fig16.　ＳＣ09平面及び断面図　（１／40）　……　折込み
Fig17.　ＳＣ08・09・10・11出土土器実測図　（１／３）　……　17
Fig18.　ＳＣ08・10平面及び断面図　（１／40）　……　折込み
Fig19.　ＳＣ11平面及び断面図　（１／40）　……　折込み
Fig20.　ＳＤ01出土土器実測図　（１／３）　……　折込み
Fig21.　ＳＤ02出土土器実測図　（１／３）　……　21
Fig22.　ＳＤ02・03・04出土土器実測図　（１／３）　……　23
Fig23.　ＳＤ05出土土器実測図　（１／３）　……　24
Fig24.　ＳＥ01・02・03平面及び断面見通し図　（１／60）　……　25
Fig25.　ＳＥ01出土土器実測図　（１／３・１／４）　……　26
Fig26.　ＳＥ02出土土器実測図　（１／３・１／４）　……　27
Fig27.　ＳＥ01・03出土木器実測図　（１／４）　……　31
Fig28.　ＳＥ03出土須恵器実測図①（１／３）　……　32
Fig29.　ＳＥ03出土須恵器実測図②（１／３）　……　33
Fig30.　ＳＥ03出土須恵器実測図③（１／３）　……　34
Fig31.　ＳＥ03出土須恵器実測図④（１／３）　……　35
Fig32.　ＳＥ03出土須恵器実測図⑤（１／３）　……　36
Fig33.　ＳＥ03出土土師器実測図①（１／４）　……　37
Fig34.　ＳＥ03出土土師器実測図②（１／４）　……　38
Fig35.　ＳＥ03出土土師器実測図③（１／４・１／６）　……　39
Fig36.　掘立柱建物平面及び断面図①（１／100）　……　折込み
Fig37.　掘立柱建物平面及び断面図②（１／100）　……　41

Fig38. ＳＫ01出土状況実測図 （１／30） …… 43
Fig39. ＳＫ01実測図 （１／８） …… 43
Fig40. ＳＸ01遺物出土状況実測図 （１／30） …… 43
Fig41. ＳＸ01出土土器実測図 （１／３） …… 44
Fig42. 柱穴出土土器実測図①（１／４） …… 45
Fig43. 柱穴出土土器実測図②（１／３） …… 46
Fig44. 表土・包含層出土土器実測図（１／３） …… 47
Fig45. 土製品実測図 （１／３） …… 48
Fig46. 石器実測図 （１／１） …… 49
Fig47. 石器・石製品実測図 （１／３） …… 50
Fig48. 那珂遺跡群第７次調査地点時期別遺構変遷図 …… 51

拾六町ツイジ遺跡第２次調査

Fig49. 拾六町ツイジ遺跡周辺図 （１／25000） …… 62
Fig50. 拾六町ツイジ遺跡第１次・第２次調査位置図 （１／2000） …… 63
Fig51. 土層図・遺構配置図 （１／80 ・ １／100） …… 64
Fig52. 出土木器実測図 （１／６ ・ １／８） …… 66

コノリ遺跡第２次調査

Fig53. 周辺遺跡分布図（福岡市文化財分布地図・西部Ｉ、１／20000） …… 68
Fig54. コノリ遺跡遺構配置図 （１／150） …… 69
Fig55. コノリ遺跡遺構実測図 （１／80） …… 71
Fig56. コノリ遺跡出土遺物実測図 （１／３） …… 71

図　版　目　次

那珂遺跡群第７次調査

図版とびら　那珂遺跡群第７次調査地点遠景（南東から）
PL１．（１）調査前近景（南から）、（２）調査終了全景（北から）
PL２．（１）ＳＣ01完掘状況（東から）、（２）ＳＣ02完掘状況、（南東から）（３）ＳＣ02南壁粘土塊出土状況（北東から）、（４）ＳＣ02竈主軸断面（南東から）
PL３．（１）ＳＣ03完掘状況（東から）、（２）ＳＣ04完掘状況（南東から）、（３）ＳＣ05完掘状況（東から）
PL４．（１）ＳＣ06完掘状況（北から）、（２）ＳＣ08完掘状況（東から）、（３）ＳＣ07～11完掘状況（南から）
PL５．（１）ＳＣ09完掘状況（北北東から）、（２）ＳＣ10完掘状況（北から）、（３）ＳＣ11完掘状況（北東から）
PL６．（１）ＳＤ01・02・04完掘状況（北から）、（２）ＳＤ01・ 02 ・04完掘状況（南から）
PL７．（１）ＳＤ03完掘状況（北北西から）、（２）ＳＤ05完掘状況（東から）、（３）ＳＥ01・ 02 ・03完掘状況（南東から）
PL８．（１）ＳＥ03埋土上層下面遺物出土状況（南東から）、（２）ＳＫ01出土状況（南東から）、（３）ＳＸ

01遺物出土状況（南東から）、（４）調査区北壁土層堆積状況（部分写真）（南から）、
PL９．（１）掘立柱建物群分布状況①（北から）、（２）掘立柱建物群分布状況②（北東から）（３）掘立柱建物群分布状況③（東から）
PL10．（１）掘立柱建物群分布状況④（北東から）、（２）調査区南側作業風景（北東から）（３）ＳＣ02、ＳＤ03掘下げ作業風景（南から）、（４）ＳＥ02・03掘下げ作業風景（南西から）
PL11．那珂第７次ＳＣ01・02・05・09出土土器
PL12．那珂第７次ＳＣ09・11、ＳＤ01出土土器
PL13．那珂第７次ＳＤ02・05、ＳＥ01・02・03出土土器
PL14．那珂第７次ＳＥ03出土土器
PL15．那珂第７次ＳＥ03出土土器
PL16．那珂第７次ＳＥ03出土土器
PL17．那珂第７次ＳＥ03出土土器
PL18．那珂第７次ＳＫ01、ＳＸ01、柱穴出土土器
PL19．那珂第７次包含層、ＳＣ06・11、ＳＤ02・04出土土製品、井戸出土木器
PL20．那珂第７次出土石器

拾六町ツイジ遺跡第Ⅱ次調査

PL21．（１）調査前の遺跡全景、（２）堰状遺構と杭列検出状況（南から）、（３）建築材出土状況（北から）、（４）杭検出状況（北から）、（５）出土木器

コノリ遺跡２次調査

PL22．（１）コノリ遺跡全景（北から）、（２）コノリ遺跡全景（南から）
PL23．（１）掘立柱建物・ＳＢ02～04（西から）（２）掘立柱建物・ＳＢ05（西から）（３）コノリ遺跡出土遺物（約１/３）

表　目　次

頁
Tab１．那珂遺跡群調査一覧表 …… 6
Tab２．掘立柱建物計測表 …… 42
Tab３．SE03出土須恵器法量グラフ …… 54
Tab４．井戸出土須恵器観察表 …… 55～60

付図目次

付図、那珂遺跡群第７次調査遺構配置図

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会では、社会教育法の主旨に沿って地域の社会教育、文化活動の場としての公民館の新設、改築を例年実施し、その充実を図っている。昭和60年度の事業計画は、那珂公民館の移転新築を初めとして7地区の新設、改築が予定された。これらの計画予定地内の埋蔵文化財の有無について、社会教育課から事前調査の依頼を受けた埋蔵文化財課では、図面審査を経て那珂公民館と城原公民館予定地について試掘調査を行うこととした。

那珂公民館の移転新築予定地は、「福岡市文化財分布地図　東部Ⅰ」で周知の遺跡として記載されている那珂遺跡群の北東部に相当する地点に位置しており、何らかの遺構が存在していることが十分予想された。試掘調査は昭和60年6月24日に実施され、その結果、古墳時代を中心として、弥生〜奈良・平安時代にわたる遺構と遺物が、かなりの密度で良好に遺存していることが確認され、建設に先立っては、発掘調査を要すると判断された。試掘調査の結果を踏まえて、両課間では保存上の問題も含めて協議を行い、昭和60年11月6日から約2ヶ月半の期間で調査を行うこととなった。調査にあたっては下記の組織、体制で臨むことになった。

2. 調査の組織

公民館建設事業主体	福岡市教育委員会（社会教育課主管）
調査委託	福岡市土地開発公社　理事長　吉田寛
調査主体	福岡市教育委員会　教育長　佐藤善郎　（埋蔵文化財課主管）
調査総括	埋蔵文化財課長　柳田純孝
	埋蔵文化財第一係長　折尾学
事前審査（試掘・協議）	文化財主事　山崎純男
	埋蔵文化財第一係　山崎龍雄
	〃　第二係　松村道博
調査事務	埋蔵文化財第一係　松延好文
調査担当	埋蔵文化財第一係　田中壽夫、荒牧宏行
調査作業員	入江英美　松永茂　三留清馬　長孝一　森山恭介　小串徳繁　三浦力　田鍋ヤサノ　山野キヨカ　安部国恵　安部サエ子　池見恭子　黒木良子　徳永ノブ子　長嘉寿子　長サト　長喜美子　長絹子　西村康子　田村妙子　田鍋勝代　黒木澄子　久保山二三子　森山タツエ　西村きくえ　因弘子　門司弘子　藤スエ子　川崎セツ子　樋口千鶴子　森山キヨ子　荒木君子

整理作業員　高浪信夫　熊本義徳　櫛田猷子　大坂静代　田鍋町子　森本満里子　花井祝子　戎崎喜久美　尾畑信江

なお調査の実施にあたって、那珂公民館長　池田稔氏には色々と便宜を計っていただき、中原志外顕氏には調査上の助言を受けました。記して感謝の意を表します。

3. 調査の経過

発掘調査は昭和60年11月6日から61年1月26日までの約3ヶ月間を要した。

調査地点周辺は、密集した市街地であり、南隣には那珂小学校もあることなどから、発掘調査にあたっては、周辺住民に対する発掘調査作業の実施の周知化、調査過程における遺跡見学会の実施、安全対策（特に学童、幼児に対する）などの徹底が留意された。

試掘調査においては、敷地全体に良好な遺存状況で、弥生〜奈良時代の遺跡が分布していることが予想された。本調査にあたっては、この成果を踏まえて、1．那珂台地北東縁部における遺跡の遺存状況の把握、2．試掘において認められた各時代のより具体的な時期の把握、3．遺構・遺物を通じてみた当該地点での遺跡の性格の把握を、記録保存という一方の目的とともに調査の主眼点として、実施した。調査実施面積は450㎡である。

調査はユンボーによる表土剝から開始し、調査中央から西側では第14層上面で、東側では第16・17層上面をまず検出面として遺構検出を行い、SD01、02、柱穴等を確認した（Fig. 4）。SD01の掘削の初め（第11層掘下げ時）に肩衡茶入等の比較的新しい時期のものが出土したことと、土層断面観察によって、古代〜中世前期の遺物を多く含む第14・15層が人為的な整地層であると判断し、SD01完掘後に第14〜15層を掘り下げた。この層の掘り下げの過程で台形石器2点が出土し先土器時代の包含層の存在が期待された（結果的には削平されたと判断されたが)。第14・15層を掘り下げた結果、SD01を境として西側に古墳時代の竪穴住居址群、柱穴群が、東側に奈良時代の井戸、弥生時代後期の住居址、甕棺墓が確認された。これらの遺構の検出面は地山を形成する明(黄)褐色粘土層である。調査区北側では住居址の重複が顕著で調査に手間どった。これと対照的に他の住居址は切り合いもみられず点在しており、家屋配置の上で何らかの規制があったのではないかと思われた。調査区南側には、SC05埋土や第17層とよく似た土層の分布がみられ、何らかの遺構の存在が考えられたが明確にし得なかった。本来は17層が、第14・15層の形成される前に調査区全体を覆っていたことが明らかとなった。

今回の調査では古墳時代、古代〜中世の遺構の調査が主となったが、出土遺物の内容からは、弥生時代の遺構が本来はもっと在ったと思われる。古代末〜中世、特に中世後期にかなり削平されたと予想される。しかし全体的には、遺構の遺存状況は良好であり、那珂台地尾根周辺部においては、各時期に亘る遺構が、良好に遺存している事が十分考えられる。都市再開発が顕著な地域だけに、各種開発に対応する施策の確立が急務であることを思いつつ、調査を終了した。

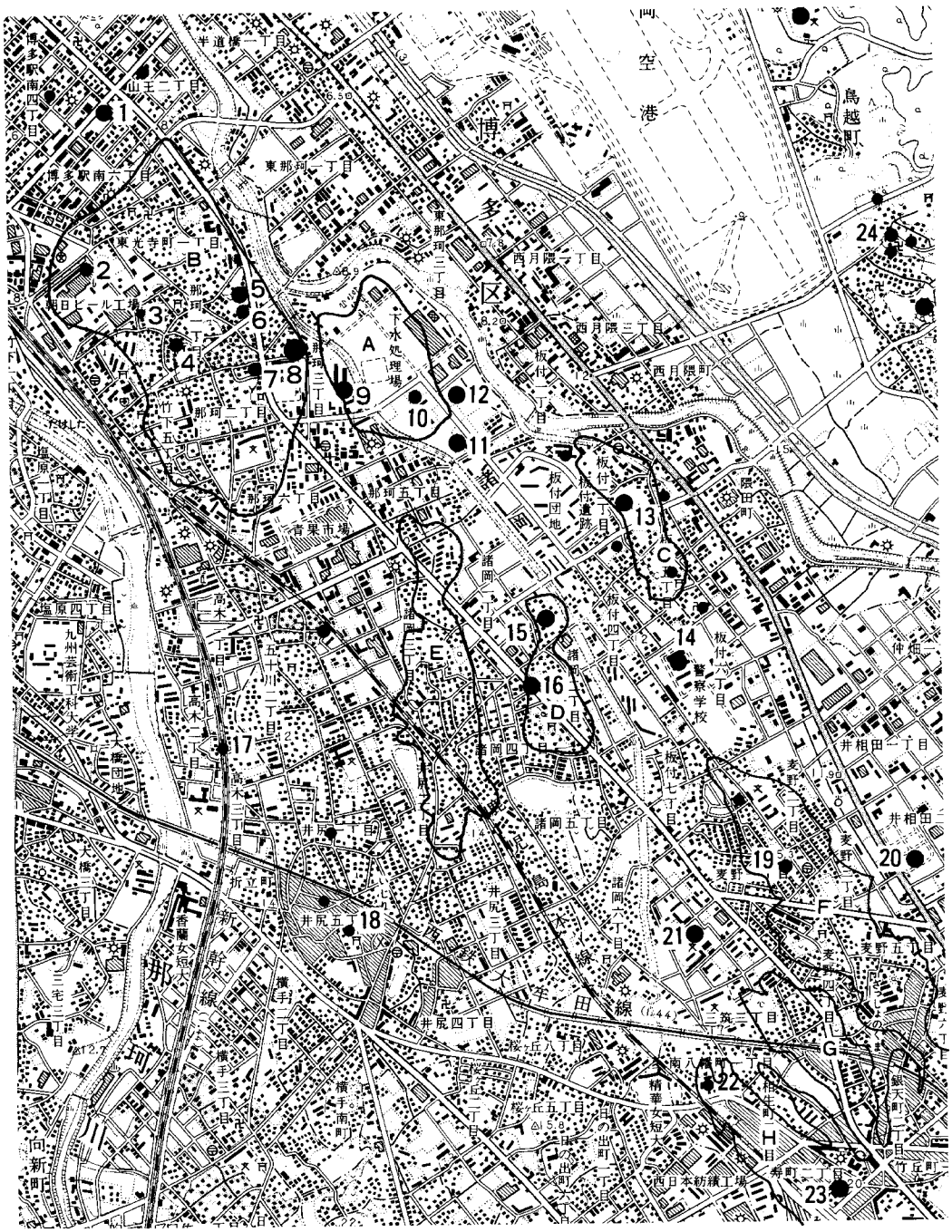
第II章 遺跡の位置と歴史的環境

那珂遺跡群第７次調査地点は、福岡平野の中央部、那珂川と御笠川にはさまれた台地の東縁部に位置する。福岡平野は北方を玄界灘の海に面し、後背に三郡山地、背振山地がひかえる海岸平野である。海岸線に沿っては東に粕屋平野、西には早良平野が低丘陵を境にして広がる。各平野は、中小河川の沖積作用によって作られたもので、福岡平野は那珂川と御笠川の営力によって三角州を呈している。

福岡平野では、沖積層の他に段丘面がその構成に加わる。福岡平野を北流にする那珂川、御笠川に沿って、南は春日市の須玖一帯から北は福岡市の那珂付近まで中位段丘の発達をみることができる。とりわけ福岡市内においては標高７m～30m、阿蘇火砕流のいわゆる鳥栖ローム、八女ロームの堆積物からなる中位段丘II面が、須玖方面から那珂まで細長く延びる那珂台地を中心に麦野、井相田、諸岡、板付などに孤立して分布する。台地周縁は侵食により複雑な出入りをもつ事が多い。この事は後述の台地に営まれる生活址と沖積地の水田址との関連を考えるうえで留意される事と思われる。[注1]

次にこのような地形に立地する遺跡の概略を述べていく。福岡平野では、その台地において旧石器時代から現在まで連綿として営み続けられたらしい。また地の利もあって、大陸の先進文化をいち速く受け入れ築きあげる性格を持ち得ている。特に弥生時代においては、板付遺跡（13）の初期水田址、板付田畑遺跡から出土した細形銅剣・銅矛、諸岡遺跡（16）から出土した細形銅剣や朝鮮系無文土器などにその片鱗をうかがい知る事ができる。[注2] やがて、この地域は、須玖岡本遺跡の前漢鏡30面以上、銅剣、銅矛、玻璃壁を有する甕棺が象徴するような「奴国」へと発展していく。[注3]

さて、那珂遺跡群第７次調査の中心をなす古墳時代では、調査地点と同じ那珂台地上に４世紀代の那珂八幡古墳と６世紀後半代の剣塚古墳が立地する。[注4] ともに前方後円墳で、前者は、推定全長75m、粘土槨と割竹形木棺の２つの主体部が検出されて三角縁神獣鏡等が出土した。後者は全長60m、装飾を施した横穴式石室が構築されている。沖積地においては、第７次調査地点のすぐ東方で、那珂深ヲサ遺跡（９）、那珂君休遺跡（10・11）那珂久平遺跡（12）の水田址が検出されている。[注5] [注6] [注7] 当時の全景はわかりかねるが、那珂深ヲサ遺跡の第４号溝の位置、那珂君休遺跡のV層水田址と那珂久平遺跡の下層水田址の広がりをみるかぎりでは、西は台地部の周縁近くから、沖積地一帯にかけて可耕されていたように思われる。第７次調査地点は、これらの水田址を間近かに見下ろせる位置にあったであろう。歴史時代では、条里に関連した遺構として、那珂君休遺跡第１次調査の第２号溝、那珂久平遺跡の第１号溝と中層遺構面の溝⑬が推定条里方位のN-37°-Wに沿って検出されている。時期は判然としないが、那珂久平遺跡の第１号溝は８世紀以後のものとされている。また、この付近においては那珂郡家の所在が大きな問題となっている。すなわち、小字「群久」に比定されていた那珂郡家の証跡は、先述の[注8]



1. 比恵遺跡　2. 剣塚古墳　3. 那珂3次　4. 那珂1次・6次（那珂八幡古墳）
5. 那珂2次（菰牟田遺跡）　6. 那珂4次（那珂沼口遺跡）　7. 那珂5次
8. 那珂7次（今回調査）　9. 那珂深ヲサ遺跡　10. 11. 那珂君休遺跡
12. 那珂久平遺跡　13. 板付遺跡　14. 高畑遺跡　15. 諸岡館跡
16. 諸岡遺跡群　17. 五十川高木遺跡　18. 地禄神社遺跡　19. 麦野下古賀遺跡
20. 井相田遺跡　21. 三筑遺跡　22. 南八幡遺跡　23. トヲナシ遺跡
24. 下月隈天神森遺跡
A. 那珂深ヲサ遺跡群　B. 那珂遺跡群　C. 板付遺跡群　D. 諸岡遺跡群　E. 五十川遺跡群
F. 麦野A遺跡群　G. 麦野B遺跡群　H. 南八幡遺跡群

Fig1. 周辺遺跡分布図（1/25,000）

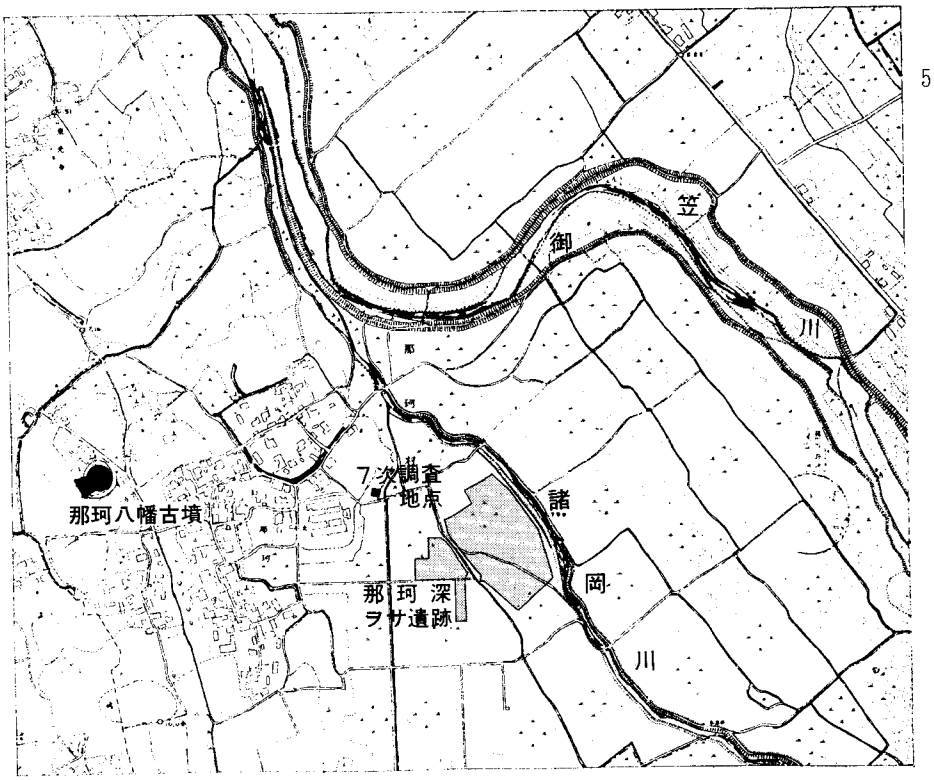


Fig2．遺跡の立地と周辺地形図（昭和５年、1/10,000）

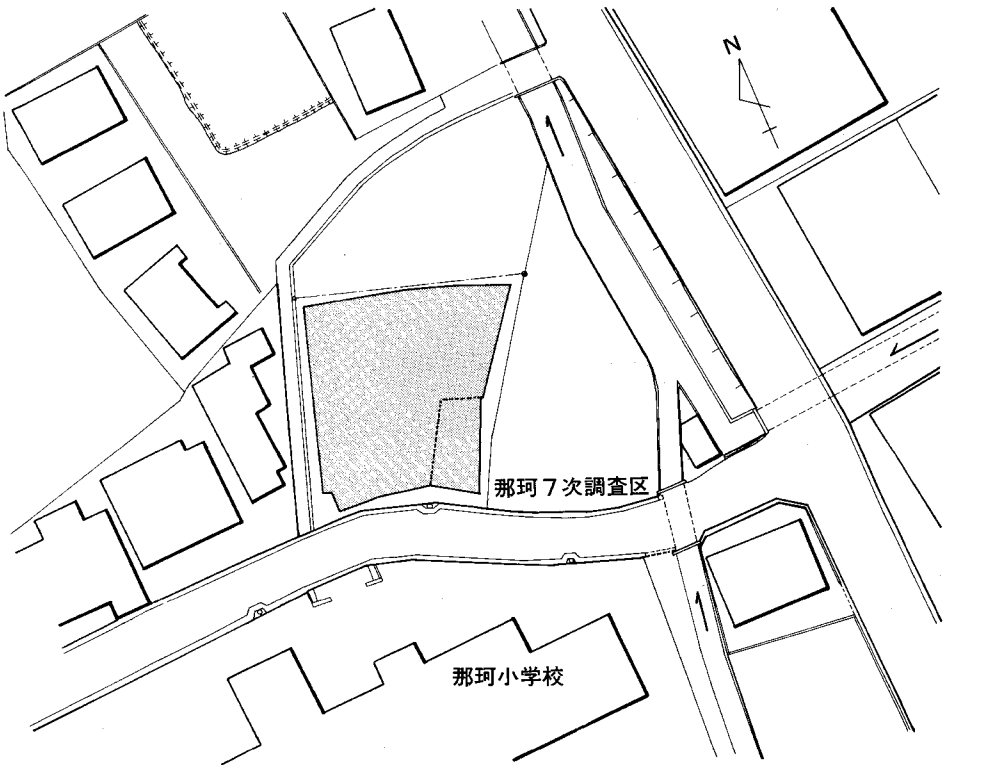


Fig3．遺跡周辺地形図（1/800）

沖積地の調査において見うけられず、那珂久平遺跡の報文中では、那珂台地に郡衙の所在が求められている。さらに律令期の那珂郡の問題として、高畑廃寺（14）と三宅廃寺の２寺院址の存在があげられる。一郡に２つの寺院址を持つ事について、高畑廃寺[注9]が郡寺的な性格、三宅廃寺が氏寺的な性格とする想定が示唆されている。中世においてほとんど不明と言わざるを得ないが、注目されるのに諸岡館址[注10]（15）がある。土塁と溝で囲繞され、14世紀後半から16世紀代にかけて存続したらしい。

以上、主に那珂、板付、諸岡周辺における遺跡を中心に述べたが、各時代を通じて断片的にしか判からない部分が多い。しかし今後、旧石器時代から現在までの痕跡を見出すことのできる台地部と最近増加してきた沖積地の調査によって、解明される事も多くなろう。

那珂遺跡群[注11]

先述のように那珂付近に広がる台地は、須玖付近より東西幅0.5〜0.9km、南北長６kmにわたって細長く延びる一連の中位段丘で、その北端部に位置する。福岡市教育委員会では主要地名をとって、この一帯に那珂遺跡群を設定している。その範囲は東西幅0.5〜0.7km、西北長1.4kmにわたる。今回の調査で７次を数えるが既往の調査は以下の表のとおりである。

調査次数	調査番号	所　在　地	面積	調査期間	調査概要	文　献	その他
那珂遺跡群１次	7109	福岡市博多区那珂１丁目	21㎡	昭和51年 ３月15日〜４月５日	墳丘測量 トレンチ調査	「福岡市那珂八幡古墳」 那珂八幡古墳調査団 九州考古学№53、1978	那珂八幡古墳
那珂遺跡群２次	7414	福岡市博多区那珂 １丁目237—１外	231㎡	昭和49年 10月９日〜10月19日	集石遺構 （古墳時代末〜平安）	「緊急発掘された遺跡と遺物」福岡市歴史資料館、1977	薮牟田遺跡
那珂遺跡群３次	7729	福岡市博多区那珂１丁目680	2㎡	昭和53年10月	甕棺		
那珂遺跡群４次	8036	福岡市博多区那珂１丁目277外	3,000㎡	昭和56年 ３月10日〜３月17日	甕棺（２基）	「那珂深ヲサⅡ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集、1982	那珂沼口遺跡
那珂遺跡群５次	8328	福岡市博多区那珂１丁目377—２	100㎡	昭和58年 ６月20日〜７月３日	古墳時代溝（１条）		
那珂遺跡群６次	8505	福岡市博多区那珂１丁目44	534㎡	昭和60年 ３月12日〜７月９日	主体部 三角縁神獣鏡出土	「那珂八幡古墳」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第141集、1986	那珂八幡古墳 重要確認調査

Tab１．那珂遺跡群調査一覧表

注記

注１　蒲田英夫「福岡市付近の平坦面の地史学的研究」（九大教養研報№８）　1962
　　「板付—市営住宅建設にともなう発掘調査報告書—1971〜1974」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　1976
注２　中山平次郎「銅鉾・銅剣の新資料（板付北崎の遺物）」　考古学雑誌第７巻７号　1917
注３　福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書（３）」福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集　1976
注４　福岡市教育委員会「福岡市那珂八幡古墳」　九州考古学№53　1978
　　福岡市教育委員会「那珂八幡古墳」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第141集　1986
注５　福岡市教育委員会「那珂深ヲサ遺跡Ⅰ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集　1981
　　福岡市教育委員会「那珂深ヲサ遺跡Ⅱ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集　1982
注６　福岡市教育委員会「那珂ヲサ遺跡Ⅱ」　前掲
　　福岡市教育委員会「那珂君休遺跡Ⅱ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第106集　1984
注７　福岡市教育委員会「那珂久平遺跡Ⅰ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第133集　1986
注８　日野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」（佐賀大学教育学部研究論文集24—1）　1976
注９　福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書（９）」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第98集　1983
注10　福岡市教育委員会「諸岡遺跡—第14・17次調査報告—」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集　1984
注11　福岡市教育委員会　福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）　1981

第Ⅲ章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要

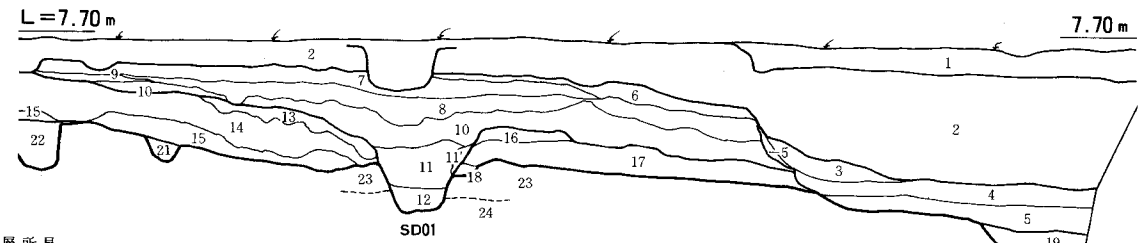
調査地点の基本土層（Fig 4、PL 8）

当該地点は、三笠川・那珂川流域に広く分布している中位段立の一つである那珂台地上に立地している。周辺が市街化の進行で旧地形をほとんどとめていない中で、当該地点は台地の縁辺部ということもあり、比較的よく旧地形を残しており土層の堆積状況がよく観察できた。

北壁においては大きく7層に分けられる。地山は灰白～灰黄白色を呈する八女粘土で、上部には明(黄)褐色粘土がのる。この層の上面は有機質で汚染され黒みがかかっている。この面で各時期の遺構が確認された。この層の上面には本来は第17層がのるが、SD01から北西側（尾根側）にかけては消滅している。14・15層は古代～中世の遺物を多く含む包含層で、中央～西側では検出面・遺構上に直接のる。中世段階での大きな地形の変造を物語る層である。この包含層を切ってSD01が掘削されている。SD01内埋土のうち8・10層は東側（谷側）で水平に広く堆積しており、SD01の埋没する時期においては、SD01から東側は一段低い地形だったことが窺われる。第1・2層は戦後の盛土である。SD01埋没後から戦後までは、おそらくこの段落ちの東側に灌漑用あるいは生活用水路が流れていたものと思われる。

遺構・遺物の概要（付図、PL 1）

検出された遺構・遺物は、弥生時代後期後半の甕棺墓1基、竪穴住居址1軒、古墳時代後期の竪穴住居址10軒、溝2条、奈良時代半ば以降の井戸3基、溝2条、性格不明の竪穴1基、古代～中世にかけての掘立柱建物19棟（柱穴は総数401)、中世の溝1条が主な遺構である。遺構は全般的にまんべんなくみられたが、傾向としては調査区の北西側に集中している。遺物では、先土器時代の台形石器が2点出土したが、那珂台地における出土層位の確認までにはいたらな



土層所見

第1層　盛土（真砂土）
第2層　盛土（昭和20年代の整地）
第3層　投棄された石炭がらのブロック
第4層　暗灰色粘質土（やや青味あり）
第5層　暗茶褐色粘質土（鉄分沈着）
第6層　暗灰褐色土（旧地表土）
第7層　褐色粘質土（旧耕作土，砂，木炭片含む）
第8層　褐色粘質土（7～8層上面では近世磁器片出土）
第9層　明灰褐色粘質土（軟質，旧耕作土か）
第10層　明褐色粘質土（SD01上層と呼称。軟）
第11層　褐色粘質土（SD01中層と呼称。軟）
第12層　暗褐色粘質土（SD01下層と呼称。明灰黄色粘土小塊を含む）
第13層　暗褐～褐色粘質土（軟質。中世の遺物を多く含む）
第14層　暗褐色粘質土（13層と比べやや硬い。遺物を多く含む）
第15・15'層　14層と比べ硬くしまる暗褐色粘質土
第16層　13層と，土質，土色ともよく似る明褐色粘質土
第17層　黒褐色粘質土（やや暗赤紫色がかっている）
第18層　灰黄白色粘土ブロック（SD01壁崩落に伴い堆積）
第19層　暗灰褐色粘質土（下部は砂目立つ）
第20層　暗灰色粘土層
第21層・22層　柱穴埋土
第23層　明褐色粘土層（若干赤みがかっている）
第24層　灰黄白色～灰白色粘土層

Fig 4．調査区北壁部分土層断面図（1/80）

かった。またSE03から、奈良時代半ば～後半の須恵器・土師器が大量に投棄された状況で出土しており、当該時期の土器組成を知る上で好例となるものと思われる。

2．遺構と遺物

発掘調査によって検出された遺構は、竪穴住居址11、溝状遺構5、井戸3、甕棺墓1、柱穴401、性格不明の竪穴1などである。住居址のうちSC06は性格をやや異にするが、竪穴住居址に含めて記述する。掘立柱建物は一部を除いて調査後の図上復元である。

（1）竪穴住居址

SC05が弥生時代後期後半の時期のものである他は、すべて古墳時代後期の時期のものである。遺構・遺物の遺存状況からみると、特に弥生時代の遺構がかなり消滅していると予想され、SC05と並行する時期の住居址はさらにあったと思われる。古墳時代の住居址分布の面からは、切り合い密度のかなりの差異が観察され、集落内の家屋配置について考える上で好例となった。

SC01（Fig 5、PL 2）

発掘区南西部で検出された。東側壁長は4.50mで隅丸方形プランをなすと考えられる。壁の

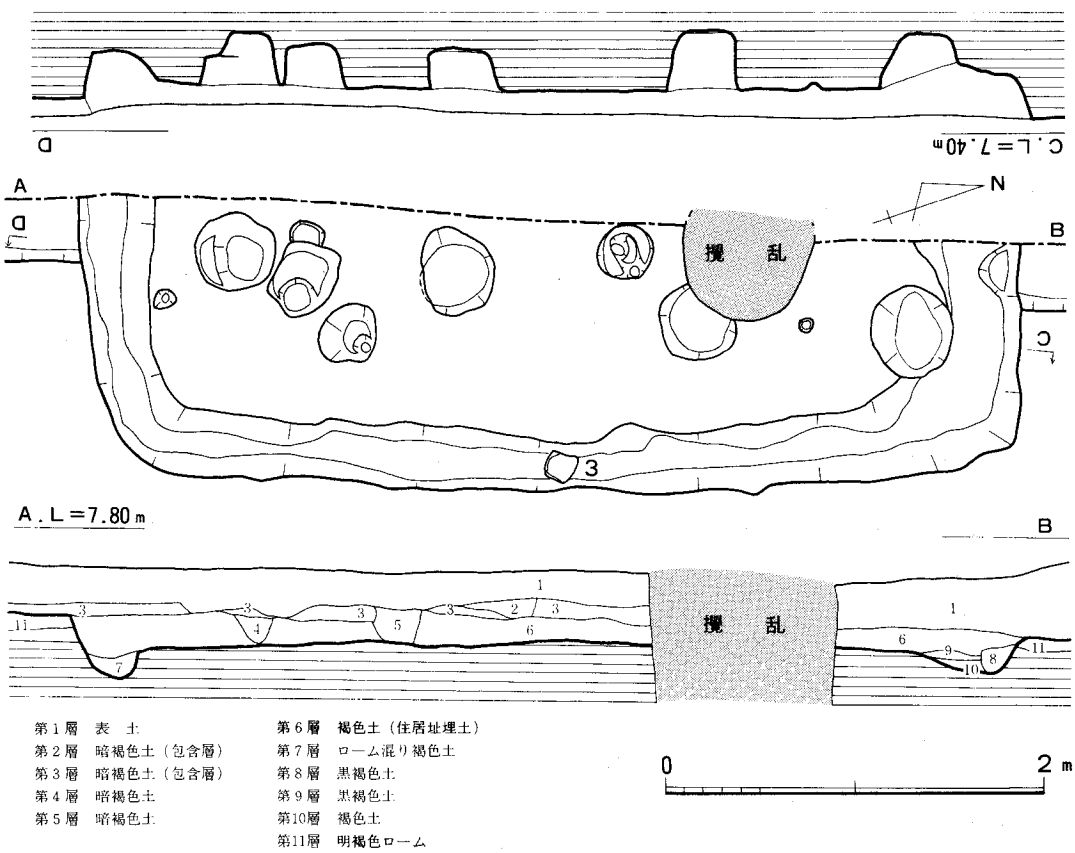


Fig5．SC01平面及び土層断面図（1/40）

高さは13cmで、壁に沿って幅23cm、深さ13cmの壁溝がめぐる。板材等の痕跡は認められなかった。住居址埋土は、第6層の明褐色ローム混じりの褐色土のみで、地山の明褐色ロームを掘り込む。この埋土の上には後世の包含層が部分的に残存している。

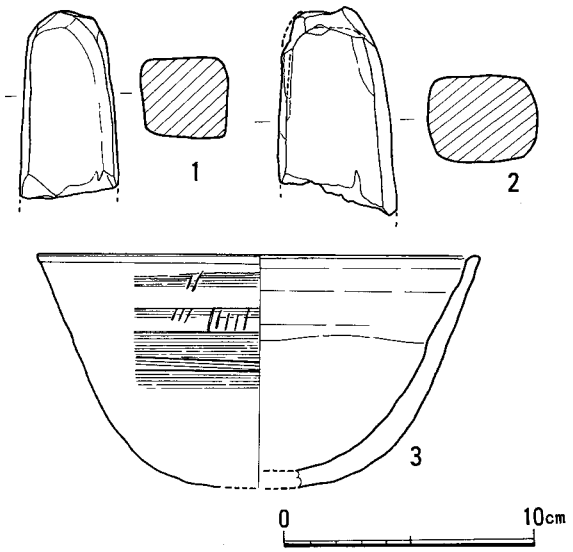


Fig6. SC01出土土器実測図（1/3）

出土遺物　(Fig6、PL11)

出土量が少なく図示できるのは3点である。**1**・**2**は土製支脚、**3**は須恵器椀である。**1**は断面が隅丸正方形で先端を丸くナデ仕上げる。**2**は断面隅丸長方形で、先端近くをナデ押さえている。**3**は口径17.9cm、器高は推定9.4cmを測る。外面体部上半はカキ目、下半はナデている。底部は回転ヘラ削り。外面全体にかけてハケ目が若干残る。内面は底部にナデを施す他はヨコナデ。色調灰色、胎土、焼成は良好。

SC02　(Fig7・8、PL2)

調査区中央部からやや西寄りの地点で検出された住居址で、北壁が南壁よりも若干長いために、平面形はやや台形に近い隅丸方形となる。当該地点で検出された住居址のうちでは最も遺存状況が良好である。中世における整地のため東側部分が若干削平されているが、西壁は壁溝床面から38cm（住居床面から31～33cm）を測る。住居址内の埋土は大きく2層が確認されたが、予想される竪穴の深さから判断すれば、最下部に堆積している土と思われる。土層の堆積状況からみると、床面直上にほぼ均一に、同質の土が堆積していることから、廃屋となって、家屋が除々に朽ち落ち、住居竪穴内に崩落したという経過を辿って埋没したものではなく、一時的に埋没、あるいは埋め戻されたものと思われる。おそらく住居廃絶時に、北壁中央に配されていた竈を破壊するとともに、再利用可能な建築部材を解体し、その後埋め戻した可能性がある。住居址内床面には9個の柱穴がみられたが、図示したP－1～P－4の4つの柱穴が本住居址の主柱になるものと思われる。竪穴の平面形にあわせてこれらの柱穴の配列も台形に近くなっている。P－4は他の柱穴と比べ極端に浅い。竈は、先述したように破壊されているために、その原形はとどめていない。住居址の北西部に竈を構築していた灰白色の粘土塊が散乱していた。焼土の拡がりからみて、長さ、幅ともに0.8mほどのコの字形をなす竈であったと思われる。この竈と対峙して、南壁にかなり固くしまった灰白色粘土の塊がみられた。床面直上に分

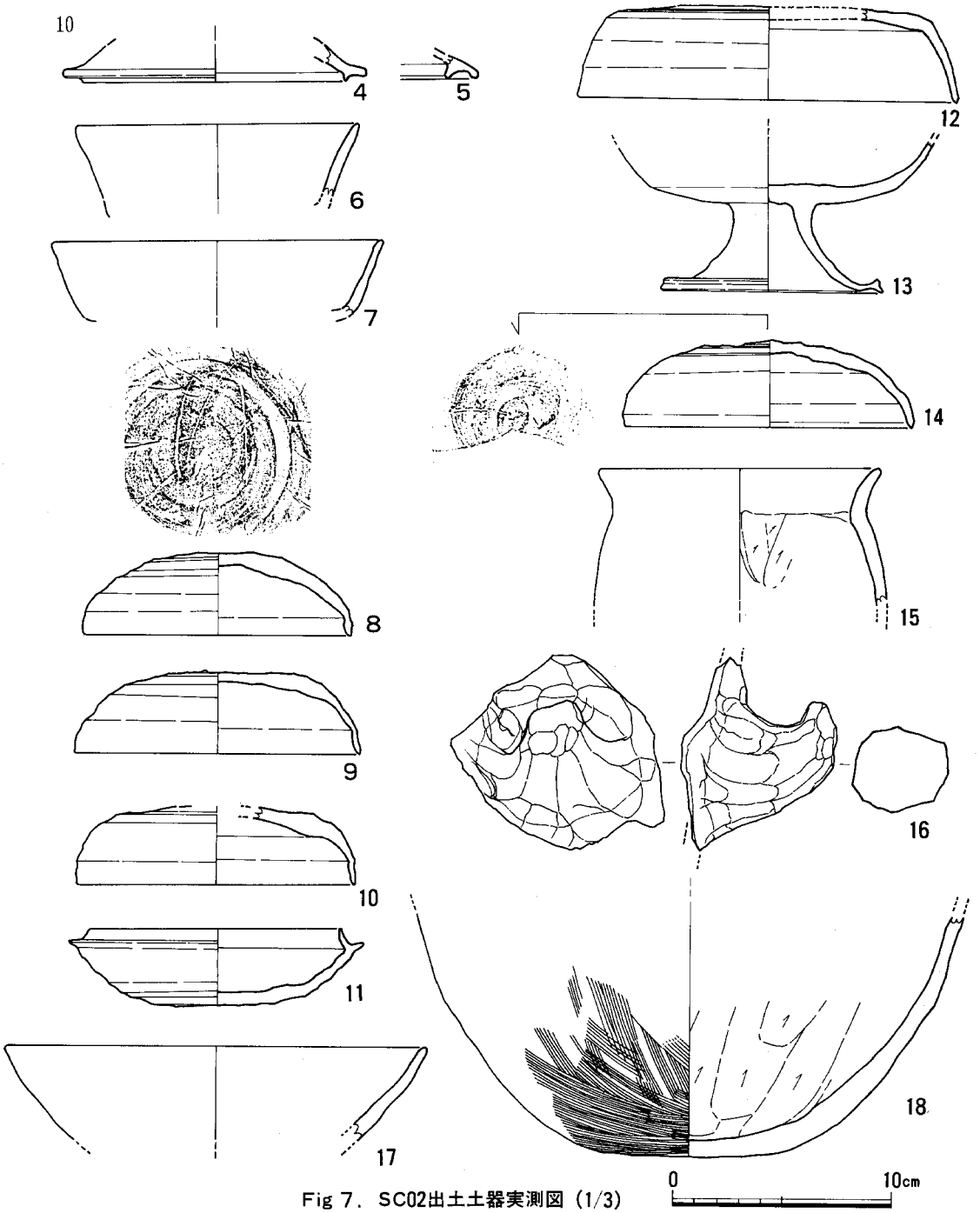
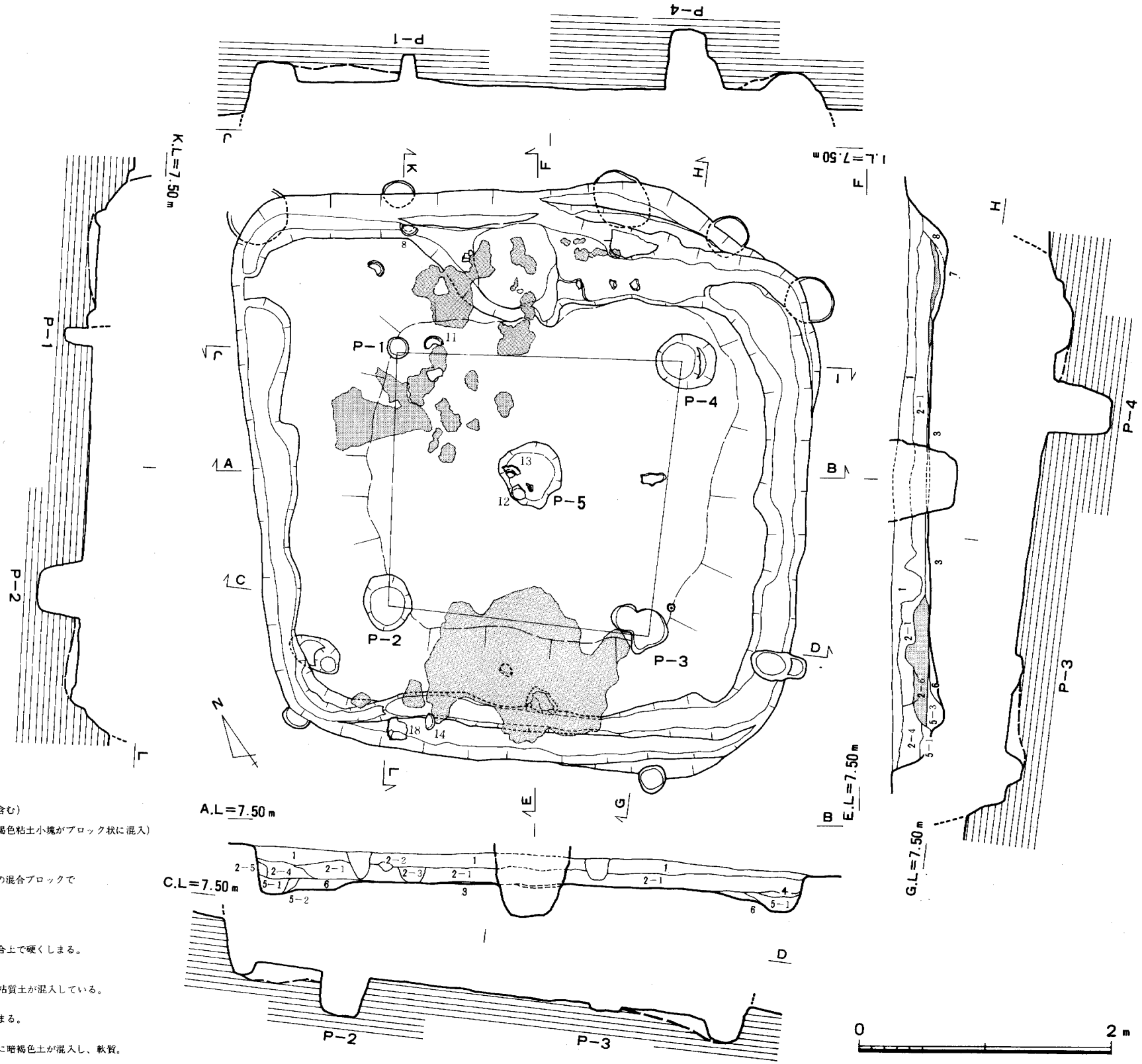


Fig 7. SC02出土土器実測図（1/3）

布していることから、床面上に付設していた何らかの構造物であった可能性がある。壁溝は、北壁を除いた三壁に沿ってみられた。床面は主柱で囲まれた中央部の高さで整地がなされ、中央から各壁間の浅い凹は、整地時に平坦に埋め戻されている。古墳時代後期の住居址である。



土層所見

第1層　暗褐色粘質土（明褐色粘土小塊を含む）

第2−1層　暗褐色粘質土（黒褐色土と、明褐色粘土小塊がブロック状に混入）

第2−2層　褐色粘質土ブロック

第2−3層
第2−4層
第2−5層　暗褐色粘質土と明褐色粘土塊との混合ブロックで2−1層に大きくは含まれる。

第2−6層　黒褐色土ブロック

第3層　明褐色粘土と暗褐色粘質土との混合土で硬くしまる。

第4層　明褐色粘土

第5−1層　明黄褐色〜明褐色粘土に暗褐色粘質土が混入している。

第5−2層
第5−3層　5−1層と比べやや暗く、硬くしまる。

第6層　明黄褐色〜明褐色粘土で、わずかに暗褐色土が混入し、軟質。

第7層　暗褐色粘質土で、木炭片、焼土が混入。

第8層　暗褐色土と、明褐色粘土の混合土。

Fig 8. SC02平面及び土層断面図（1/40）

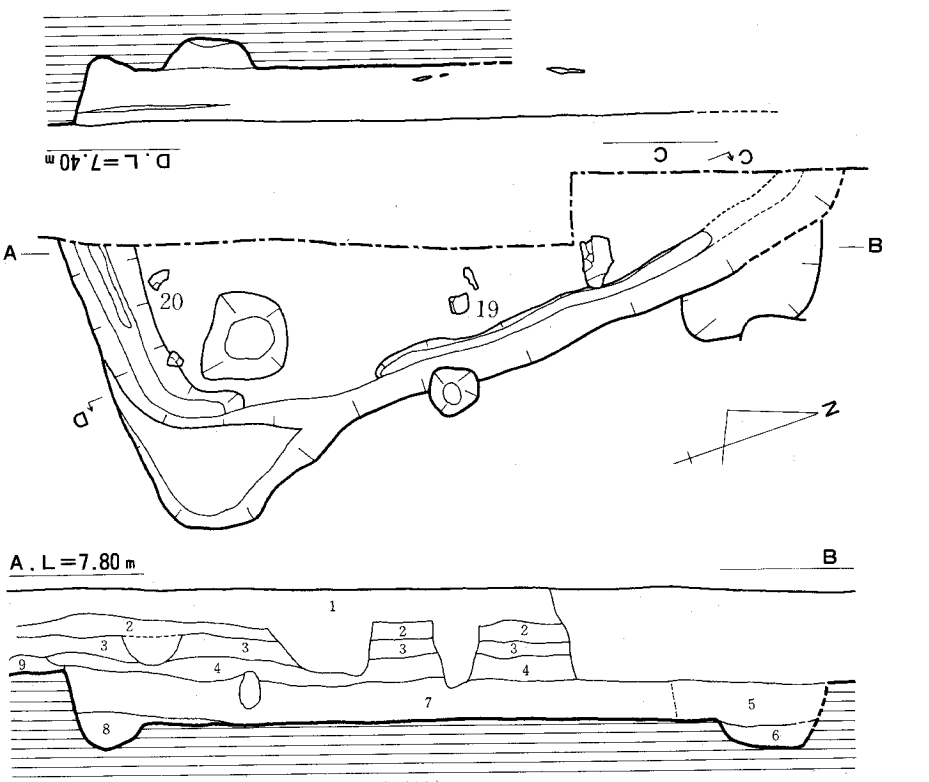
SC02計測値表

平面形		方　形
壁長	東壁	3.64m
	南壁	3.82m
	西壁	4.08m
	北壁	4.36m
住居址	柱穴数	4個
P−1	径・深さ	18cm 30cm
P−1〜2間	の距離	2.04m
P−2	径・深さ	38.5cm 32.0cm
P−2〜3間	の距離	2.10m
P−3	径・深さ	26cm 4cm
P−3〜4間	の距離	2.24m
P−4	径・深さ	42cm 46cm
P−4〜1間	の距離	2.30m
壁溝		東・南・西壁
竈の位置		北壁
出土遺物		Fig 7. （4〜18）
床面積		15.57m²
主軸方位		N−38°30′−E

出土遺物　(Fig 7、PL11)

他の住居址と比べて遺物の出土量はやや多い。それらのほとんどは住居址埋土中の二次堆積物であり、床面の上などに原位置のまま出土した例はわずかである。出土遺物は弥生土器小片68、土師器片866（うち甕5・甑把手3・高坏3、他は小片)、須恵器坏身7・坏蓋14・高坏3・甕8・不明10、滑石製石錘1、黒曜石片1などが出土している。

4～7・12・13は須恵器坏蓋・坏身・高坏である。住居址埋土の上面で出土したもので、埋没時期の上限を知る遺物となる。**4・5・12**は坏蓋で復元口径は**4**が12.1cm、**12**が17.4cmである。いずれも胎土・焼成ともに良好。**12**は坏身とも考えられるが、体部が内湾しヘラケズリの手法が坏と異なることから蓋とした。**6・7**は坏身である。復元口径は**6**が13.1cm、**7**が15.4cm。器高は不明。体部はいずれもやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさまる。胎土・焼成ともに堅緻。色調は灰～灰白色を呈す。**13**は高坏で、脚部裾径・高さは10.4cm・4.1cmを測る。胎土は精良で、色調は明褐色を呈す。坏部の底はヘラケズリが施されている。**8～10**・



第1層　表土
第2層　暗灰褐色粘質土（旧地表土）
第3層　暗褐色粘質土　（包含層）
第4層　暗褐色粘質土　（住居址埋土）
第5層　暗褐色粘質土　（　〃　）
第6層　褐色粘質土　（住居址埋土）
第7層　暗褐色粘質土（　〃　）
第8層　褐色粘質土　（　〃　）
第9層　暗褐色粘質土（地山の上層部）

0　2m

Fig 9. SC03平面及び土層断面図（1/40）

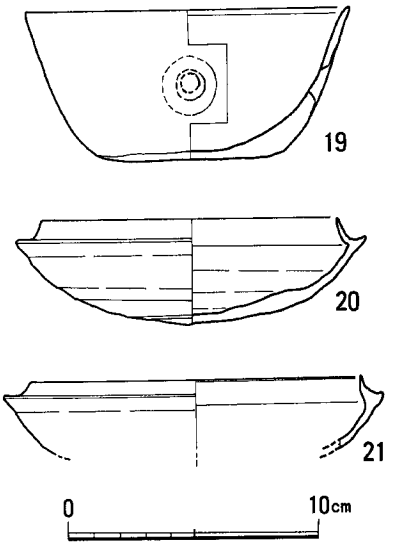


Fig 10. SC03・04出土土器実測図（1/3）

14は須恵器坏蓋である。復元口径は8が12.3cmの他は、約12.9～13.1cm。器高はいずれも3.6～3.8cmで、胎土・焼成ともに良好。9・10が体部と天井部とをある程度作り分けているのに対し、8・14は不明確。若干の時期差が窺われる。11は坏身で、復元口径11.6cm、器高3.5cm。ヘラケズリはやや粗く体部と天井部との境は不明確。ロクロはすべて右回転である。15～18は土師器である。15は小型の甕で、口縁部はわずかに外反、内面は斜位のヘラケズリ。16は甑把手で、体部内面は縦位のヘラケズリ。18は甕の底部で、外面はハケ目調整、内面はヘラケズリを施している。

SC03 （Fig 5、PL 3）

発掘区西端中央部で検出された。一辺が3.80m程度の隅丸方形のプランをなす住居址と考えられる。しかし北東コーナー付近は発掘区境界に位置し、またピットと切り合っていた為にそのラインは不明確であった。南東コーナーには平面形が略三角形の張り出しを付設する。床面からの高さ18cmを測りほぼ平坦面をなす。住居址の壁の高さは27cm、壁溝は東辺で幅7cm深さ6cm、南辺で幅22cm深さ8cmを測り、壁に沿って検出できたが東南コーナー付近で途切れる。張り出し部と関連をもつのであろうか。床面には焼土、炭化物は認められなかった。

SC04 （Fig11、PL 3）

発掘区中央部で検出された。南東へ傾斜した削平を受ける為に東、南辺では一部を残し消滅する。しかし残存する3コーナーから、一辺が3.50m程度の隅丸方形プランをなすことが推測できる。また北東隅に張り出し部を付設している。壁の高さは比較的残りの良い北西コーナー付近で24cmを測る。壁溝は幅約20cm、深さ7cmで全周するであろう。板材等の痕跡は認められなかった。

主柱は図示したP－1～4の4本柱と推定できる。P－2・3間が他の柱間と比べ広くあき、東辺の延長方向もやや東よりを推定せざるを得ないので、P－3の位置に疑問が残る。しかし他に主柱と考えられる柱穴は検出できなかった。張り出し部は、北辺の延長から東辺の中央付近に至る略三角形のプランをなすものである。同様のプランはSC03でも検出したが、そのレベルがSC03では床面より高い位置にあるのに対し、SC04は床面とほぼ同じレベルでその性格に疑問が残る。床面には焼土、炭化物は認められない。カマドは深く削平を受けた東辺中央部付近に位置するのであろうか。また、白色粘土がやや西辺によった中央付近床面上にわずかに散在していたが、SC02・10のような塊状をなす状況は認められない。

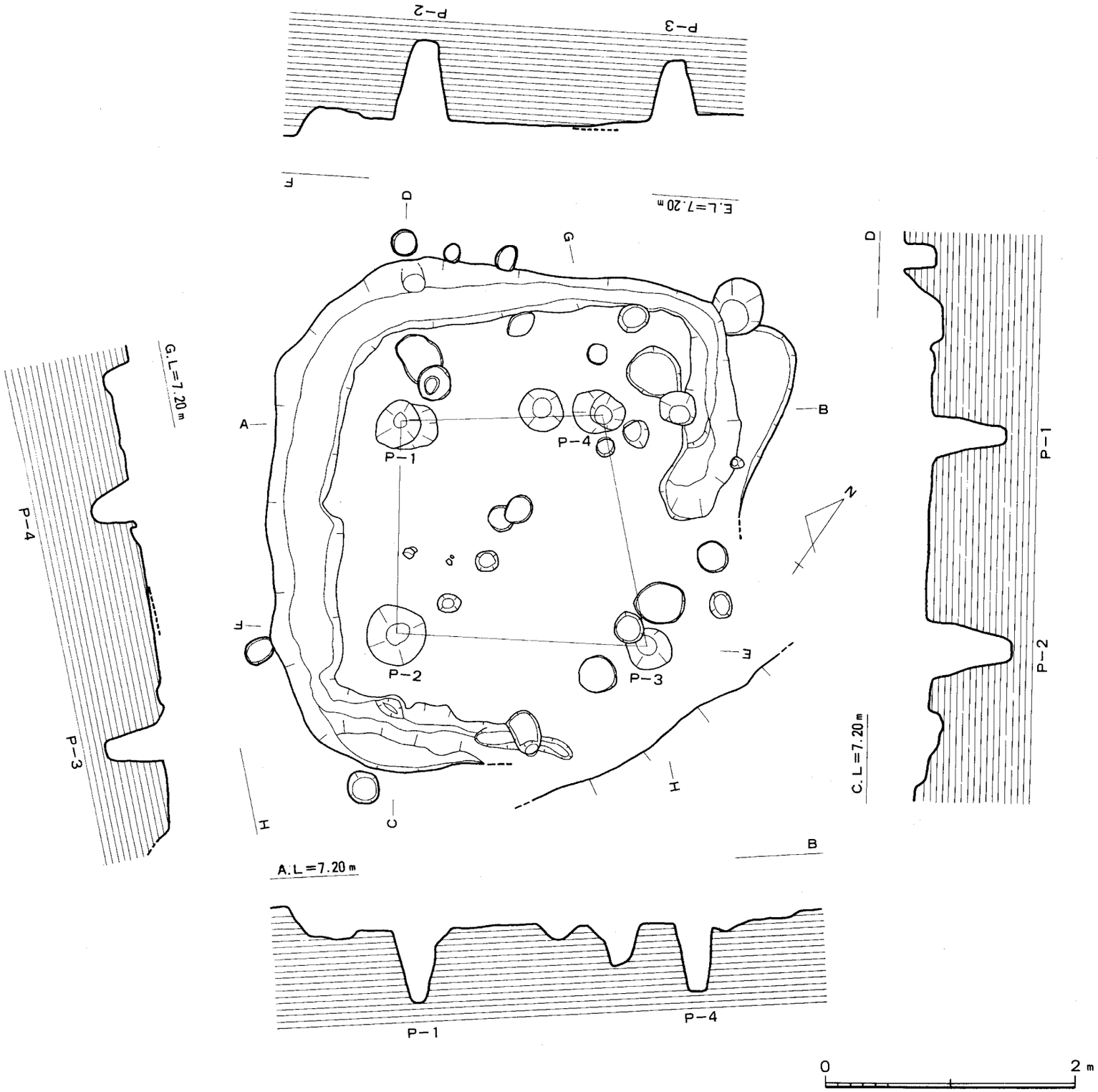


Fig 11. SC04平面及び断面図 (1/40)

SC04計測値表

平面形		方　形
壁長	東壁	3.30m (推定)
	南壁	3.35m (推定)
	西壁	3.55m
	北壁	3.75m
住居址内	柱穴数	23個
P-1	径・深さ	35cm 49cm
P-1・2	間の距離	1.73m
P-2	径・深さ	45cm 64cm
P-2・3	間の距離	2.03m
P-3	径・深さ	33cm 44cm
P-3・4	間の距離	1.90m
P-4	径・深さ	37(30)cm 36cm
P-4・1	間の距離	1.64m
壁溝		東・西・南・北壁 (東・南壁は一部)
竈の位置		
出土遺物		Fig10. (21)
床面積		約13m²
主軸方位		N-55°-E (推定)

SC03・04出土遺物　(Fig10)

SC03、04共に出土量が少なく図示できるのはSC03の**19**、**20**の２点、SC04は**21**のみである。**19**は口径13cm、器高６cmを測る椀である。器面が磨滅しているため調整は不明瞭であるがおそらく磨研土器と思われる。体部の中央部に穿孔を有す。その外面周辺はやや肥厚し、黄白色に変化している。把手状のものを差し込んだものと考えられる。色調は淡黄褐色。胎土精良。弥生時代の祭祠土器の可能性がある。**20**は口径11.8cm、受部径14.1cm、立ち上がり高4.8cm、器高4.3cm測る坏身である。立ち上がりは細身で直立ぎみである。**21**は推定で口径13.0cm、受部径15.3cm、立ち上がりは内傾しながら中位くらいで直立する。**20**・**21**とも色調灰色、焼成良好。胎土は**20**がやや砂粒を含み、**21**は精良。SC 03、04はともに古墳時代後期後半のものであろう。

SC05　(Fig12、PL３)

調査区中央からやや東寄りに検出された住居址である。南北両壁は床面から16cmほどの高さで遺存しているが、東西両壁はSD01、SD 02、及び近・現代の攪乱により削平を受けて消滅している。住居址の平面形は、明確ではないが、南北壁間の長さ3.7ｍを一辺とする方形であったと思われる。住居址内の埋土は、調査区北壁土層断面の第17層によく似る、やわらかな黒

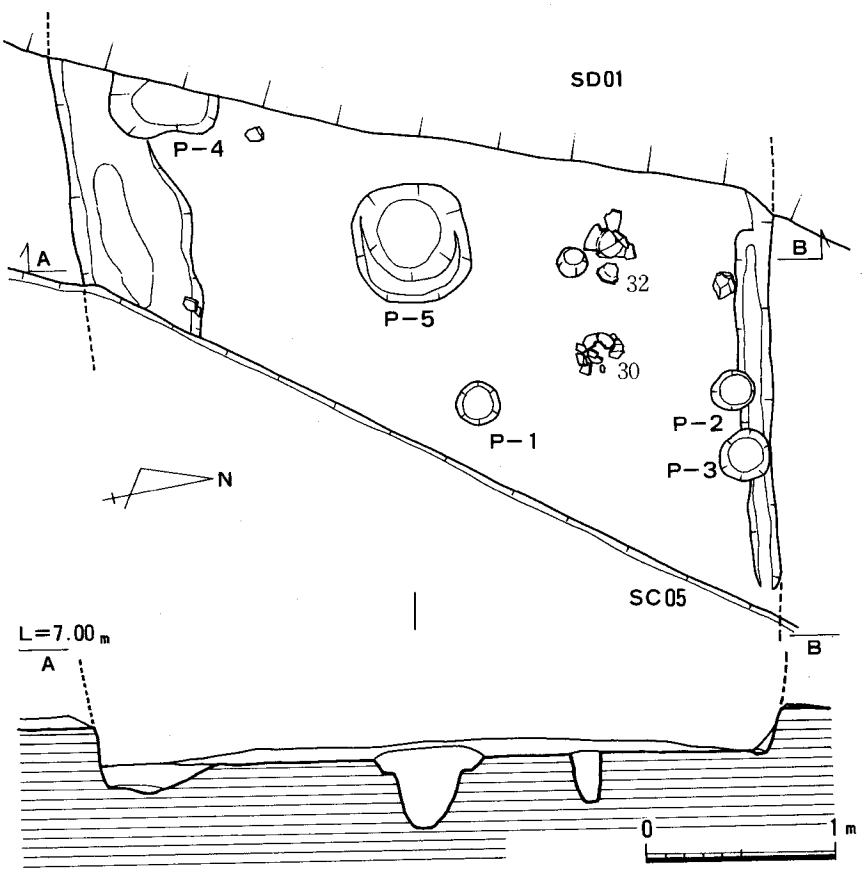


Fig 12. SC05平面及び断面見通し図 (1/40)

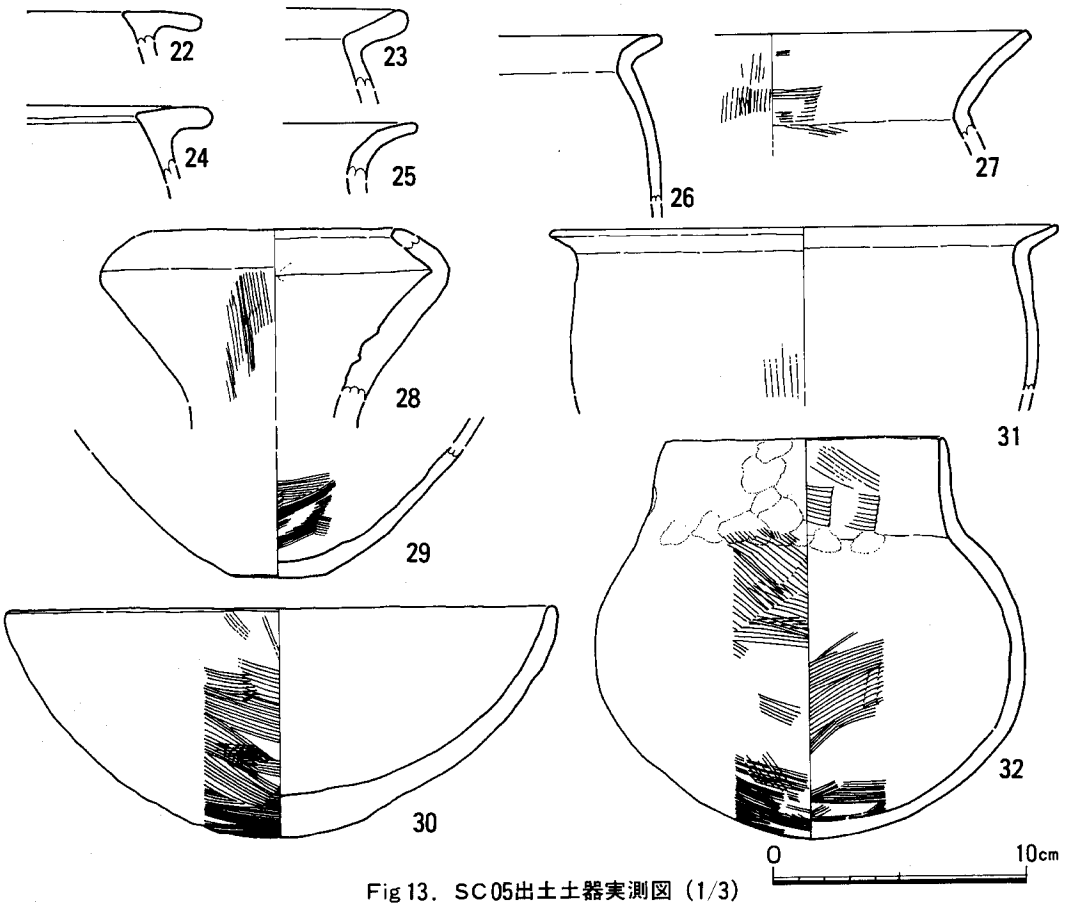


Fig 13. SC05出土土器実測図（1/3）

褐色粘質土であり、他の古墳時代の住居址とは明確に異なっていた。床面には、住居址埋土を切る５個の住穴、住居址に伴う２個の柱穴が検出された。主柱と思われる柱穴はＰ－１であり、２本柱の可能性がある。Ｐ－５は若干の焼土、木炭片等がみられ、地床炉であったと思われる。

SC05は、出土遺物からみて、弥生時代後期後半～終末の時期のものと思われる。

出土遺物　(Fig13、PL11)

出土土器は、夜臼式土器片１、弥生土器片127（短頸壺１個体分、鉢１個体分、甕７個体分、器台１個体分、不明57片）、黒曜石１片が出土している。図示した**30・32**以外はすべて埋土中の二次堆積によるものである。

22～27・31は弥生土器甕口縁片で、中期半ばのもの（**22・24**）、後期初めのもの（**23**）、後期後半のもの（**27**）に分けられる。**25**は中期初頭の小型壺口縁片。**26・31**は口縁部が逆Ｌ字状に外反し、胴がやや張るものでいずれも、外面は縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整が施さ

SC07計測値表

平面形		方　形
壁長	東壁	3.92m
	南壁	
	西壁	
	北壁	3.94m
住居址	柱穴数	(4)
P－1	径・深さ	長42cm 短30cm 56cm
P－1～2間	の距離	1.94m
P－2	径・深さ	長38cm 短15cm 51cm
P－2～3間	の距離	1.92m
P－3	径・深さ	34cm 38cm 柱根16cm
P－3～4間	の距離	1.98m
P－4	径・深さ	48cm 36cm
P－4～1間	の距離	1.9m
壁溝		
竈の位置		
出土遺物		土師器小片 数点
床面積		約14m²
主軸方位		N－3°－W

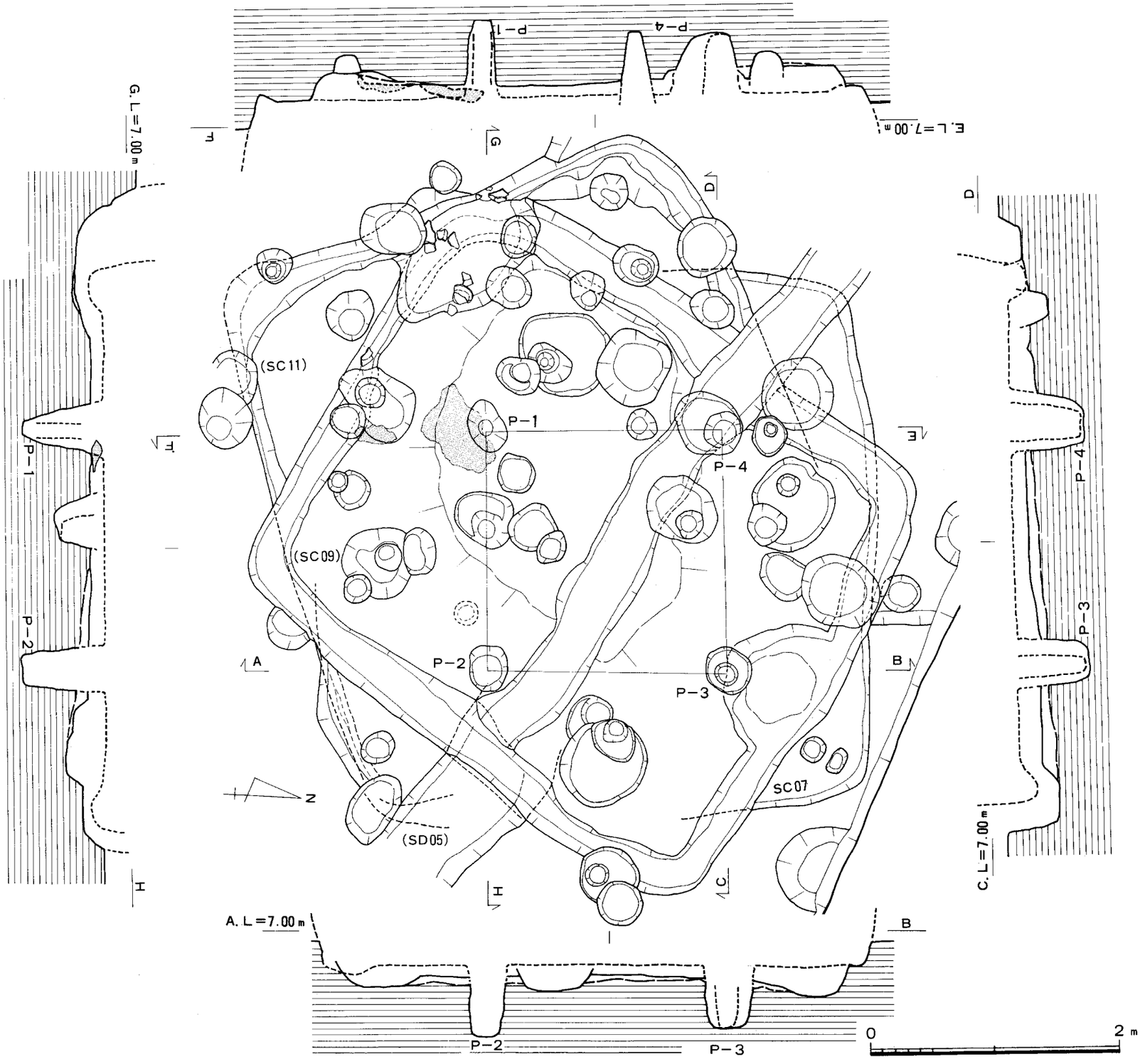


Fig 14. SC07平面及び断面図 (1/40)

れている。29は甕底部片で、やや平底に近い丸底である。外面は縦方向のハケ目が底部から口縁へ向って施されている。28は器受部が袋状をなす器台で、復元口径は約10cmを測る。胎土、焼成ともに良くなく、全体的に風化が著しい。外面には目の粗いハケ目が施されている。内面には指頭圧痕が目立つ。30は、底部が平底に近い丸底のやや大型の鉢で、復元口径は、22.2cm、器高は9.1cmである。内面は丁寧なナデ、外面は底部から口縁部へ目の粗いハケ目調整が施される。32は、口径13cm、器高15.9cm、胴部径17.2cmを測る短頸壺で、内外面とも30によく似た手法のハケ目調整が施されている。28〜30の胎土には砂が目立つが、焼成は良好。

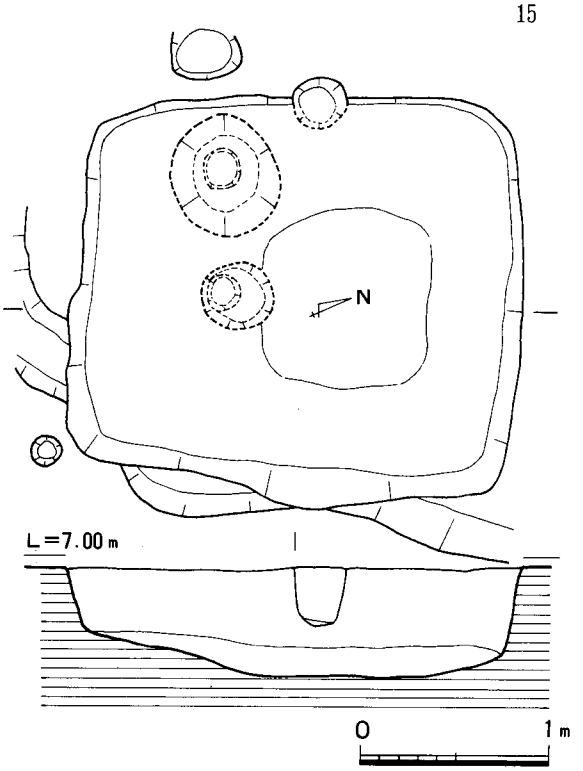


Fig 15. SC06平面及び断面見通し図（1/40）

SC06 （Fig15、PL 4）

調査区の北西部で検出された竪穴遺構で、平面形は、東南に2.4m、南北に2.17mを測る長方形をなす。北西部の遺構群の切り合い関係上からは最も古い時期のものである。各壁は床面から36〜40cmほどの高さで残っており、比較的残りは良好である。SC10によって上部は削平されているが、検出面から床面までの深さは約65〜70cmほどあり、本来はまだ深かったものと思われる。床面は中央がやや凹んでいる。柱穴は竪穴内にはみられない。埋土は、明褐色粘質土と暗褐色粘質土との混り合った土が、ほぼ均一に堆積していた。遺物は、弥生土器の小片と、土師器片が数点出土しているのみで、性格は明確でない。時期的には、SC10よりも古い古墳時代の所産と思われる。

SC07 （Fig14、PL 4）

調査区北壁際で検出された住居址である。SC09・11によって切られ各壁はほとんど消滅しており、わずかに北西・北東部のコーナーと南壁の一部が若干遺存していたのみである。平面形は概ね3.9〜4.0mを一辺とする方形であろうと思われる。壁は11〜15cmの高さで辛うじて残っている。床面の本来の状況については不明である。主柱と思われるP－1〜P－4はいずれもSC09の床面を掘下げた段階で検出されたものであり、ほぼ正方形に配されている。竈および壁溝についてはほとんど遺存しておらず、それらの配置等については不明である。他の住居址の例から見ると、竈の位置は北壁にあったと思われる。

出土遺物は土師器の小片が３点出土しているのみで時期を明確にし難いが、古墳時代後期のものと思われる。

SC08 （Fig18、PL４）

調査区北壁にかかって検出された住居址である。SC10を切っており、北西部の遺構群の中では最も新しい時期の遺構である。ただしSD05よりは古い。検出されたのは恐らく約４分の１ほどに相当する南側部分であろうと思われる。規模は明確ではない一辺が約4.20m前後の方形となる可能性がある。床面には、SC02・09同様灰～灰白色のきめの粗い粘土塊がみられた。焼土・木炭片などの火を用いたことを物語るものは混入していない。SC02の場合は南壁に一部かかってやや盛りあがっている状況だったが、本住居址の粘土塊はかなり硬くしまり平坦に分布していた。主柱は他の住居址同様、４本柱であろうと思われるが、図示したＰ－１・２は他の例と比べるとやや壁に近くなっている。これは恐らく時期差による若干の変化であろう。竈の位置はSC02・09の在り方から推定すると、北壁に位置するであろうと思われる。壁溝は確認できていない。

遺物の出土量は少なく、また二次的な堆積によるもので、住居址の時期比定は難しいが古墳時代後期以降のものと思われる。

出土遺物 （Fig17）

出土した土器は、すべて埋土中からのもので床面直上からのものはない。須恵器坏身２、坏蓋２、甕２、土師器片60が出土しているがいずれも小片で図示できるのは２点のみである。その他黒曜石片が１点出土している。

33・34はいずれも須恵器坏身片である。復元口径は**33**が11.5cmほど、**34**が11.5～11.8cmほどを測る。**34**に比して**33**の立ち上がりはやや内傾し、低くなっている。胎土・焼成ともに精良、堅緻。

SC09 （Fig16、PL５）

調査区北側で検出された住居址である。SC07・11を切り、またSB01・04・07・19、SD05・10によって切られている。平面形は長軸で4.6m、短軸で3.8～3.9mを測る長方形で、他の住居址と比べやや南北が長くなっており、北東部がやや突き出ている。SC02と同様、全体的に遺存状況は良好で、壁高は、床面から６～31cmの範囲で残っている。住居址内埋土は、地山の明褐～黄褐色粘土の小塊を多く混入する暗褐色粘質土の単純層で、SC02と同様な堆積状況である。主柱は４本柱である。径が60～70cm前後の掘方に、径15～18cmほどの柱根痕跡が確認されており、竪穴の平面形に沿うように、北東部のＰ－１がやや突き出た長方形で配置されている。主柱軸は、SC02とほぼ同方向である。壁溝は四壁に沿ってみられる。北壁ではやや浅い。幅は20～33cm、深さは床面から10～15cmほどを測る。床面はほぼ水平であるが、４本の柱で囲まれる住居址の中央を除いて、壁際へやや低くなっている。これは、SC02と同様に床

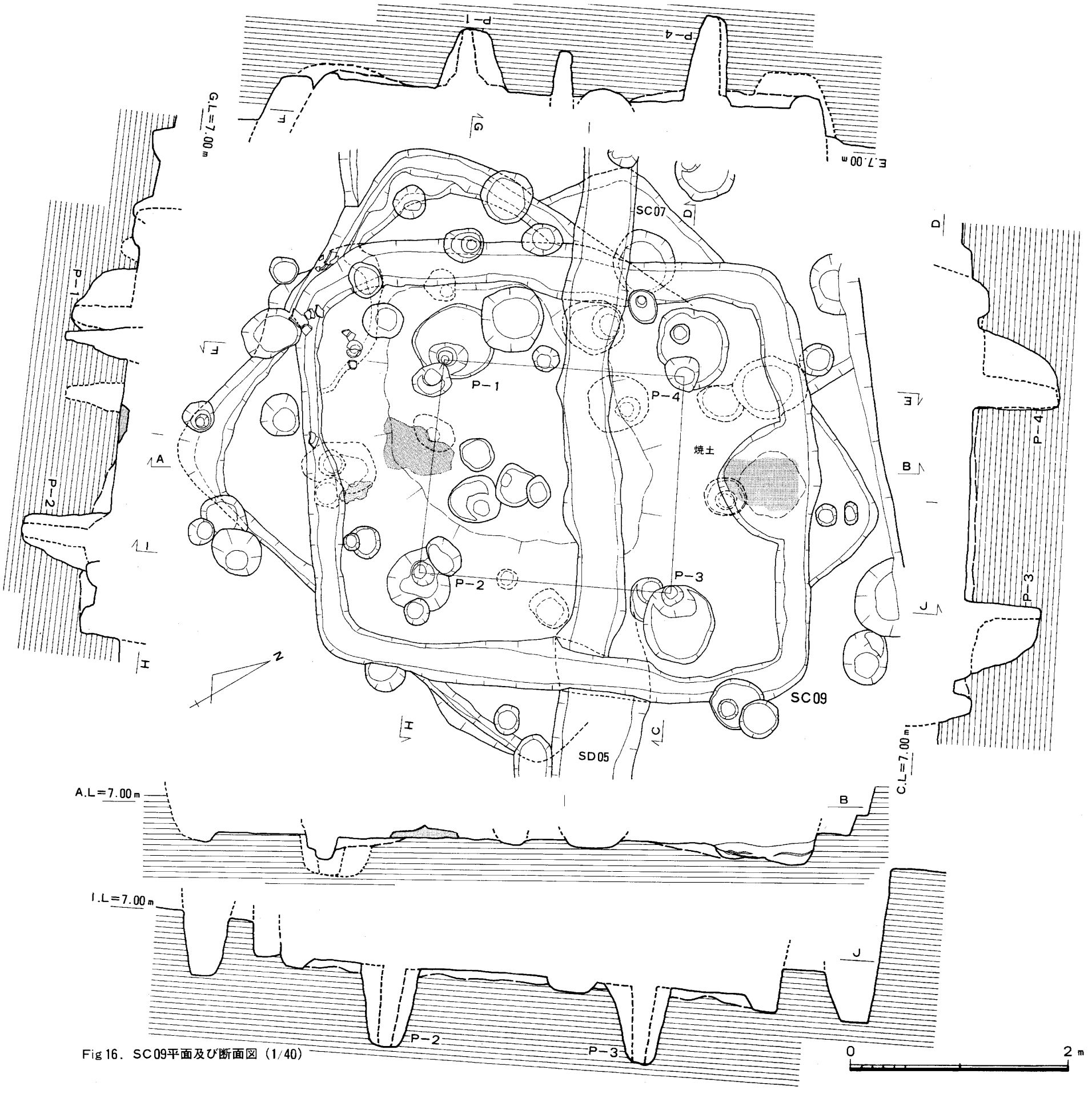


Fig 16. SC09平面及び断面図 (1/40)

SC09計測値表

平面形		長方形
壁長	東壁	4.42m
	南壁	3.42m
	西壁	4.32m
	北壁	3.74m
住居址内	柱穴数	(4)
P−1	径・深さ	長76cm 短72cm 56cm (柱根24cm)
P−1・2	間の距離	2.0m
P−2	径・深さ	60cm 74cm (柱根23cm)
P−2・3	間の距離	2.33m
P−3	径・深さ	長70cm 短66cm 71cm (柱根19cm)
P−3・4	間の距離	2.0m
P−4	径・深さ	長70cm 短60cm 78cm (柱根20cm)
P−4・1	間の距離	2.22m
壁溝		東・西・南・北壁
竈の位置		北壁
出土遺物		Fig17 35、38、41 47、48、52
床面積		15.92m²
主軸方位		N−21°40′−E

面下部の地山整形後の整地層に相当する箇所が踏み固められることによって低くなったものと思われる。竈はおそらく家屋廃棄時に壊されたものと思われ、壁体は残っていない。北壁中央部に焼土・木炭片を含む半円形状の掘りこみが残っているのみである。この竈に対峙して、南壁際の床面直上に、SC02・08同様灰白色の粘土塊がみられた。

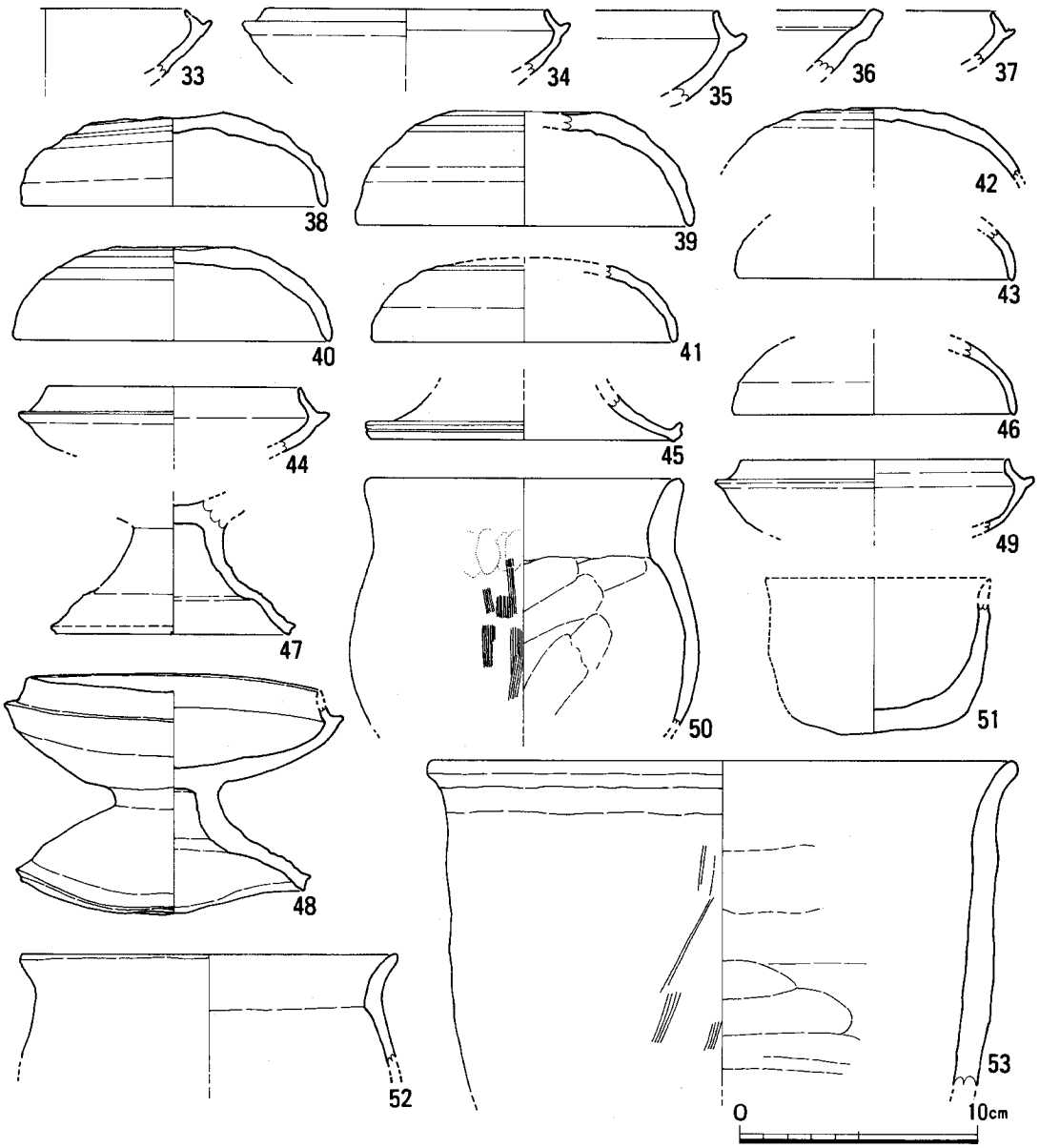


Fig 17. SC08・09・10・11出土土器実測図 (1/3) (SC08；33・34、SC09；35・38～41・47・48・52、SC10；36・37・42～46・49・50・53、SC11；51)

出土遺物から本住居址は古墳時代後期以降のものと思われる。

出土遺物 (Fig17、PL11)

住居址内埋土中から出土したものは、弥生土器(細片196、甕、壺、高坏などの小片67)、土師器小片37、甕62(7個体分ほど)、須恵器小片5。床面及び壁溝から出土したものは、弥生土器片10、土師器(小片15、甑把手1、甕片1)、須恵器(高坏17片(2個体分)、坏身片1、坏蓋片10)、黒曜石片1がある。床面での遺物の出土状況は、南西部と、北西部に比較的集中して出土した。

35は須恵器坏身、**38**〜**41**は坏蓋である。坏蓋の径は**39**が14.2cm、他は13cm前後におさまる。器高は、**39**が4.9cm、他は、3.8〜3.9cmである。胎土、焼成いずれも良好であるが、**38**はやや質が悪く、砂粒が目立つ。色調はいずれも灰色〜黒灰色である。**40**の天井部内面にはシッタの跡が残る。**47**・**48**は須恵器高坏で、色調、胎土、成形ともに非常によく似ており同じ窯で焼成されたものと思われる。いずれも焼き歪が著しい。脚部の径は**47**が10.2cm、**48**が12.7cm、高さが4.6cmと6.3〜6.5cm。**47**の坏部の口径は11.5〜12cmである。いずれも褐色の自然釉がかかり、胎土はきめ粗く砂粒が目立つ。**52**は土師器の小型甕で復元径は15.6cmを測る。やや赤みがかった胎土はきめ粗く砂粒を含む。内面はヘラケズリ、外面はハケ目調整が施される。

SC10 (Fig18、PL5)

調査区の北西部で検出された住居址である。SC06を切りSC08、SD05によって中央部を切られている。平面形は一辺4.80mほどの隅丸方形をなすと思われる。南壁は床面から15〜17cmほどの高さで残っている。主柱は4本柱で、P−1はSC06を切り、P−3はSC08東壁溝によって切られている。P−4は調査区外に位置している。南壁際の床面直上に、SC02などと同様、灰〜灰白色の粘土塊がみられた。本住居址の場合は、量的に少なく、粘土中に暗褐色粘土が混入しており、全体によくしまっている。壁溝は東・西・南壁に沿って幅15cm、深さ5〜8cmほどで検出された。おそらくSC02同様に、竈部分を残して四壁に巡っていたものであろう。床面下部の地山の整形はSC02・04・09などと同じく中央から壁へ向って掘下げられていたと思われる。

出土遺物 (Fig17)

弥生土器片60、土師器(甕片18・坩片1・甑2・高坏1・器種不明161)、須恵器(坏身5・坏蓋11・高坏脚3(同一個体)・甕2)が出土している。これらはいずれも住居址内埋土中からのもので、床面直上で出土したものはない。

37・**44**・**49**は須恵器坏身片である。いずれも胎土、焼成良好で、作りもよい。**44**・**49**の復元口径は10.8・11.5cmである。器高は3.6cm前後か。**42**・**46**は坏蓋である。**42**は胎土、焼成とも堅緻であるが、**46**は焼成がやや甘く、口径も12cm強でやや小さめである。**36**は壺の口縁部で自然釉がかかり、焼成不良。**45**は高坏脚部片で復元底径は13cmである。**36**と**45**は時期的に新しい

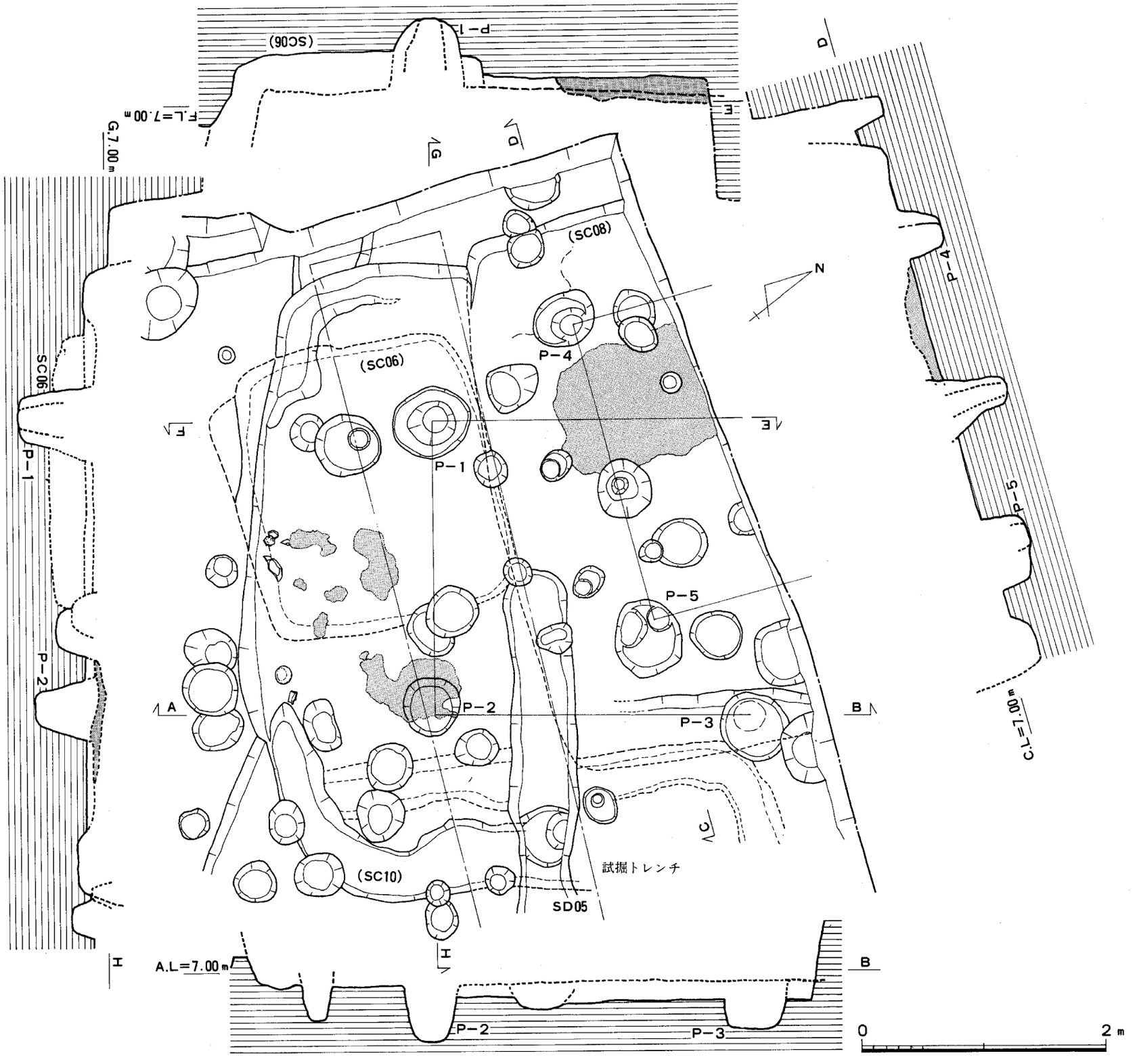


Fig18. SC08・10平面及び断面図 (1/40)

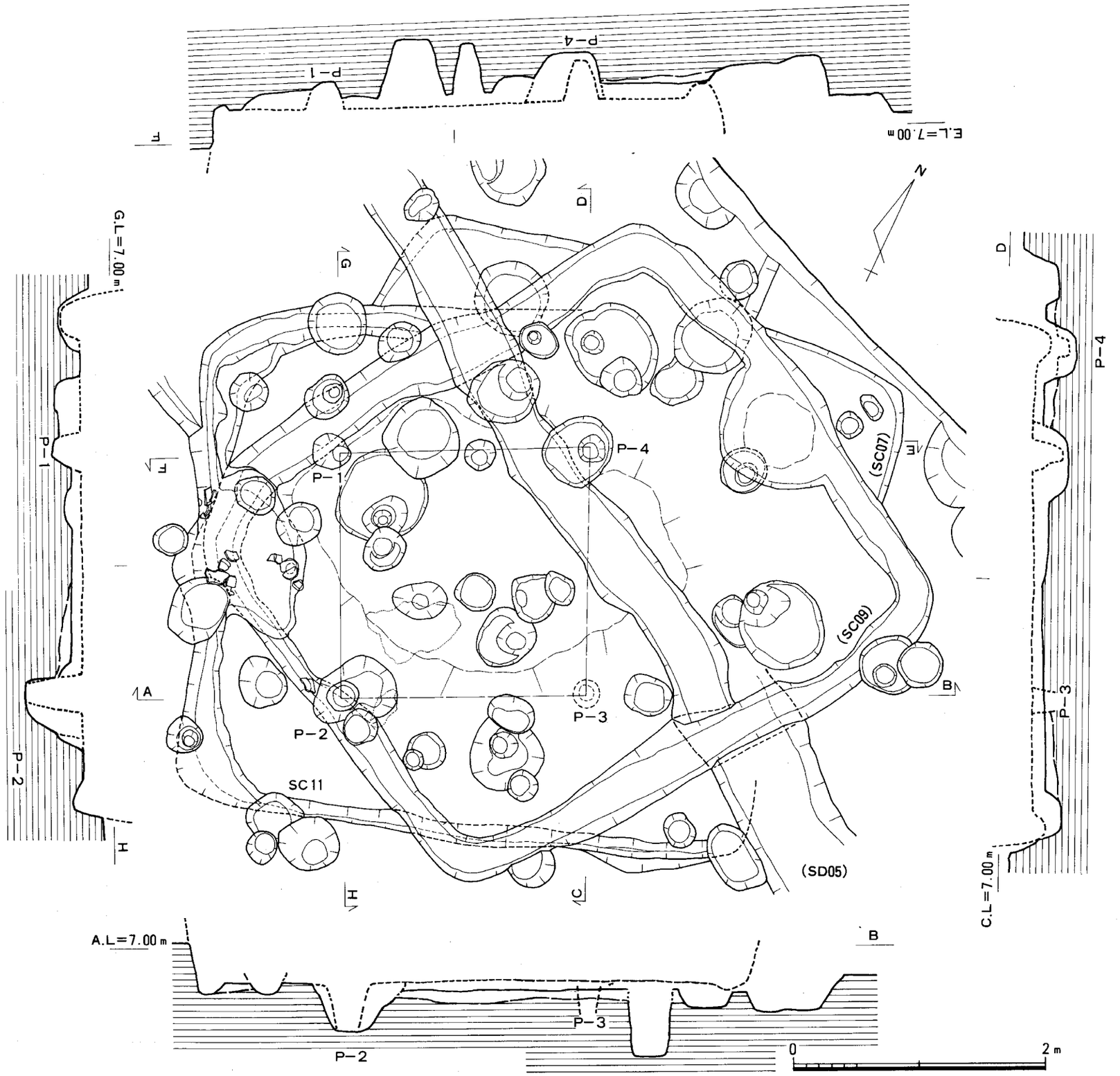


Fig 19. SC11平面及び断面図（1/40）

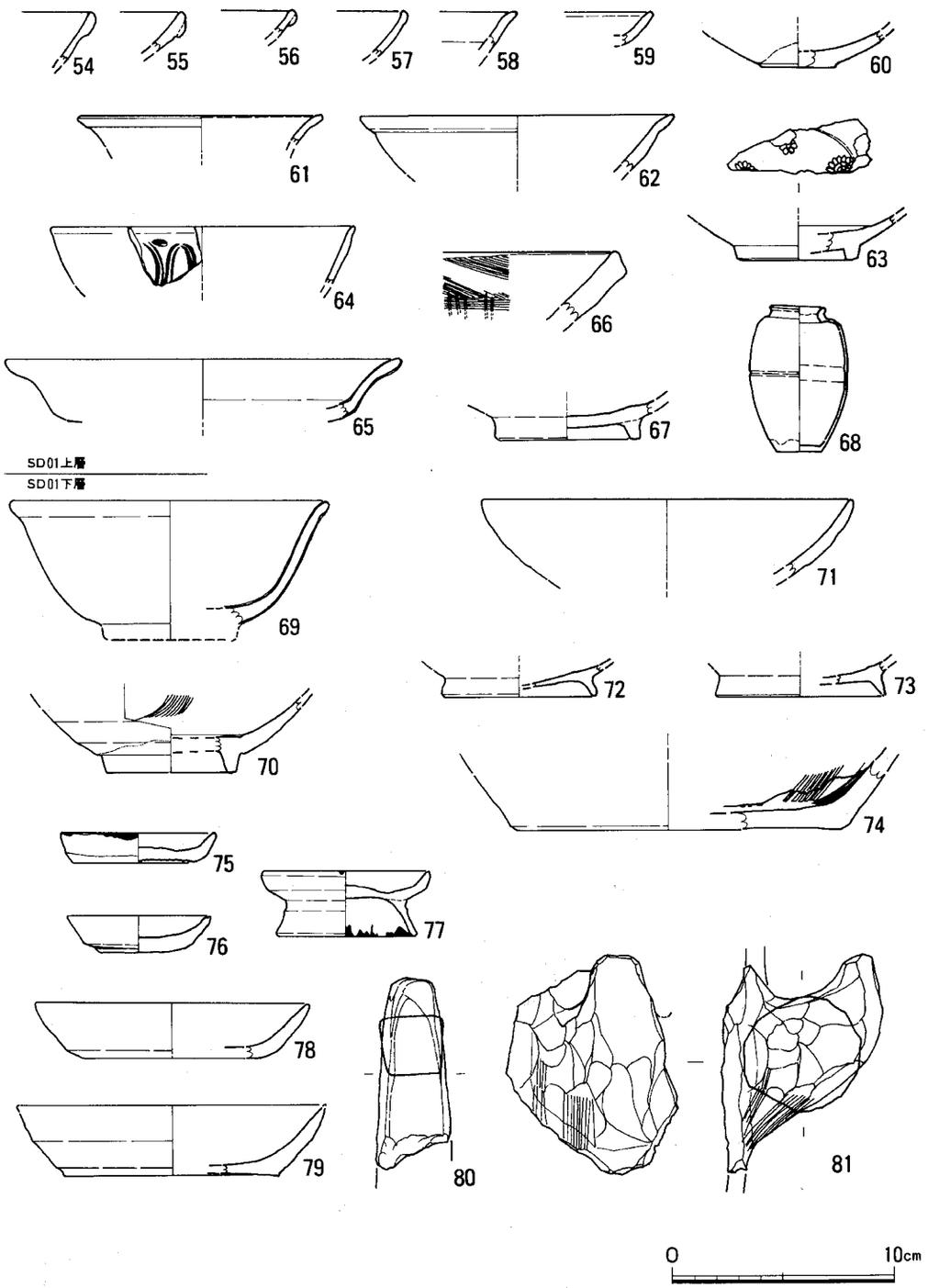


Fig 20. SD01出土土器実測図（1/3）（上層；54～68 下層～床面；69～81）

もので取上時に混入したものか。**50**と**53**は土師器壺と甕である。復元口径は**50**が約15cm、**53**が約24.5cmほどである。いずれも胎土はきめが粗く、赤褐色を呈する。内面は**50**が斜位、**53**が横位のヘラケズリが、外面は縦方向のハケ目調整がそれぞれ施されている。

SC11 （Fig19、PL 5）

調査区の北側で検出された住居址で、平面形は一辺が4mの隅丸方形をなすものと思われる。SC09によってそのほとんどは削平されており、西～南側部分の壁が辛うじて残るのみである。主柱は4本柱と思われるが、うち1本は未確認である。P－1～P－3の主柱間は、1.94～1.96mを測り、ほぼ正方形に配されている。主柱軸は、SC04とほぼ同一の方向をとる。P－1・2はSC09の壁溝掘下げ時に、P－3はSD05の床面で検出された。西壁の中央の位置に、不整半円形の浅い掘りこみがみられた。竈と思われたが、焼土、木炭等は確認されておらず、その性格は不明である。竈は確認されていないが東壁側にあった可能性がある。

出土遺物 （Fig17、PL12）

住居址埋土中から弥生土器片23、土師器片46、須恵器坏蓋1が、壁溝から小型甕片が2点出土している。いずれも2次堆積のもので、小片のため図示しえるのは**51**のみである。

51は復元口径が約9.8cm高さが約6.8cmほどの小型の土師器鉢で、口縁部はわずかに外反している。底部から胴部にかけては粗いハケ目調整が施されている。内面底部には指頭圧痕が残っている。胎土はきめ粗く砂粒を多く含む。

(2) 溝 状 遺 構

溝状遺構は5条検出された。SD01・02・04は調査区の中央から東壁際で確認されたもので、台地の縁辺部に沿って南北に続く溝である。SD03・05は先述した溝とその走向が直交しており、規模は小さい。SD01以外は残りが悪く、SD04は02によって切られ、またSD02も、戦後まもない頃まであった灌漑用水路によって、その上半分以上は削平されている。これらの溝の時期はSD01が中世鎌倉～室町期のもので、SD02・05が遡っても奈良時代後半以降、SD03・04が古墳時代後期以降のものである。

SD01 （Fig 4・付図、PL 6・8）

調査区中央からやや東寄りで検出された溝で、上端の最大幅1.80m、最小幅1.10m、下端の最大幅0.86m、最小幅0.30mで、深さはSC02周辺の検出面（標高7.10m）を基準にすると、最深部で1.70m（標高5.40m）、最浅部で1.31m（標高5.79m）を測る。断面形は逆台形で、本来の深さは2m以上はあったものと思われる。南端から10m北の位置まではN－15°－E、それから北はN－28°－Eに主軸をとり、緩やかな弧を描いて南から北へと続いている。溝内埋土は5層に分けられる。第8・10層の堆積状況から判断すると、SD01が完全に埋没する初期のころは、溝東壁上端から東側は、一段低くなっていたものと思われる。

出土遺物　(Fig20、PL13)

遺物は上層（第８・10層）と中層（第11層）、下層（第12層、床面）に分けて取り上げた。床面に密着して出土した**75・76**の他はすべて二次的に堆積したものである。出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器（火舎など）須恵質土器（捏鉢）、などの他、白磁、青磁、青白磁、陶器（黒釉、褐釉）の小片が出土している。全般にかなり磨耗している。

54～68は上層出土のもので、**54～63**は白磁、**64**、**65**は青磁、**66・67**は土師器、**68**は褐釉陶器である。白磁は、椀では口縁部が玉縁状になるもの（**55～57**）とやや外反し丸くおさまるもの（**58**）、口縁部がやや肥厚し外反するもの（**62**）、内面見込みに印花文がみられるもの（**63**）があり、皿では、口縁端部内面を施釉後掻き取っているもの（**59・61**）、底部が厚くやや上げ底気味のもの（**60**）がある。この他、外面に縦方向のヘラ片彫文がみられるものや、口縁端部を水平に引き出している椀がある。**64・65**は龍泉窯系青磁椀と皿である。青磁はこの他同安窯系の皿も若干みられる。**66**は摺鉢の口縁部、**67**は高台付椀の高台部である。**68**は肩衝茶入で、二次的に火を受け釉はくすんだ暗褐色を呈す。胎土は極めて精良で、底部は左回転の糸切り底である。口径2.6cm、胴部最大径4.4cm、器高6.7cmを測る。

69～81は下層～床面で出土。**69**は龍泉窯系青磁椀で、復元口径は14.5～15cm。**70**は白磁椀で内面には、櫛状施文具で花文を施している。**71～81**は土師器である。**71**は丸底の坏で内面はヘラミガキ。復元口径16～17cm。**72・73**は椀高台部片で復元高径は**72**が7.2cm、**73**が7.5cm。内黒土器か。**74**は６条単位の筋目を入れた摺鉢で底径は10.2cm。**75～77**は皿で**77**には高さ1.7cmの高台がつく。**75**は口径7.0cm、器高1.4cm。**76**は口径6.5cm、器高1.6cm。**77**の皿部口径は7.6cm、器高は1.3cm。**78・79**は坏で、復元口径・器高は**78**が13.2cm・2.6cm、**79**が14cm・3.1cm。内面は丁寧なナデ成形。以上の皿・坏はすべて糸切り底である。**80**は支脚片で、現存長8.7cm、幅3.2cm、厚さ3.3cm。**81**は甑把手片。基部はソケット状に体部にはめこみ、内面はヘラケズリが施されている。

SD02　(Fig４・付図、PL６)

調査区東壁にかかり検出された。SE02・03、SD04を切っている。上端幅は検出面から0.9m、深さは0.4～0.6mを測るが、本来は深さは２mほどあったと思われる。断面形は逆台形で、基底面は南から北へ除々に低くなっている。平面形はSD01と比べやや強い弧を描き、主軸方位はN－39°－E。埋土は２層確認された。いずれも水の流れがあったことを示す細砂層を数枚はさんでいる。

出土遺物　(Fig21・22、PL13)

土師器片（甕135、甑２、坏24、不明209)、須恵器片（坏身50、坏蓋63、甕・壺49、高坏２、不明54）が出土している。SE03からの流入が多いと思われる。

82～93・95は須恵器である。**82・83**は坏蓋で、天井部の丸みはほとんどなく、つまみは扁平

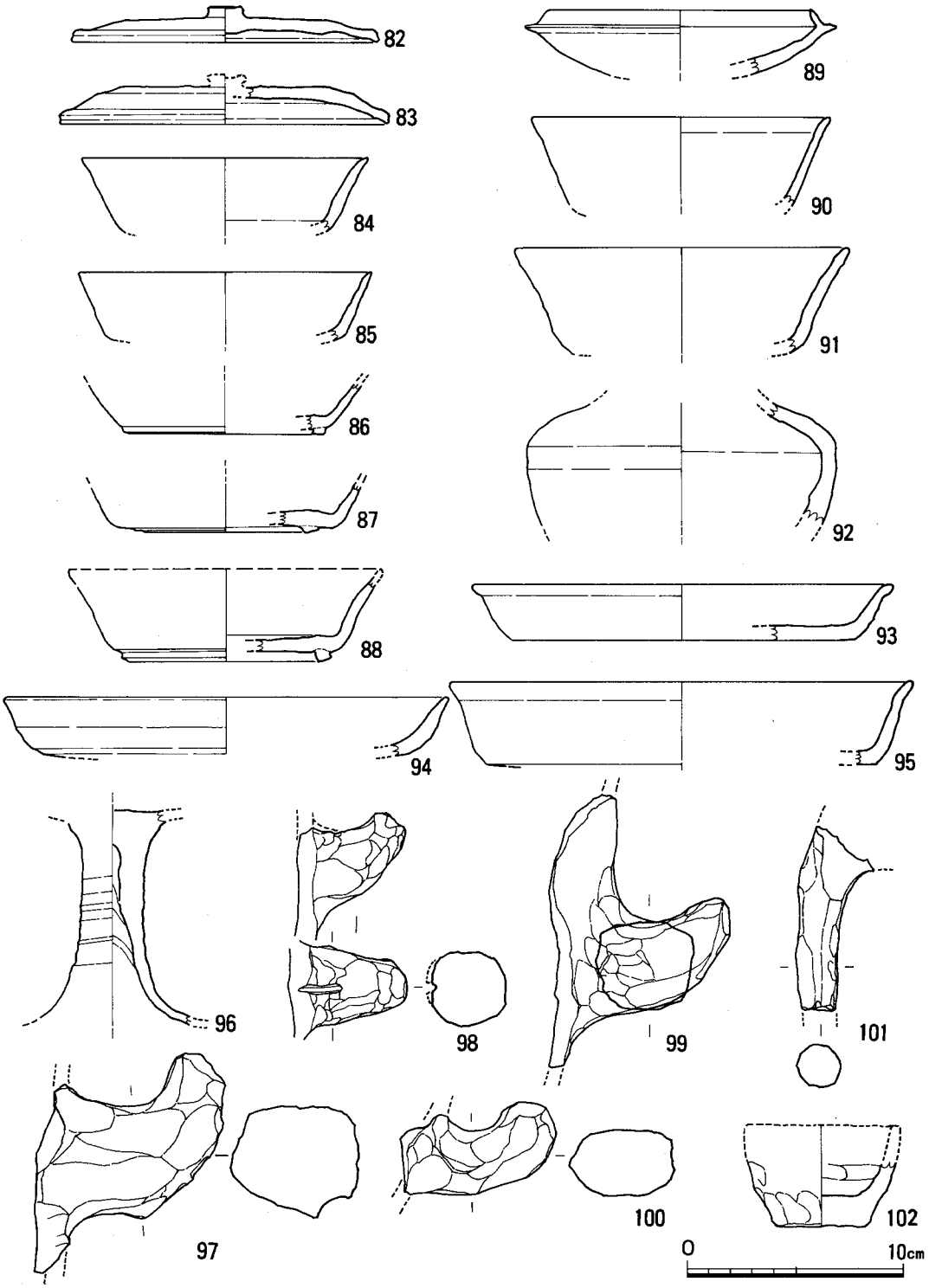


Fig 21. SD02出土土器実測図（1/3）

である。復元径・器高は**82**が14.2cm・1.7cm、**83**が15.2cm・1.8cm。**84**〜**91**は坏身である。**89**の受け部はほぼ水平で立ち上がりはかなり内傾する。復元口径・器高は12.3cm、3.3cm。他は全て高台付坏片で、直線的に体部が立ち上がり、口縁端部がわずかに外反するもの（**84**〜**86**・**90**）と、体部が内湾気味に外反し口縁端部が丸くおさまるもの（**87**・**88**・**91**）がある。高台は底部と体部との境近くに貼付。復元口径・器高は**88**・**91**が14.5〜15.4cm・4.2〜5cmの他は、口径が12.5〜13.3cm、器高が3.5cmほどにおさまる。**92**は短頸壺の肩部である。胴部径は16.6〜17cm。**93**・**95**は皿である。底部と体部との境は明瞭で、口縁部はやや強く外反する。復元口径・器高は、**93**が19.6cm・2.6cm、**95**が21.4cm・3.8cm。**96**は高坏脚片である。内面に絞りの跡が残る。**94**・**98**〜**100**・**102**は土師器。**94**は皿で復元口径20.6cm、器高3.1cm。**97**〜**100**は甑把手である。内面はいずれも縦位のヘラケズリが施されている。**102**は小型の鉢で、口径7.2cm、器高4.7cm。作りは粗く内面には指腹による、抉ったようなヨコナデ痕が残る。**101**は検出面（第5層下面）で出土したもので、瓦器鼎脚片である。**103**〜**107**は土師器甕で、口縁部が強く屈曲し内面は斜位もしくは横位のヘラケズリを施している。

SD03　（付図、PL 7）

調査区の北西部で検出された溝で、長さ4.47m、幅0.4〜0.5mを測るが、本来は東西にさらに延びていたと思われる。方向性と位置からSC02と09を画する溝の可能性がある。断面形はU字形で主軸方位はN－45° 50′－Wを向きSD04とほぼ直交する。

出土遺物　（Fig22）

出土遺物は少ない。弥生土器細片21、土師器甑底部1、須恵器坏蓋片3点が出土している。

108は甑底部片で内面は斜位のヘラ削り、外面はナデ調整。底部径9.6cm。焼成良好。

SD04　（付図、PL 6）

調査区東南部で検出された溝で、SD02によって切られている。暗褐色〜灰褐色粘質土を埋土とする。長さ8.35m、幅0.60〜0.67m、深さ0.2〜0.3mを測る。断面形は、ほぼ直角に近い壁の立ち上がり方からみてU字形に近いと思われる。

出土遺物(Fig22)

出土遺物は弥生土器（甕23・高坏2・不明91)、土師器（甑1・不明11)、須恵器（坏身2、蓋5、高坏1）が出土している。

110〜**113**は弥生時代中期の甕と高坏である。**109**は須恵器坏身で、復元口径は12.4cm。立ち上がりはかなり内傾している。**114**は甑把手で断面は扁平である。内面は縦方向のヘラケズリ。

SD05　（付図、PL 7）

調査区北側で検出された溝で、SC08〜11をすべて切っており、SB02・19から切られている。長さ7.9m、幅0.75〜0.90m、深さ0.50〜0.60mを測る。主軸はN－57°－WでSD02とは95°ほどの角度をなしている。東端は消滅しているが方向性からSD02との関連が強い。

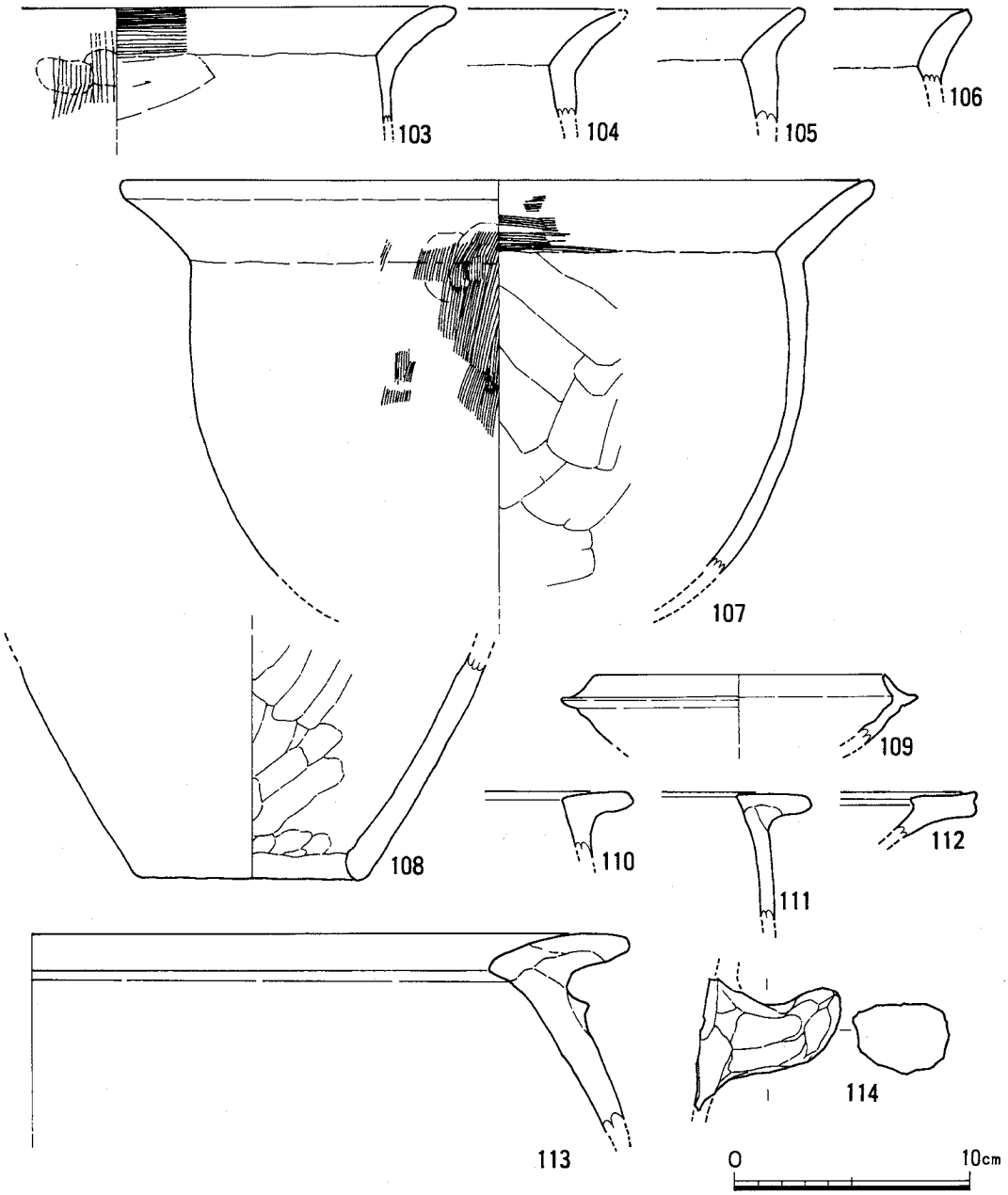


Fig 22. SD02・03・04出土土器実測図（1/3）（SD02；103～107 SD03；108 SD04；109～114）

出土遺物　(Fig23、PL13)

弥生土器片33、土師器片20、須恵器片（坏身10、坏蓋13、高坏２、甕５、不明３）が出土。**115・116**は須恵器坏蓋で、**116**には扁平なつまみがつく。**115**の復元口径・器高は15.8cm・

3.3 cm。117～119は坏身で、復元口径・器高は117が12.1cm・4.2cm、118が12.6cm・4.3cm、119が14.2cm・3.8cm。いずれも焼成・胎土とも堅緻。ロクロは右回転である。120は甕で、内面は横方向のヘラケズリを施し、口縁部はやや強く外反する。

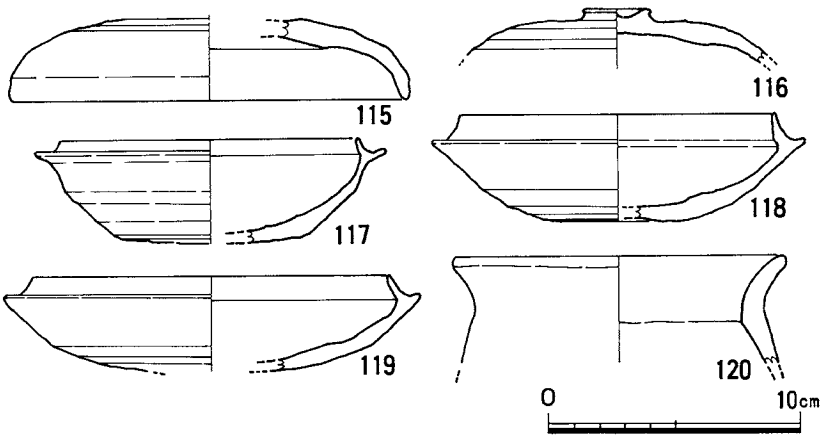


Fig 23. SD05出土土器実測図（1/3）

(3) 井　戸

調査区の東側で3基が切り合って検出された。いずれも素掘りの井戸で、円筒状に3mほど掘り下げている。先後関係はSE02→03→01の順で新しくなる。奈良～平安時代初期頃のもの。

SE01（Fig24、PL 7）

SE02埋没後に掘削されたもので、上部はかなり崩落している。井戸の掘り方は直径が0.45～0.5mの円筒形で、深さは検出面から2.82mを測る。井筒などは確認されていない。一時的に埋め戻されたものと思われる。出土遺物は上層から土師器椀などが数点出土している。

SE02（Fig24、PL 7）

調査区北東部で検出されたもので、SD02、SE03から切られている。井戸掘り方は上端が1.2～1.3m、下端が0.4～0.5mを測る円筒形状をなす。深さは2.45m。出土遺物は少ない。

SE03（Fig24、PL 7・8）

井戸掘り方は2段掘りとなっており、掘り方中位には平坦面を作り出している。平坦面には径が20cm前後の柱穴が5個みられた。北側には作業台を思わせる扁平な礫もみられた。下段の掘り方上端径は1.8m前後、下端径は0.8～0.9mで、検出面の深さは3.5mを測る。遺物は南壁～中央部にかけて、一時的に投棄された状況でまとまって出土している。井筒があった可能性がある。

SE01出土遺物（Fig25、PL13）

SE01～03出土の須恵器はTab 4、井戸出土須恵器観察表に詳細を委ね、ここでは概略を述べる。

121～125、127は土師器、他は須恵器である。121は口径13.7cm、器高6.1cmを測る椀である。

内外面ともに器面が粗れている為調整不明。体部は下位が若干内湾するが、ほぼ直線的にのびていく。体部と底部の境は不明瞭で、高台は底部端付近につく。高台は細身で、直線的に外方へのび、端部は細く、丸く収める。色調赤褐色、胎土砂粒を少し含む。焼成良好。122は托の

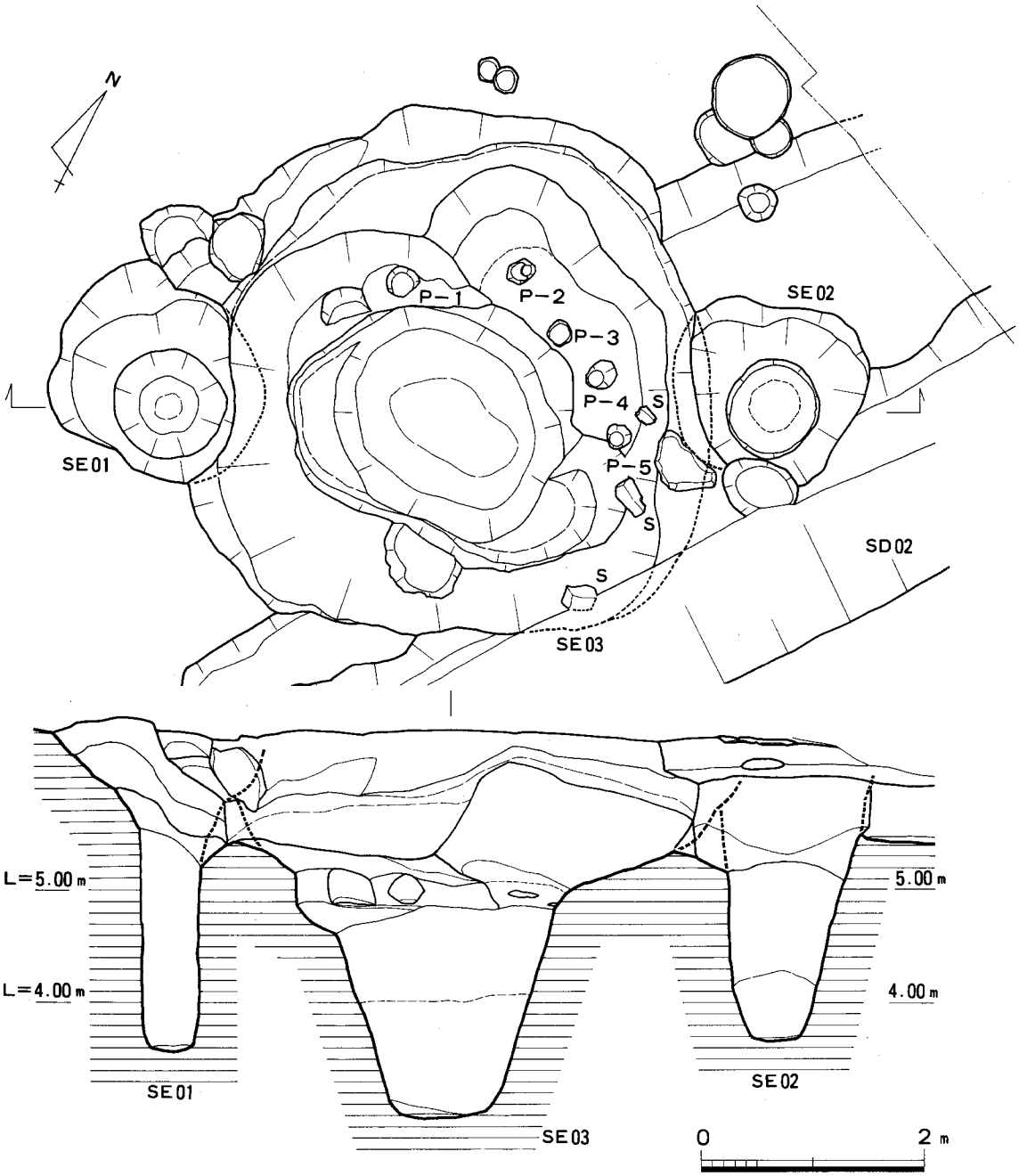


Fig24. SE01・02・03平面及び断面見通し図（1/60）

高台である。高台部外面はほぼ垂直に立つが、内側は若干湾曲しながら外方へのびる。残存部はすべてヨコナデ。**123**は器高2.2cmの皿である。残存部すべてヨコナデ。**124**は蓋のつまみである。上面は中央部を若干つまみあげる程度で、平坦に近い。色調は**122・124**が淡赤褐色、**123**は淡黄褐色。胎土ともに精良。焼成ともに良好。**125**はミニチュアの手捏ね土器である。口径3.4～4.0cm、器高が2.4cm内外の椀の内面中央に幅1.2cmの帯を掛けわたす。中には歪な球塊が2個以上入る。いかなるものを表わしているかは不明。色調淡褐色。胎土微砂粒を多く含む。焼成良好。**126**は坏身片である。体部と底部の境よりやや内側に細身の高台を貼付ける。**127**は推定口径31.2cmを測る甕である。胴部はあまり張らない器形である。外面は口縁部がヨコナデ、胴部はタテ方向のハケ目調整後、軽いナデ。ハケ目は1cm単位9本の原体を用いる。内面は口縁部ハケ目調整後ナデ。胴部は頸部近くをヨコ方向に、以下をやや右上りのタテ方向に、ヘラ削り。色調淡褐色。胎土微砂粒を含む。焼成良好。**128**は推定口径21.9cmを測る鉢である。体部と底部の境の剥離からこの位置に高台状のものがつく可能性もある。体部はほぼ直線的にのび、口縁端部はほぼ平坦。色調、胎土等は土師器に近い。**129**は鉢の底部である。

SE02出土遺物（Fig、26）

130は須恵器、他は土師器である。**130**は坏蓋片である。**131**は甑の把手で、上面は若干凹面をなす。一部に黒変有り。色調淡赤褐色～淡灰褐色。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。焼成良好。**132**は短い口縁部がわずかに外反した甕である。推定口径25.8cmを測る。外面はハケ目が

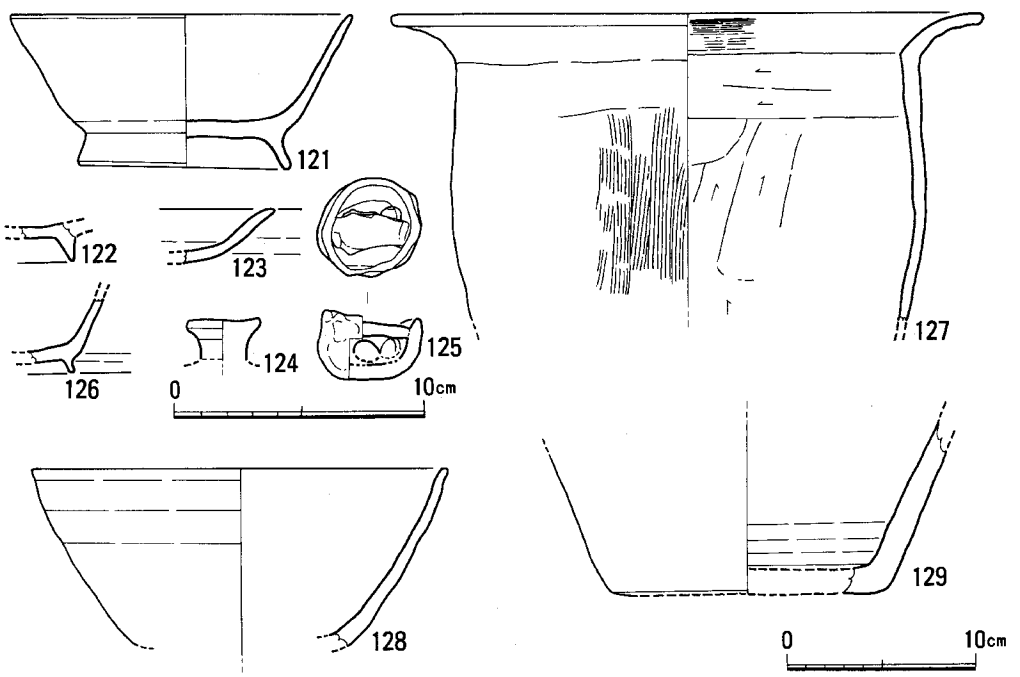


Fig25. SE01出土土器実測図（121～125；1/3，127～129；1/4）

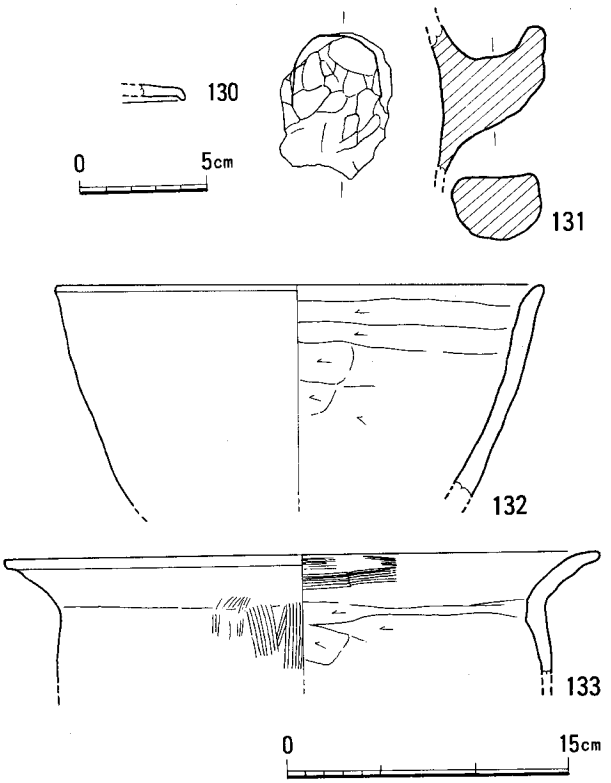


Fig 26. SE02出土土器実測図（130；1/3，131～133；1/4）

わずかに残る。内面は口縁部がヨコナデ、胴部はヘラ削りを施す。色調は外面淡褐色、内面淡黄褐色。胎土は砂粒を多く含む。焼成良好。**133**は推定口径31.4cmを測るが小片の為誤差が大きいおそれがある。外面は口縁部がヨコナデ、胴部はタテ方向のハケ目を施す。内面の口縁部は、1cm単位9本～10本の目の細かいハケ目を施こした後ヨコナデ。胴部はヘラケズリ。色調淡黄褐色。胎土は砂粒が比較的少ない。

SE03出土遺物

多量の遺物が出土したが、完形になるものは3点のみで他はすべて欠損している。おそらく投棄されたものであろう。遺物中には弥生時代以降の土器片が混入するが古墳時代以前のものについては小破片の為、図示するのは割愛する。

須恵器（Fig28～32、PL13～15）

坏の**134～139**は住居址群の営まれた時期の所産のものが混入したのであろう。

坏蓋（**140～159**） 法量から3類に分けられる。〔Ⅰ類〕（**140・141**）は口径13cm弱、器高は**140・141**ともにつまみを欠損するが器高1.4cm～1.8cmになろう。〔Ⅱ類〕（**142～146・150～156**）口径14.7cm～16.6cm、器高1.5cm～3.5cmに含まれるもので、最も量が多い。〔Ⅲ類〕（**147～149・157～159**）口径19.9cm～21.0cm、器高は3.7cm～4.0cm。**149**は天井部中央付近が低くなりつまみを加えた推定器高は2.0cmである。口縁部は、やや外方にのびるもの、直に折れ曲がり断面三角形を呈するもの（**141・143・146**等）、端部が丸いもの（**148・151**）などの差違があるが、法量による分類、器形、調整方法など加付した相関関係は見出せなかった。つまみは上面中央を若干つまみあげた程度の平坦に近いものが多い。

坏身（**160～201**）は、高台のつかないもの（**160～171**）とつくもの（**172～201**）に大きく分類できる。高台のつかないものは、つくものの法量を参考にすれば**160**の口径11.8cm器高3.4cmの小形のものと**160**以外の口径が12.8cm～14.7cm、器高2.9cm～4.4cmのものとに分けられるか

もしれない。高台のつくものは坏蓋同様に３タイプに分類した。〔Ⅰ類〕（172・177～179）は口径11.3cm～12.0cm、器高3.3cm～4.4cm、〔Ⅱ類〕（173～176・180～187・192～196・198）は口径12.7cm～15.0cm、器高3.5cm～4.7cm〔Ⅲ類〕（188～191・197・199～201）は口径15.2cm～18.1cm、器高3.9cm～5.8cm。全体をとおして体部と底部の境は不明瞭で、その境よりやや内側に高台をつけたものが多い。しかし173・176のように内側につけたものもあり器高も口径に対してやや低い感じを受ける。さらに体部の立上り方、高台の形態に差違があるが明確な分類はできなかった。

Ⅲ（202～208） 法量から〔Ⅰ類〕（202～204） 口径14.5cm～15.3cm、器高1.9cm～2.3cm、「Ⅱ類〕（205・206） 口径17.2cm～17.7cm、器高2.3cm～2.7cm、〔Ⅲ類〕（207・208）口径18.6cm～19.2cm、器高1.6cm～2.2cmのものに分けられる。

高坏（209～221） 207は住居址群の時期を示すものであろう。210は他と比べ坏部の口縁部や端部にシャープさが感じられる。坏部の口縁部外面は鋭く屈曲してやや内側にたちあがる。脚端部はほぼ垂直に立ち、断面三角形をなす。211～214はほぼ同じ法量をもつが脚端部に差違が認められる。211・213の端部はほぼ垂直に立ち、断面三角形を呈す。212の端部外面は外湾しながらやや内側に立ちあがる為、裾部との境に鋭い稜をもつ。214は丸みをおびたものとなる。215・216は小形のもので、215の器厚は３mm程度の薄いものである。218は内面口縁部が丸みをおび、やや外方へ延びる。217・219～221は類似し口縁端部上面が平坦をなす。

その他（222～232） 222、223は長頸小壺、224は坩、225は長頸壺、226は壺蓋、227は短頸壺、229・230は甕片、231は鉢、232は甕片である。細部の説明は別表に委ねる。228は器形不明である。類似する器形に鉢、摺鉢等が考えられるが、外面底部は接合部から剥離したことをしめす割れ目で後者の用途は認めがたい。おそらく残存する底面より広い台部がつくものと考えられる。口縁部は内傾しその端部上面はほぼ平坦である。

瓦（233、234）ともに平瓦片である。233の凹面は布目圧痕と幅0.7cmの狭い模骨痕が認められる。凸面は平行タタキ痕が残る。色調は淡赤褐色。胎土精良。焼成軟質。234の凹面には布目圧痕が明瞭に残るが、凸面のタタキ痕はナデ消される。色調灰色。胎土精良。焼成良好。

土師器（Fig33～35、PL16・17）

坏（235） 上面中央部を少しつまみあげた擬宝珠である。色調淡黄褐色。胎土精良。

鉢（236～239） 236は直口で、口縁端部付近は内外面ヨコナデ。体部外面タテハケ後軽いナデ、内面ヘラ削り。色調淡黄褐色。胎土砂粒を多く含む。焼成良好。237の口縁部は外面が直口し、内面はわずかに外反する。口縁部内面ヨコナデ。体部外面と口縁部内面には粗いハケ目（１cm単位５～６本）が残る。体部内面ヘラ削り。色調は外面淡赤褐色で一部黒変。内面黒褐色。胎土砂粒を多く含む。焼成良好。238は短い口縁部がわずかに外反する。口縁部付近内外面ヨコナデ。体部外面ナデでハケ目は認められない。体部内面ヘラ削り。色調淡黄褐色。胎土

砂粒を多く含む。焼成やや軟質。239は焼塩土器である。型づくりによって作られ、内面には1㎝単位10本の布目痕が認められる。色調灰褐色。胎土精良。焼成硬緻。

甕（240～258） 240は短い口縁部がわずかに外反する。口縁部内外面はヨコナデを施す。241は椀形に近い器形に短い口縁部がつく。胴部外面はナデ、底部付近はヘラ削り。底部外面には葉脈状の圧痕が残る。内面は一部ヘラ削りが認められる他はナデを施す。色調は淡黄褐色。242は短い口縁が外反する手捏ね土器である。243～248は小形の甕である。器形は大形甕と近似し、調整方法は口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ目調整後ナデ、内面ヘラ削り。底部内外面ナデを施す。243の口縁部はひらき方が小さく、直線的に外方へのびる。胴部は張らず底部は扁平に近い。胴部の中位に、一箇所のみ把手がつく。色調淡黄褐色。胎土砂粒をやや含む。焼成良好。244は口縁部が湾曲しながら大きく開き、胴部は少し張る。底部は扁平に近い。底部外面のハケ目はナデ消される。色調淡赤褐色。胎土は砂粒をあまり含まず精良。焼成やや軟質。245の口縁部はほぼ直線的に外方へのびる。口縁部と胴部の境は不明瞭で、胴部はほとんど張らず鉢に近い。外面は丁寧なナデが施され、ハケ目はほとんど残らない。色調黄灰色。胎土精良。焼成良好。246、247、248は近似する器形をなす。口縁部はともに短いが、246は若干湾曲しながらのび247は直線的である。ともに外面の口縁部と胴部の境は不明瞭で、胴部はわずかに張りだす。底部は扁平に近く、底部外面のハケ目はナデ消される。内面は底部中央付近までヘラ削りが施され、底部中央はナデ。色調ともに赤褐色。焼成ともに軟質、胎土ともに細砂粒を多く含む。

249～258の大甕は、およそ以下の3タイプに分けられる。口縁部が外方に大きく開き胴部が張るもの（249）。胴部が少し張り卵形を呈すもの。この中には258のように把手付甕が含まれる。（250、251、253、258）。胴部がほとんど張らず長胴形を呈すもの（252、254、256、257）。調整方法は3タイプともにほぼ変らず、口縁部付近の内外面はヨコナデ、胴部外面はハケ目調整後軽いナデ、胴部内面はヘラ削りを施す。

249は口縁部外面が短く直線的に、内面が外湾してのびる。外面口縁端部近くに一条の沈線がめぐる。胴部は張り出し、その上半に段を有す。外面の口縁部から胴部の段付近まではヨコナデ。外面胴部には目の粗いハケ目（1㎝単位5～6本）が施されているが、ほとんどナデ消される。色調褐色。外面胴部に一部煤が付着する。胎土砂粒を多く含み粗い。焼成良好。

250、251、253は器形が卵形を呈すものであるが、胴の張り方、法量等に差違がある。250は大型で推定口径34.8㎝を測る。色調淡黄褐色～赤褐色。外面に一部煤が付着。胎土砂粒を多く含む。焼成良好。251は胴部最大径が250、253に比べやや下位にある。色調は残存部外面ほぼ全面に煤が付着し、黒褐色を呈す。内面淡黄褐色。胎土砂粒を多く含み粗い。焼成良好。253はやや胴部の張りが小さいが、器形は卵形に近いものであろう。胴部外面は比較的ハケ目が残る。色調淡褐色。外面に一部煤が付着。胎土砂粒を多く含む。焼成良好。

252は他の長胴形のタイプのものと比べ細部に差違が認められる。口縁端部が肥厚し、頸部はゆるやかである。胴部外面には1㎝単位5本の目の粗いハケ目がわずかに残る。口縁部から頸部付近にかけての器厚は比較的厚い。色調淡黄褐色。胎土砂粒を多く含む。焼成良好。254は256、257と近似するが口縁部がややたちあがり、その端部がわずかに肥厚する。色調淡褐色。胎土砂粒を少し含む。焼成良好。255は口縁部が比較的長く、その外面はほぼ直線にのびる。胴部はやや張るが、残存部が少ない為、器形は不明。色調灰色。胎土砂粒を少し含む。焼成良好。256は図面上、唯一完形となる。口径27.6㎝、器高30.8㎝を測る。口縁は外方へ大きく開き、胴部はわずかに張る程度で長胴をなし、底部は扁平に近い。胴部外面は胴部下位までひきおろしたタテハケが施され、底部近くはナデ消される。胴部内面は4段ほどのヘラ削り。底部内面は指頭痕が明瞭に残る。色調灰色。胴部外面に一部黒変を有す。胎土砂粒を少し含むが密。257は256とほぼ同じ器形をなす。胴部外面はやや左上りのタテハケ。底部もハケ目が残る。色調灰色。外面胴部中位から底部は黒変。胎土砂粒を多く含む。焼成良好。258は把手付甕である。口径30.1㎝を測る。胴部外面は目の細かいハケ目（1㎝単位10〜11本）を施した後ナデ。色調淡黄褐色。胎土細砂粒を少し含む。焼成良好。

把手（259〜262） 総数42個のうち、259の小形のものから262のような大形のものまで出土した。多いのは261のように断面が隅丸長方形で先端部がわずかに上方へのびるものである。

土鍋（鉢）（263、264） 263は口縁部はわずかに外湾しながらひらく。口縁部と胴部の境は明瞭で、胴部は底部に向けてわずかにすぼまる。底部は、胴部との境が不明瞭ながらも成形される。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面は器面が粗れて不明瞭であるが、胴部上半はタテハケ、下半から底部にかけては斜位〜横位のハケが施される。胴部内面は横位ないしわずかに左上がりのヘラ削り。色調は褐色。胎土砂粒を多く含み粗い。焼成良好。264は口縁部と胴部の境が不明瞭で胴部は底部との境なくすぼまる。口縁部内外面ヨコナデ。胴部上半タテハケ。下半は横位〜斜位のハケナデ。胴部内面は横位からわずかに左上りのヘラ削り。色調外面淡赤褐色、内面褐色。胎土砂粒を多く含む。焼成良好。

カマド（265） 移動式のカマドである。釜孔の口径は20㎝前後、器高は誤差が大きい可能性があるが、28㎝に復元した。胴部は上方がすぼまる筒形を呈し、残存する庇は高位になるに従い上方へそり上る。外面の胴部上半はタテハケ後ナデ。下半は明瞭にハケ目が残る。接地する端部には指頭痕が認められる。内面の胴部上半はナデ。下半は粗いヘラ削り。色調淡赤褐色。煤等の付着は認められない。胎土砂粒を多く含む。

SE01、03出土木器（Fig27、PL19）

1はSE01出土、他はすべてSE03出土である。材質は鑑定を受けていないので不明である。

1は曲げ物で、両辺から斜行する刻みが施される。材質は檜であろうか。**2**は桶の底板である。径12.2cmを測る。残存する周縁部には3箇所、釘穴が認められる。**3**は杷の刃部である。又部はV字状で、刃部断面は長方形である。**4**は板材片と考えられる。側縁の一部が湾曲に削られ、体部に1ないし2箇所穿孔が認められる。板目取り。**5**はヘラ状の木製品である。片方端部がヘラ状の器形を呈すが削り痕は不明瞭。他端は先細りの断面方形に削り出す。器長32.0cmを測る。**6**は木柄であろう。片方端部をやや先細りに削り出しているが、他端は折損する。残存長34.3cmを測る。材質は樫か。**7**は出土状況から杵とも考えられる。搗部と握部の境と思われる箇所を削り出しているのがわずかに認められる。しかし両搗部端及び握部が折損している為、器形は不明。

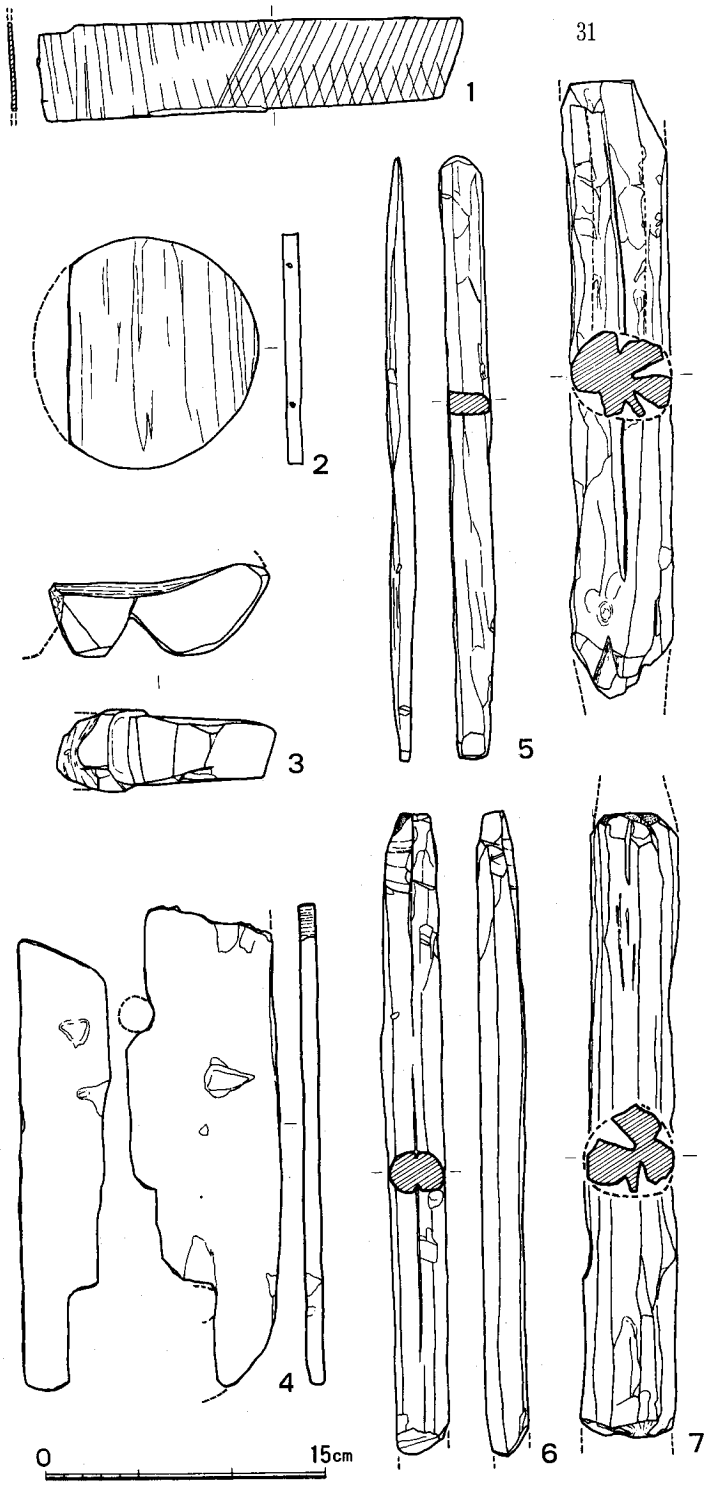


Fig27. SE01・03出土木器実測図（1/4）

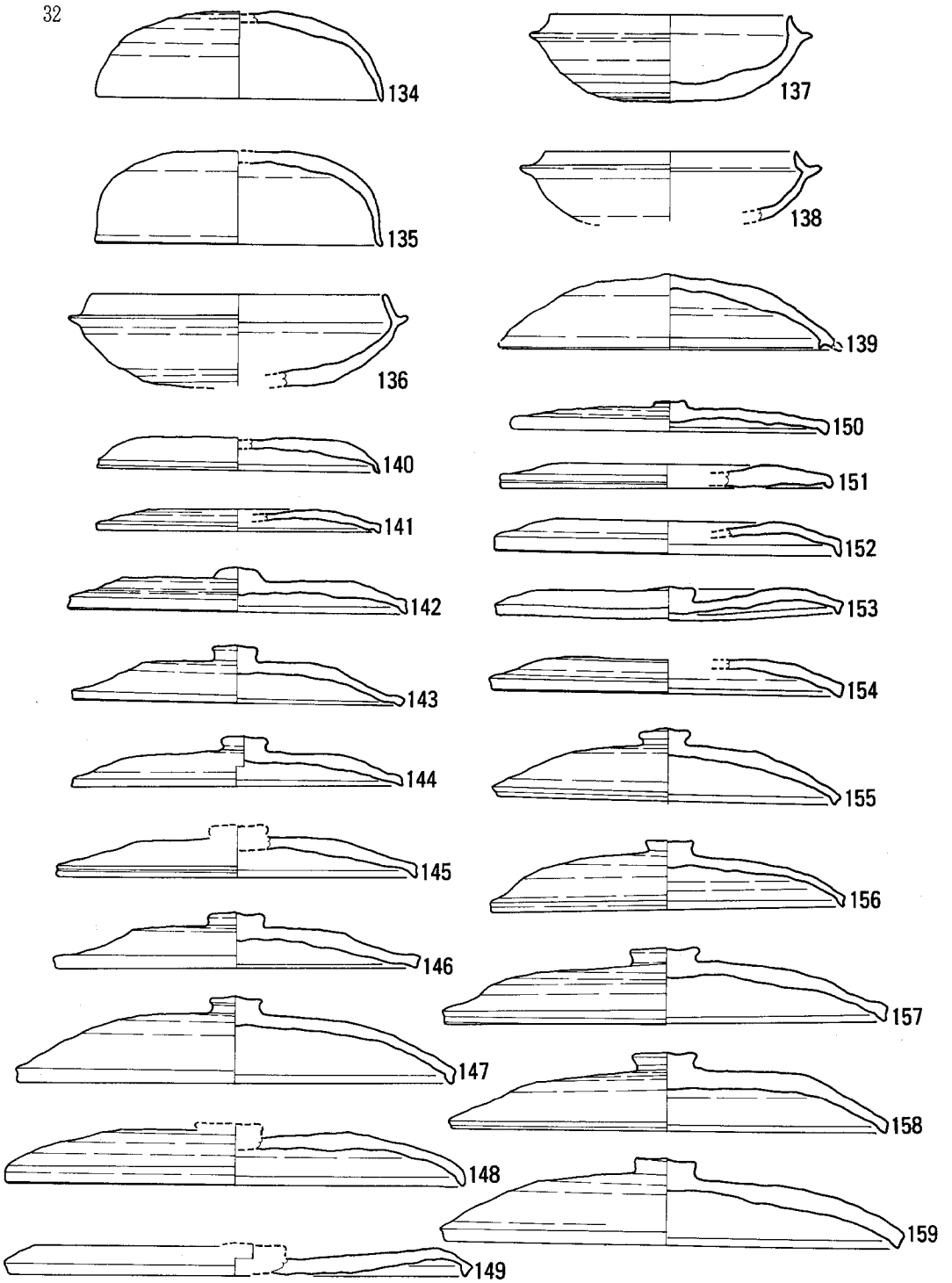


Fig28. SE03出土須恵器実測図(1) (1/3) 0 10cm

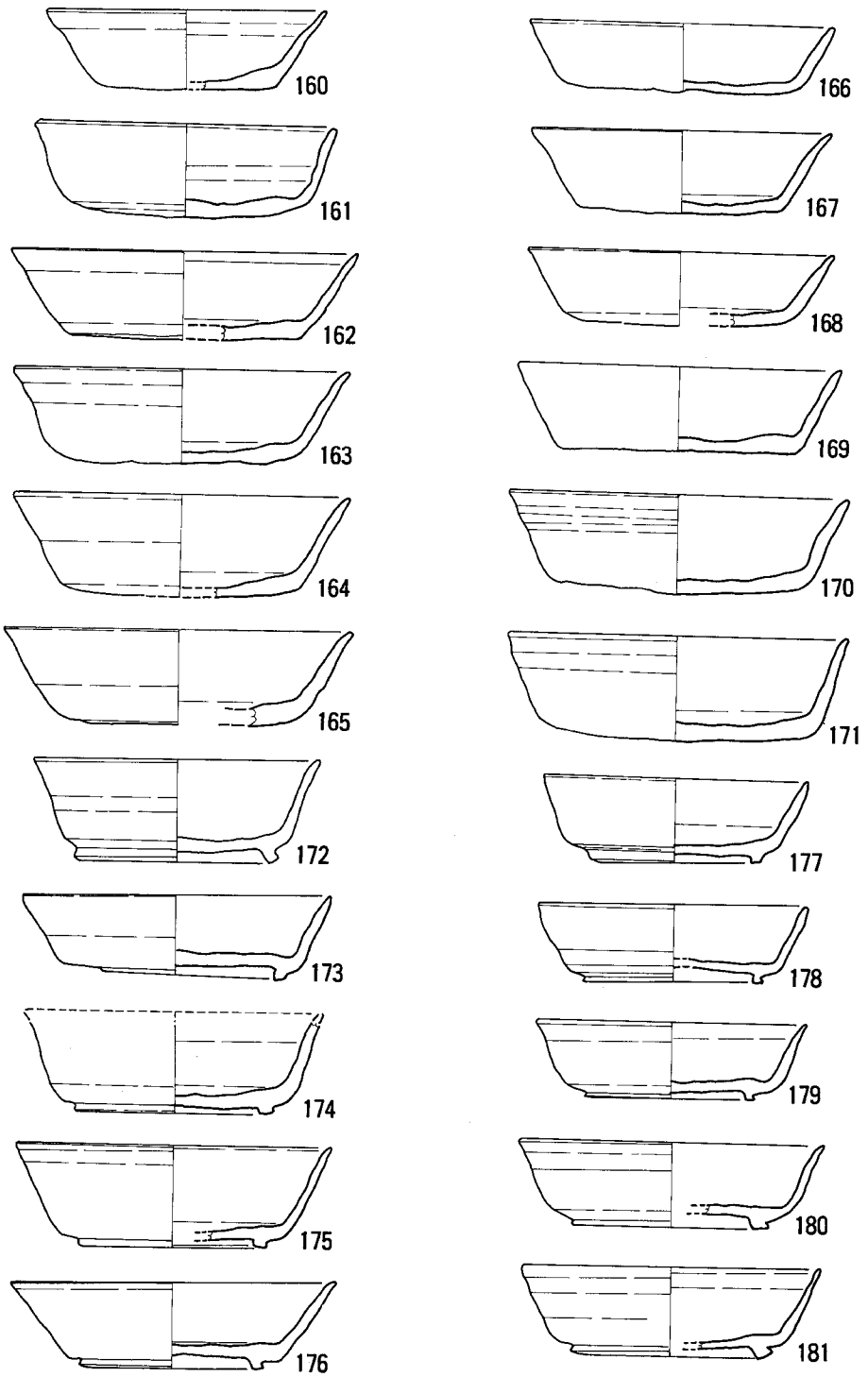


Fig29. SE03出土須恵器実測図(2) (1/3)

0 10cm

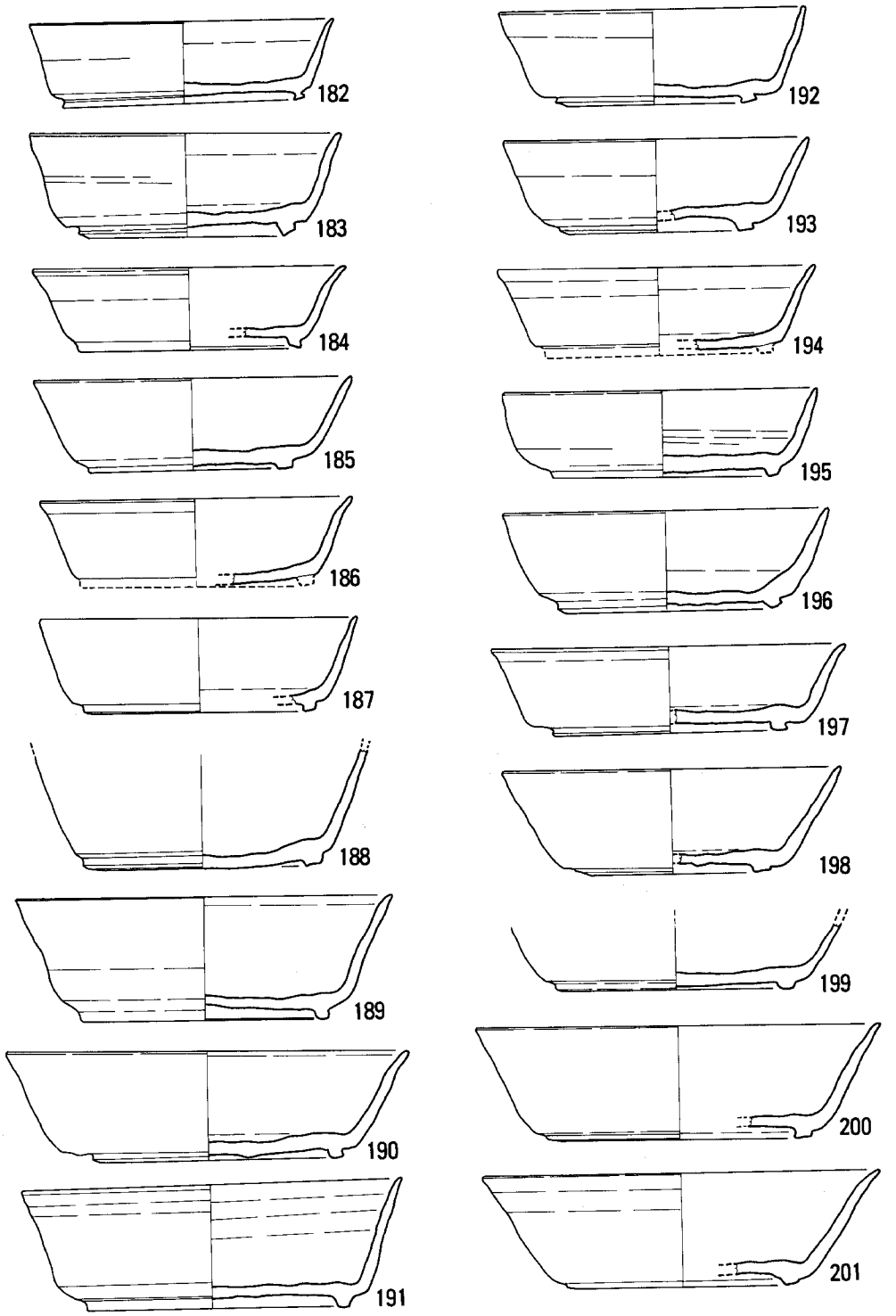


Fig30. SE03出土須恵器実測図(3) (1/3)

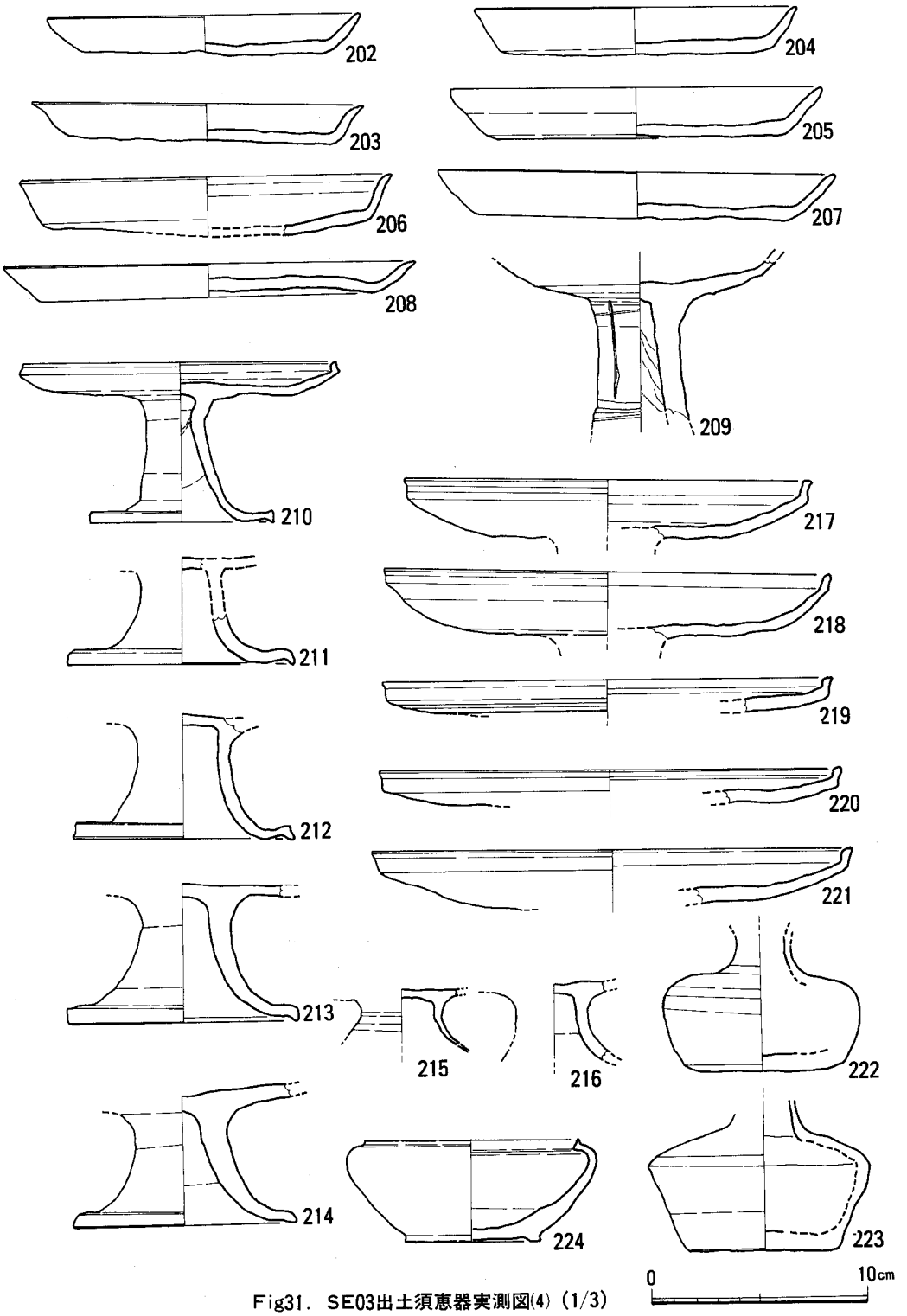


Fig31. SE03出土須恵器実測図(4) (1/3)

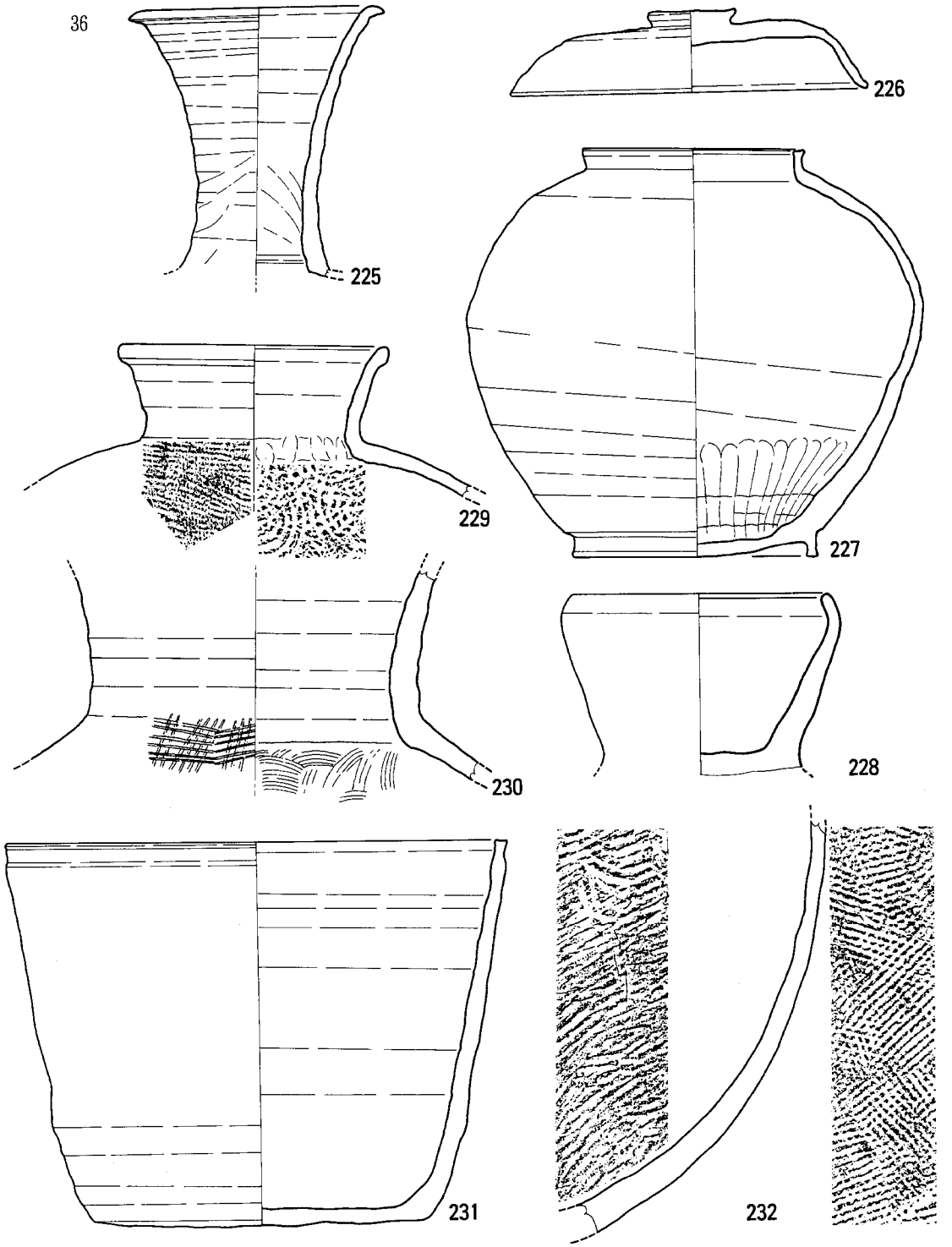


Fig32. SE03出土須恵器実測図(5) (1/3)

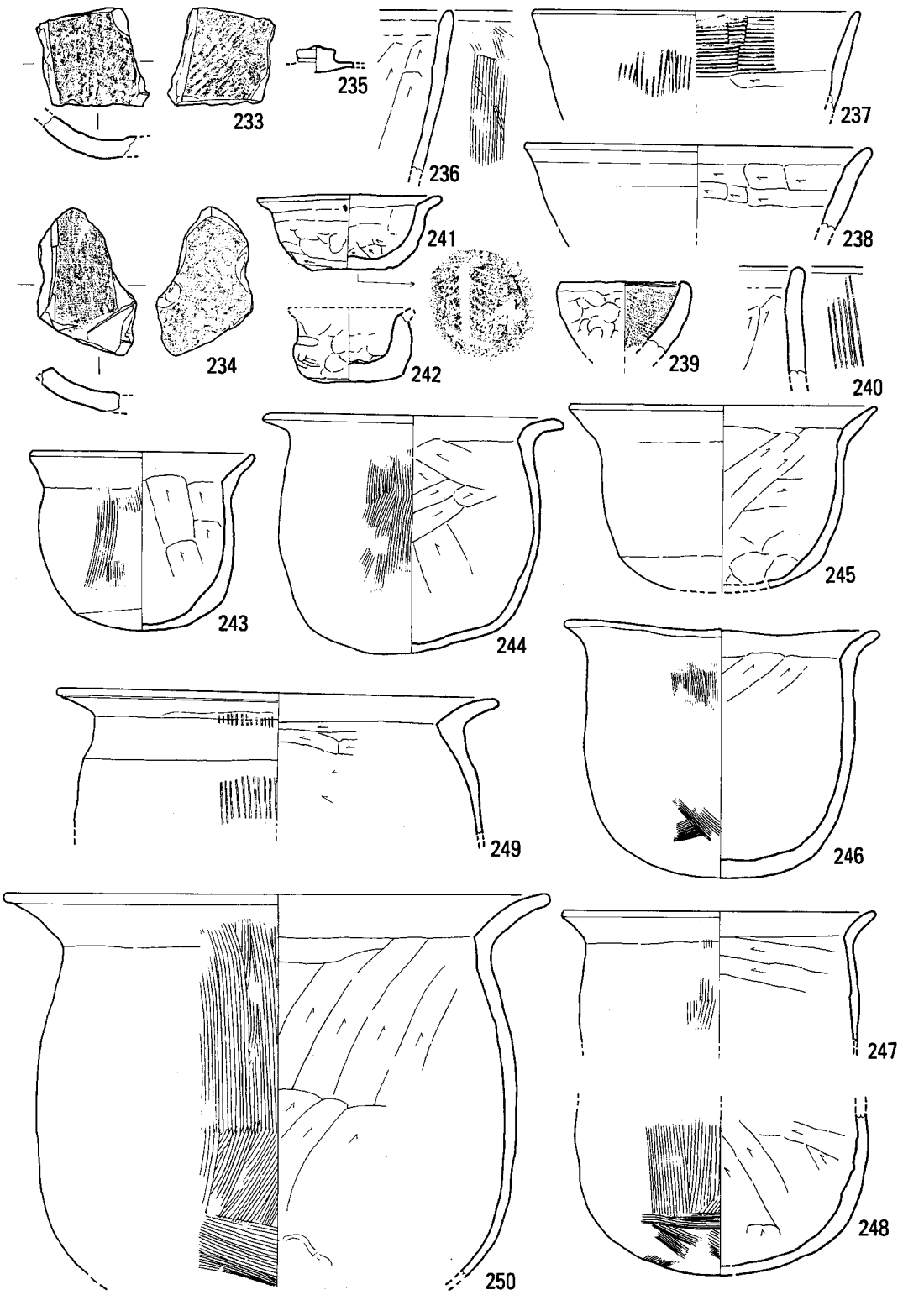


Fig33. SE03出土土師器実測図(1) (1/4)

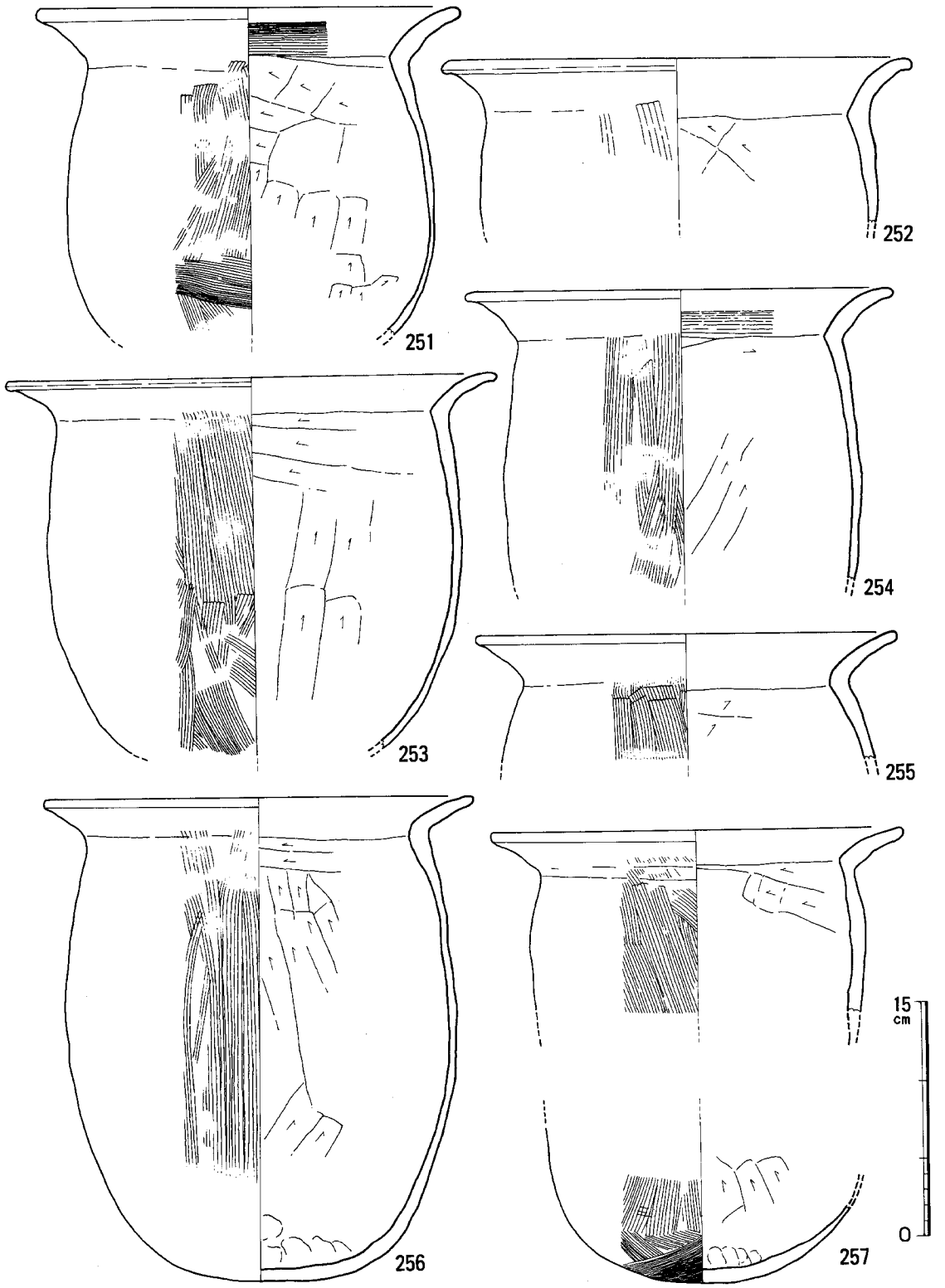


Fig34. SE03出土土師器実測図(2) (1/4)

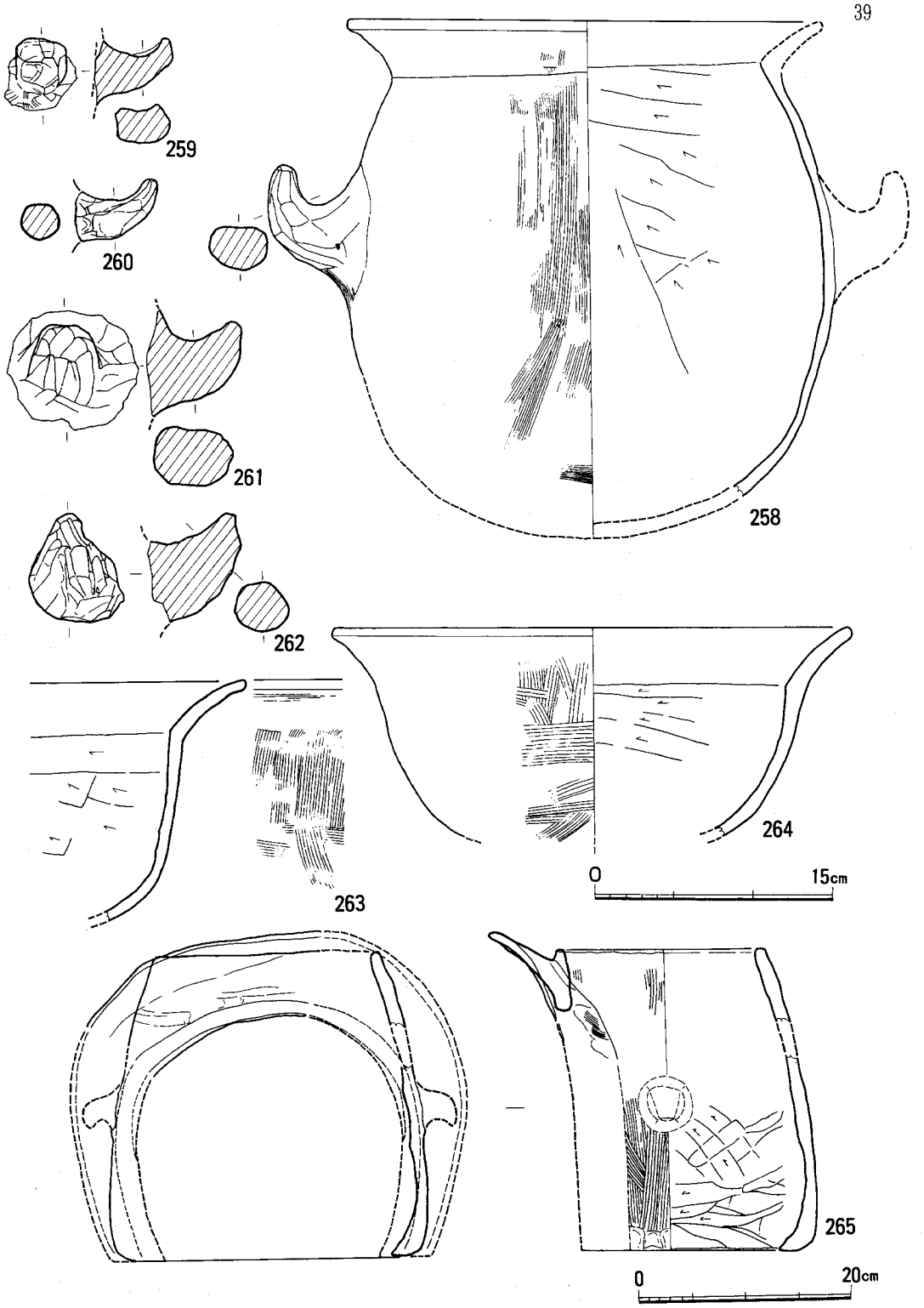


Fig35. SE03出土土師器実測図(3) (259～264 ; 1/4, 265 ; 1/6)

(4) 掘立柱建物

調査区の中央から西側にかけて、40個の柱穴が検出された。これらは古墳時代から中世にかけてのもので、竪穴住居址もしくは高床構造の建物の柱と考えられ、調査時の所見と図面操作で、19棟の建物を想定してみた。これらの建物は、平面的には調査区の南側、西壁中央あたり、および北西側に、建物軸をほぼ同じ方向にとり、まとまっており、それぞれの地点で数回の建替えが行なわれている。なお柱穴はいずれも包含層除去の後検出されたものである。

SB01 （Fig36、PL 9） 調査区北側に位置する。SC04・09を切っており、SB11・13・14と方向性を同一とする。平面形は南隅がやや突き出た長方形となる。柱穴からは遺物は出土していない。

SB02 （Fig36、PL 9） SB01と重複しているが先後関係は不明である。SD01によって北東柱穴は切られている。総柱の建物である。柱穴からは、土師器の小片が出土しているが時期比定は小片のため不可能である。SB08と方向性は概ね合う。

SB03 （Fig36、PL 9） 調査区のほぼ中央で検出された。SC04周溝を切っている。SB09、15、17と方向性を同じくする。平面形は東西にやや長い長方形。柱穴からは弥生土器、土師器の小片の他に、奈良時代の須恵器坏身、蓋片、土師器坏片が出土している。

SB04 （Fig36、PL 9） 調査区北西部に位置し、SC09〜11の住居址を切っている。総柱建物と思われる。西北・東北隅の柱穴は調査中においては未確認である。SB03によって切られている。柱穴からは弥生土器、土師器の他須恵器片が出土しているが時期は不明。

SB05 （Fig36、PL 9） 調査区北西壁にかかって位置する。SC02を切り、SB15によって切られている。2×2間もしくは2×3間の東西棟である。柱穴は他の建物と比べると小さい。柱穴から土師器片、須恵器坏蓋片が出土している。

SB06 （Fig36、PL 9） 調査区西壁にかかって位置する。SC01・03を切っている。柱穴はかなりしっかりしており2×2間ないし2×3間の東西棟が想定できる。方向性は、SB01・04・18などと共通する。柱穴からは、弥生土器、土師器の小片が出土している。

SB07 （Fig36、PL 9） 調査区北西側に位置し、SC02・09を切っている。南北に長い長方形で、柱位置はやや乱れている。柱穴は小さく浅い。柱穴からは弥生土器小片が出土。

SB08 （Fig36、PL 9） 調査区南側に位置する。SB09・10・13・14と重複している。切り合いはみられない。SB02・05と方向性は合う。2×2間で、平面形は北側が開く方形である。柱穴から、弥生土器片、土師片が出土しているが小片のため時期比定は難しい。

SB09 （Fig36、PL 9） 調査区南側、SC02南隣で検出された。SB10・11と重複している。切り合い関係は間接的にSC02を切っている。柱穴掘方はかなり大きく、0.8m前後を測る。平面形はほぼ正方形で、2×2間の総柱建物である。柱穴からは、弥生土器、土師器、須恵器

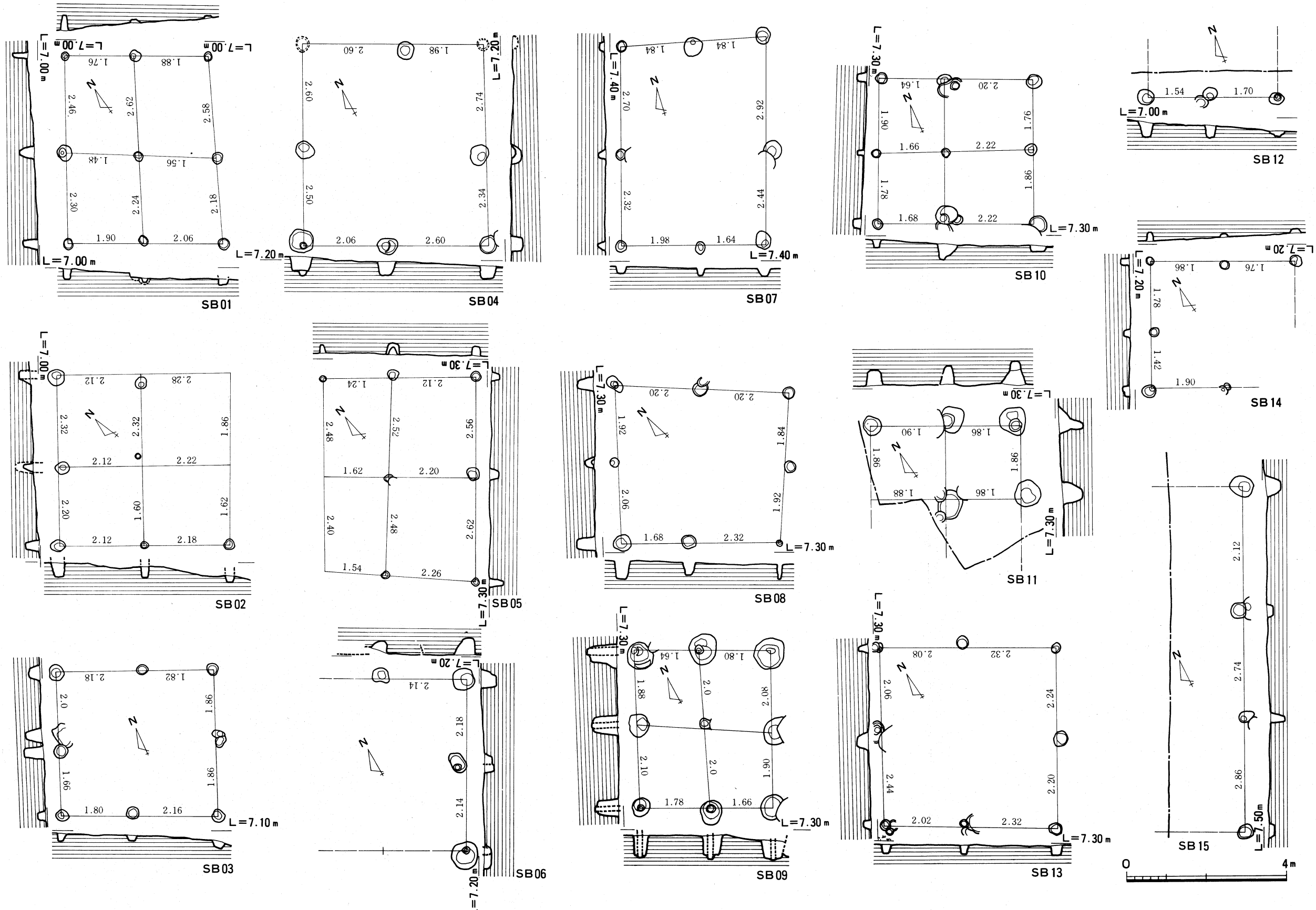


Fig36. 掘立柱建物平面及び断面図 (1) (1/100)（柱間の数字は柱穴中心間の距離。単位はｍ）

片が出土している。土師器は、奈良期のものと思われる甕も含まれる。

SB10 （Fig36、PL９） SB08・09・13・14と重複する。SB14を切っている。２×２間の総柱建物で、平面形は正方形に近いが南北の中軸線がやや西側に寄っている。柱穴からは、弥生土器、土師器が出土している。

SB11 （Fig36、PL９） 調査区南西部で検出された。SB09とほぼ同規模の２×２間の総柱の建物と思われる。柱穴規模も大きく、径0.8m前後を測る。柱穴からは弥生土器、土師器が出土しているが、時期は不明である。

SB12 （Fig36、PL９） 調査区北壁にかかって検出された。２×２間、もしくは２×１間の建物の可能性がある。柱穴からは、弥生土器、土師器が出土。

SB13 （Fig36、PL９） SB08～10・14と重複する。SB09から切られ、10を切っている。方向性は、SB01・04・06・11などと合う。SB14と比べると平面規模はかなり大きい。柱穴からは弥生土器、土師器が出土しているがいずれも小片。

SB14 （Fig36、PL９） SB08・13と重複する。規模はSB08・10と同規模で、平面形は東西にやや長い長方形である。柱穴からは遺物は出土していない。

SB15 （Fig36、PL９） 調査区西壁に沿って南北に４個の柱穴が並んでいる。２×３間の建物を想定した。柱穴からは須恵器、土師器片が出土している。

SB16 （Fig37、PL９） SC04北東部に位置する。SC04壁溝を切り、SD01から切られている。２×３間の建物を想定した。柱穴からは弥生土器が出土している。

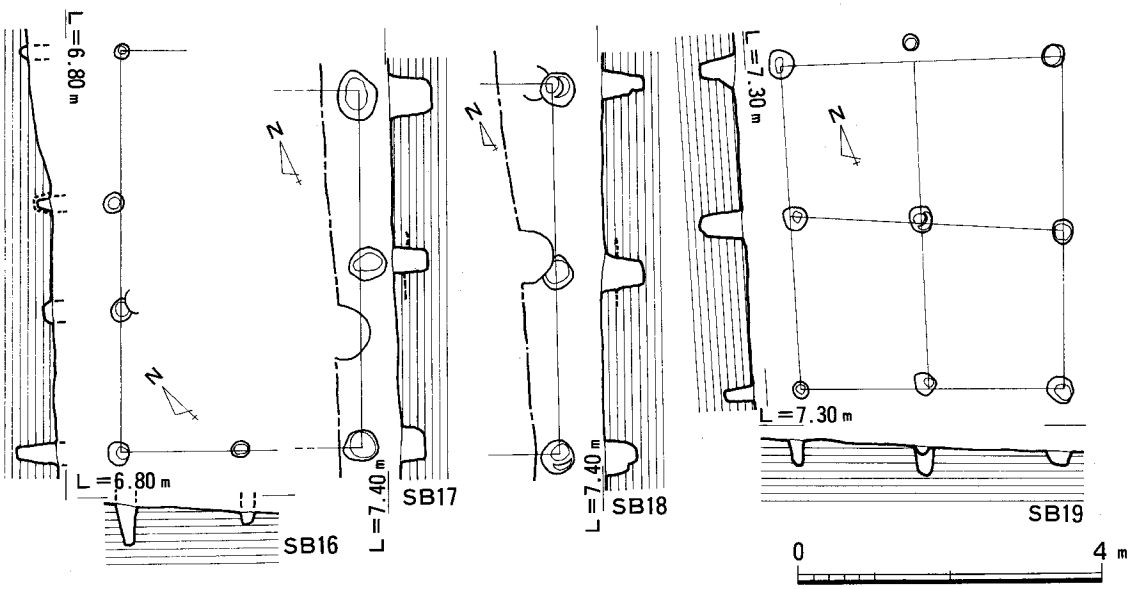


Fig37. 掘立柱建物平面及び断面図(2) (1/100)

SB17・18 （Fig37、PL９） 調査区西壁で検出された。いずれもSC01を切っている。出土土器はSB17が弥生土器、土師器、須恵器で、SB18が弥生土器、土師器片である。

SB19 （Fig37、PL９） 調査区北側に位置する。竪穴住居址SC09を切っている。平面形は南北に長い長方形で、２×２間の総柱建物である。柱穴からは土師器、須恵器が出土。

以上述べた建物の切り合い関係、方向性、出土遺物、さらに他の遺構との先後関係等を整理すると、おおよそ５期に建物の時期及び群の構成は分けられる。１期は、SD01の方向性とほぼ軌を一して配される群でSB02→16・SB05・08が該当する。２期は建物の数が増し規格性が強い時期で、SB14→10・17・19・03・12が該当する。３期は建物数が激減し、SB13・01が、４期はSB09・06が、５期は規模、方向性等に統一性がないものでSB15・04・07が該当する。各時期の具体的な年代観は、１・２期がSE02・03と並行もしくはやや後出の奈良時代半ば～後半に、３・４期がSE01が埋没する奈良末～平安時代前期に、５期が少なくとも、包含層が形成される中世前半の時期以前のものと思われる（Fig48）。

建物番号	規模	桁行 実長(m)	桁行 柱間寸法(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間寸法(m)	南北基軸の方位	床面積(m²)	柱穴 pit数	柱穴 番号	柱穴 底面標高(m)	柱穴 長径(cm)	柱穴 短径(cm)	柱穴 柱根径(cm)	備考（切り合い関係）
01	2×2	4.76	2.30 2.46	3.96	1.90 2.06	N-32°-E	17.99	9	269,332,341,287 336,289	6.40~6.55	28.6 42 21	25.1 37 19	12	住居址SC04,07,09,11,SD03を切る。
02	2×(2)	4.32	2.0 2.32	4.30	2.14 2.16	N-52°-E	19.03	7 (9)	288,283,280,268 331,340	6.37~6.63	28.2 40 15	25 36 13	11 12 10	SC04・SD05を切る。SD01から切られる。
03	2×2	3.80	1.98 1.82	3.94	1.80 2.14	N-23°40'-E	14.60	8	122,224,225,330 125,306	6.54~6.60	33.1 42 30	26.6 34 18	(？)	SC04を切る。
04	(2)×2	5.10	2.50 2.60	4.68	2.04 2.64	N-31°10'-E	23.66	6 (8)	088,092,126,266 101	6.40~6.80	50.1 62 44	45.5 56 39	14.5 19 12	SC09を切る。SC10との関係は不明。
05	2×2	5.18	2.56 2.62	3.85	1.75 2.10	N-44°30'-E	(約18.70)	7 (9)	096,106,258,235	6.86~7.20	24.1 34 15	20.1 25 13	12.5 16 11	SC02を切る。SB15から切られる。
06	2×(2)	4.34	2.22 2.12	(？)	2.12	N-30°20'-E	(約18.80)	4 (8)	067,080,082,091	6.70~6.82	55.2 68 41	48.3 65 36	14 15 13	SC02を切る。SC03を切る。
07	2×2	5.02	2.32 2.70	3.62	1.98 1.64	N-15°30'-E	18.92	8	081,227,237,104 086,087	6.86~7.11	37.3 48 29	32.5 44 22	14.2 14.4 14.1	SC02・09を切る。
08	2×2	4.0	2.04 1.96	3.96	1.70 2.26	N-49°40'-E	16.35	8	061,168,134,297	6.36~6.94	33.3 50 16	28 39 14	12 12.2 11.9	
09	2×2	4.0	1.90 2.10	3.32	1.64 1.68	N-24°20'-E	13.26	9	043,036,029,033 294,178,130,109	6.40~6.96	63.1 90 24	55 72 23	15.1 15.7 14.3	SB13を切る。
10	2×2	3.64	1.77 1.87	3.92	2.00 1.92	N-24°40'-E	14.04	9	137,138,251,164 184,203,193,050,040	6.55~7.21	34 51 22	30.6 47 20	13.5 15.2 12.8	SB14を切る。
11	(2)×2	(3.56)	1.78 (？)	3.60	1.90 1.70	N-32°30'-E	(約12.80)	5 (9)	007,008,245,027	6.59~6.90	65.2 73 48	56 63 46	(18)	
12	(2)×2	(？)	(？)	3.26	1.63 1.63	N-22°-E	(？)	3	315,320,324	6.36~6.51	37 41 36	34.5 39 33	(？)	
13	2×2	4.50	2.06 2.44	4.34	2.02 2.32	N-30°30'-E	19.72	8	218,194,176,189 299,356,210	6.78~7.05	34.1 65 20	28.1 40 19	(13)	SB10を切る。SB09から切られる。
14	2×2	3.20	1.78 1.42	3.62	1.86 1.76	N-32°30'-E	11.28	6 (8)	172,173,216	6.67~7.00	29 36 16	25.6 28 12	13 14 12	SB10から切られる。
15	(2)×(3)	7.72	2.86 2.74 2.12	(？)	(？)	N-23°-E	(？)	4 ( )	063,009,079,094	7.00~7.20	38 48 33	30.8 42 20	(13.5)	SB05を切る。
16	(2)×3	5.32	2.02 1.42 1.88	(？)	(？)	N-46°10'-E	(？)	(10)	342,334,282,	6.14~6.55	26.6 33 20	24 30 18	17.5 18 16	SC04を切る。
17	2×(2)	4.74	2.30 2.44	(？)	1.60	N-23°40'-E	(？)	3	307,310,075	6.80~6.95	54.3 66 46	44.6 54 38	(？)	SC01を切る。
18	2×(2)	4.92	2.48 2.42	(？)	(？)	N-28°30'-E	(？)	3	304,309,074	6.86~6.86	45 48 43	42.3 45 40	20.2 20.7 20.0	SC01を切る。
19	3×3	4.28	1.98 2.30	3.46	1.68 1.78	N-46°30'-E	15.62	8 (9)	256,261,267	6.47~6.89	30.7 38 21	26.6 34 18	17 20 12	SD05・SC09を切る。SC08との関係は不明。

Tab２．掘立柱建物計測表

（Pit数の（　）内の数字は推定。長径・短径、柱根径は、平均値を左に、右に最大/最小値。）

(5) 甕　棺

今回出土した甕棺は1基のみであるが、包含層及び各遺構からの出土遺物中には、弥生時代中期の甕棺の破片も多く、甕棺墓地が当該地、あるいは周辺にあったことが十分に予想される。

SK01　(Fig38・39、PL 8 ・18)

調査区の南東部で検出された甕棺で、後世の削平によって大部分が失われている。主軸はN－21° 30′－Eの方向で、ほぼ水平に埋置されたものと思われる。墓壙埋土はSC05とよく似た黒褐色土で、型式的にもSC05と並行かやや後出の時期のものと思われ、弥生時代後期後半のものと考えられる。

全体の器形は窺い得ないが、長胴の中ほどからやや下部に断面形がコの字形の突帯を貼付している。内面はナデ成形、外面は縦方向のハケ目調整が施され、底部近くはナデ消している。

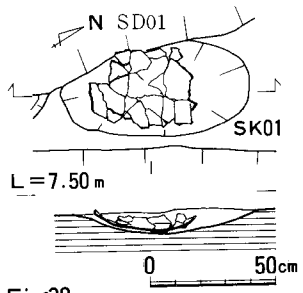


Fig38.
SK01出土状況実測図 (1/30)

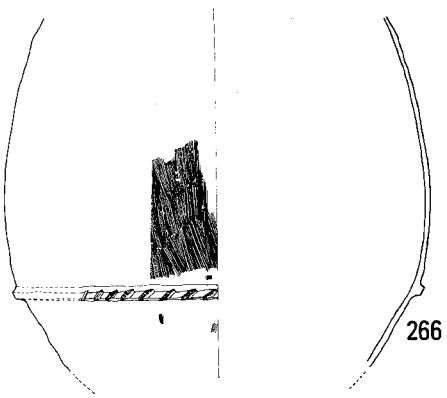


Fig39. SK01実測図 (1/8)　0　15cm

(6) その他の遺構と遺物

以上に述べた遺構・遺物の他に性格不明の竪穴遺構が1基検出されている。またSC04の南側で、根石をもつかなり大きな柱穴が2個みられ、何らかの建物と思われるものの、これに類似する柱穴も他になく、この2個のみで完結する構造の構築物であろうと考えられる。

SX01　(Fig40、PL 8)

竪穴住居址SC02の中央からやや東南寄りのところで検出された竪穴で、平面形は不整円形である。長径64.2cm、短径58.1cm、検出面からの深さは13.5cmである。埋土は暗褐色～暗灰褐色土で、床面直上に薄い木炭層があり、その上部に土師器高坏・坏・皿などが一時的に投棄された状況で出土している。地鎮等の何らかの祭祀に関する遺構で、奈良時代後半～末の時期のものと思われる。

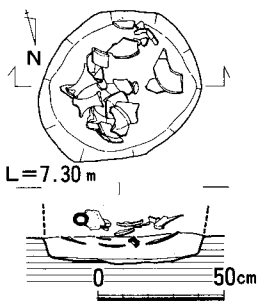


Fig40. SX01
遺物出土状況実測図 (1/30)

出土遺物　(Fig41、PL18)

古墳時代の須恵器（坏・甕）片の他に土師器（甕3、高台付坏2個体、高坏4個体、皿3個体、甕1個体）片が出土している。図示したのはいずれも土師器である。

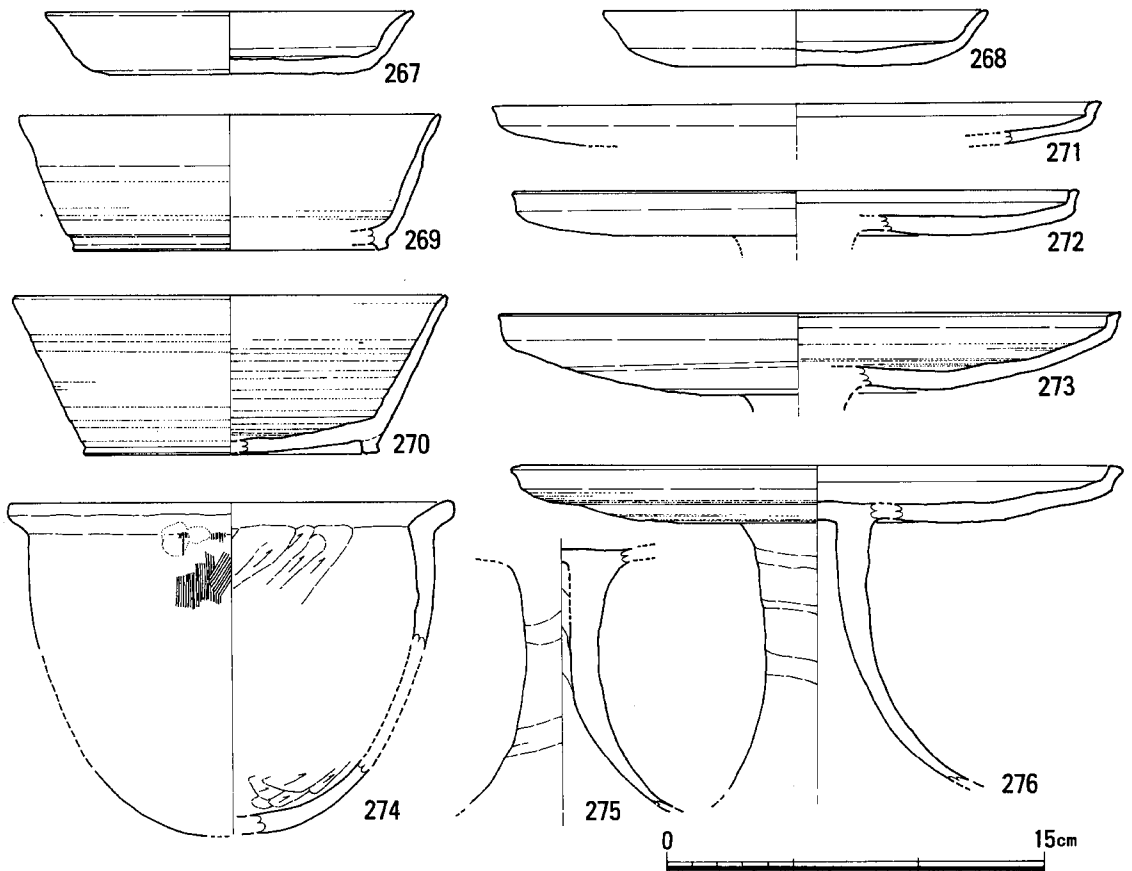


Fig41. SX01出土土器実測図（1/3）

267・268は土師皿である。復元口径・器高は267が14.8cm・2.6cm、268が15.4cm・2.3cm。内面はいずれもヘラミガキが、外面はナデ調整が施されている。底部はヘラ切離し。269・270はは高台付坏である。復元口径・器高は269が16.8cm・5.5cm、270が17.2cm・6.8cm。体部は270が高台部から直線的に立ち上がるのに対して、269は体部下半が若干丸みがある。高台は底部と体部との境につく。内外面ともヘラミガキが施されている。271～273・275・276は高坏である。坏部の復元口径は24.2～26.6cm。坏部内外面には丁寧なヘラミガキが施されている。271・272の体部は直線的で浅いが、273・276は深みがある。脚部の下半分は欠失。内面には絞りの跡が残る。外面はナデ仕上げ、以上の土師器はいずれも胎土・焼成とも良好である。色調は概ねやや赤みのある明褐色。274は甕で、復元口径17.8cm、器高13.4cmを測る。口縁部は強く外反し、内面は斜位のヘラケズリが施されている。

柱穴出土の土器　(Fig 42、PL 18)

柱穴からは弥生時代～古代にわたる遺物が、２次堆積の状況で多数出土しているが、ほとんどが小片で図示できるのはわずかである。

277と278は弥生時代中期の蓋で、復元径・器高は277が15.8cm・3.4cm、278が16.1cm・2.8cm。

胎土は精良。外面はいずれも天井部中心から縁へヘラミガキが施されている。内面はヘラアテの痕が残る。278には赤色顔料が塗布されている。279～282は弥生土器甕の底部片である。底部は分厚く中期初頭特有の形態のもの（279～281）が、図示した以外にも目立つ。いずれも外面は縦位のハケ目調整が施され、胎土・焼成ともに良好。

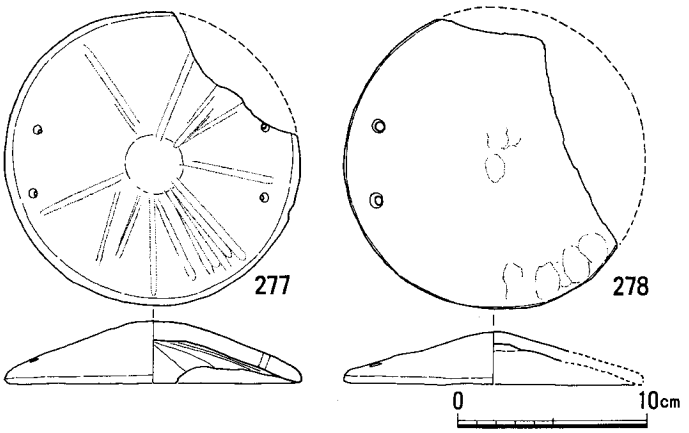


Fig 42. 柱穴出土土器実測図(1)（1/4）

283～285は甕口縁部である。逆L字形に外反するもの（283・284）と、T字形となるもの（285）の他に、わずかであるが、くの字形に外反するものなどがみられる。283～285の復元口径は25.8cm・26.1cm・30.6cm。286～290は須恵器である。286・287は坏蓋で、復元口径12.2cm・14.5cm。288・289は坏身で復元口径11.6cm・12.5cm。以上の須恵器はいずれも焼成・胎土とともに堅緻。ロクロ回転は右回転。290は高坏脚である。底径は10.9cm。かなり歪んでおり、焼成やや甘い。291は越州窯青磁椀である。高台径6.4cmで、内面見込みには目跡が、外面には縦の沈線がみられる。釉調はくすんだ灰緑色で発色は悪い。292は土師器椀高台部で、高台径8.8cm。293・294は手捏土器で口径・器高は293が2.7cm・2.4cm、294が3.9cm・2.6cm、内外面には指頭圧痕が残る。色調は明灰褐色を呈す。294は柱根痕跡から出土。

表土・包含層（第15層）出土土器（Fig44、PL19）

表土からは弥生土器、古墳時代の須恵器を主として、奈良～中世の遺物が出土しているが、いずれも小片である。全体の遺物の出土傾向は、弥生時代中期前半～古墳時代後期のもの、奈良時代半ば～後半のものの他に中世陶磁器が目立つ。

295～299は弥生土器甕・壺の口縁部である。甕はいずれも逆L字形に口縁が外反するもので、胎土・焼成ともに良好である。300は須恵器坏身である。復元口径11.4cm。313は瓦器椀で、内面見込みに波状のヘラミガキによる暗文がみられる。

包含層は、堆積からみればSD01より古いことは明らかであるが、出土遺物には整地の時期を明確にしうるものがなく、全体の遺物の出土傾向と、SD01の時期を加味して、包含層形成の時期については推定せざるを得ない。

301～310は須恵器である。301～303・306～308は坏身で、復元口径が11.4～11.6cmのもの（301・307・308）と13.1～14.3cmにおさまるもの（302・303・306）がある。作りは後者の方

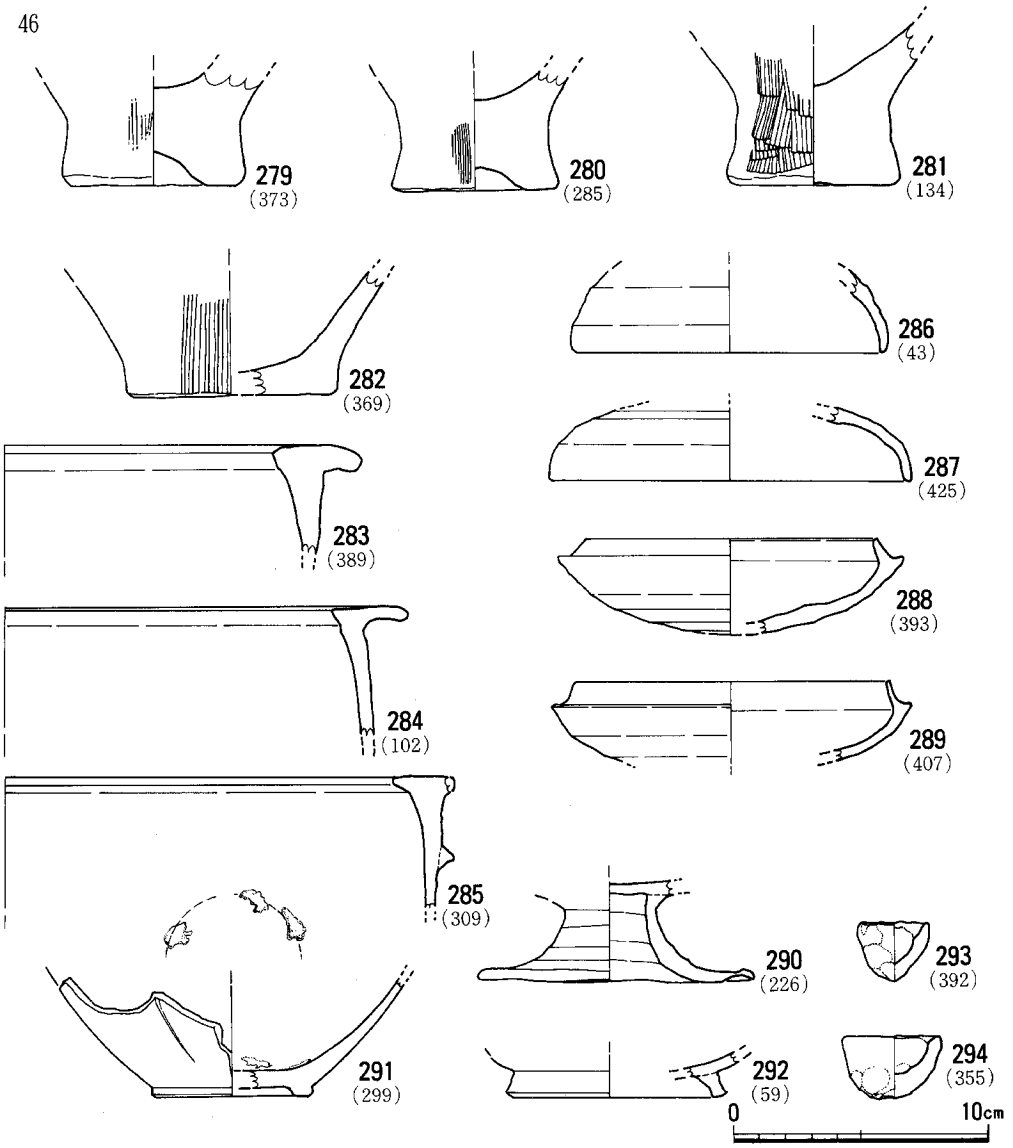


Fig43. 柱穴出土土器実測図(2) (1/3) ((　)内の数字は柱穴番号)

が良好で、焼成も堅緻である。**304**は坏もしくは高坏の坏部で、体部下半に３条の沈線が巡る。復元口径は9.6cm。**305**・**309**は坏蓋で、**309**の復元口径・器高は15.4cm・3.7cm。**310**は高台付坏で、高台は体部と底部の境のやや内側につく。**311**・**311**は土師器甑把手。体部内面には縦位のヘラケズリが施される。**314**は土師質の片口捏鉢。復元口径は、29.6〜30cm。内面には斜位のハケ目調整が、口縁部から外面にかけてはナデが施されている。

包含層からは、以上の他に、土師器坏・皿、瓦器、白磁、青磁など中国産陶磁器片が出土しているが、全体の器形・法量を知り得る例はない。SD01と比べ特徴的なことは、白磁のうち、

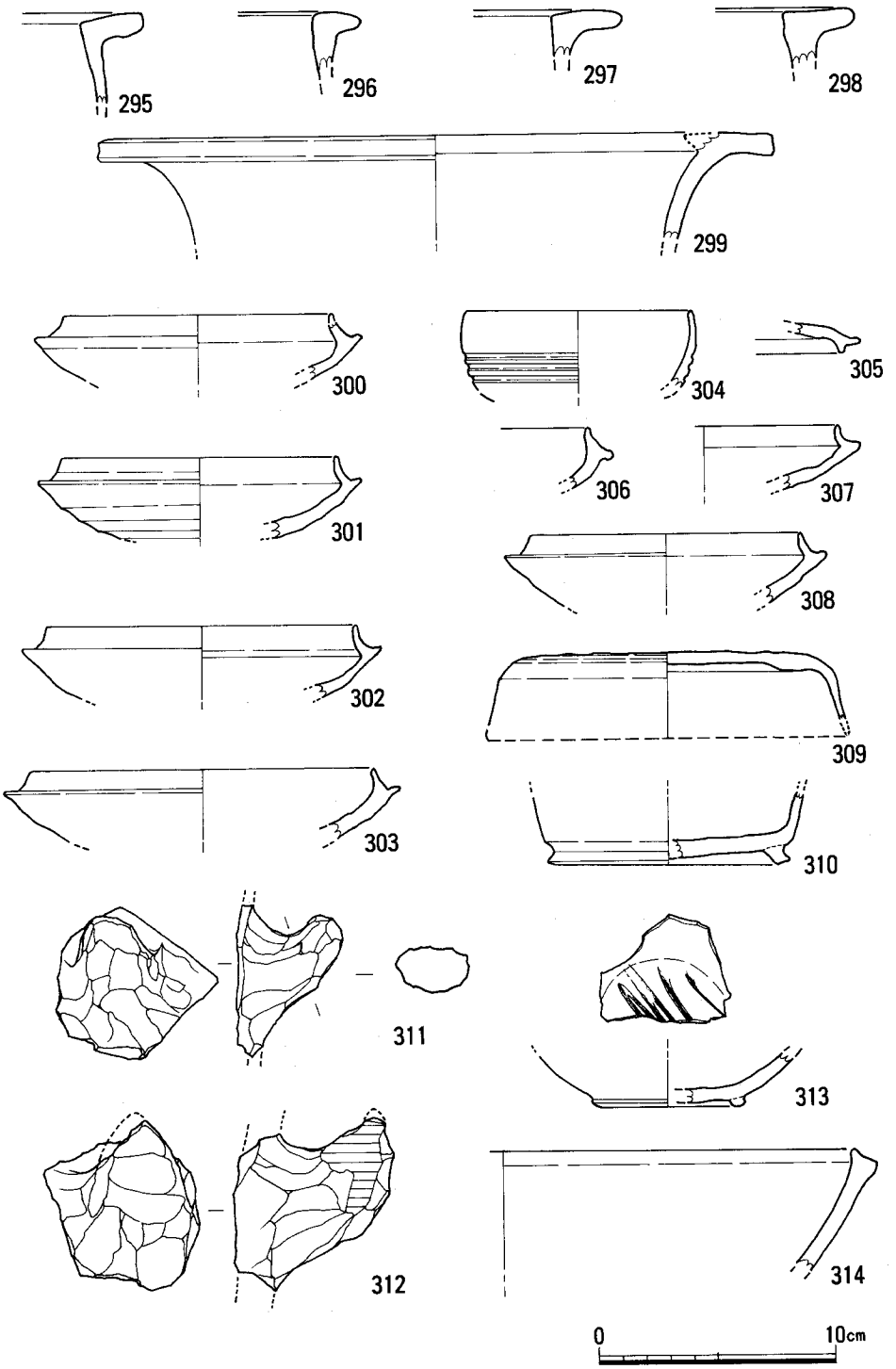


Fig44. 表土・包含層出土土器実測図 (1/3) (表　土；295～300・313 包含層；301～312・314)

59・61等の口禿のものや、63の類がみられないこと、及び、龍泉窯系青磁は、劃花文の施されたものが主となり、蓮弁文のものは小数で、また同安窯系の青磁椀はほとんど含んでいないことが挙げられる。この傾向は、概ね13世紀半ば～14世紀前半頃の様相と思われ、SD01の埋没時期の下限が15～16世紀前半であることから考えると、包含層の形成された時期は13世紀～16世紀前半のうちSD01の掘削が行われた時期に近い年代が考えられよう。やや大まかであるが一応14世紀前半代以降に形成されたものと考えておきたい。

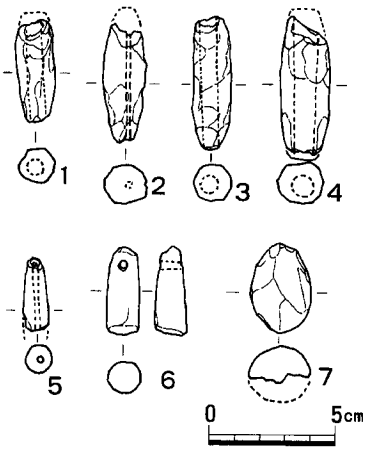


Fig45. 土製品実測図 (1/3)
(1・2；包含層、3・4；SC06
5；SD02, 6；SC11, 7；SD04)

土製品 (Fig45、PL19)

1～5は管状土錘である。5が幾分小さい（現存長2.9cm・径1.0cm）ほかは、長さ5.4cm～6.0cm、径1.6cm～1.8cmほどにおさまる。孔は径2㎜のものと0.8㎜前後のものがあるが、用途の異なりによるものか。6も土錘と思われる。長さ3.4cm、径1.3cm。7は投弾で長さ3.6cm、径2.4cm。以上はいずれも焼成良好でおおむね明褐色。指頭痕がそれぞれ残っている。

石器、石製品 (Fig47、PL20)

包含層、溝状遺構、住居址から散発的に石器が出土している。一部先土器時代のもので、他はほとんど弥生時代のものと思われる。

1・2は台形石器である。長さ・刃部幅は1が1.9cm・1.45cm、2が1.6cm・1.15cm。基部及び先端を折断した縦長剥片を素材とする。1は、先端側、2は両折断面に二次調整を加えている。3は分厚い不定形剥片を素材として、二次調整を加え先端部を鋭く尖らしている。長さ・幅・厚さは2.0cm・1.9cm・0.8cm。6は、使用痕がみられる剥片で、両側面にそれぞれ向きあって細かな剥離がみられる。打瘤部は除去されている。7・8は石核である。7は角柱状の礫を素材としている。剥片作出の初期のもの。8は打撃面調整が施されやや古い時期の所産かと思われる。以上の石材は4が硬質頁岩の他はすべて良質の黒曜石である。1・2・4・5以外は弥生時代まで下る時期のものと思われる。9～11、14は石包丁片。14は立岩産輝録凝灰岩製で他は頁岩。12・11は紡錘車。滑石製で径・厚さは12が4.2cm・1.1cm、13が4.5cm・0.6cm。15・16・19は、敲石で長軸の両端、縁辺に細かな剥離痕がみられる。いずれも硬質の頁岩製。17・18・20・27は、敲打によっていずれかの面に凹みがあるものである。凹みの形態は若干の差がある。24は玄武岩製太形蛤刃石斧の破片。25は石剣の破片と思われる。表面はかなり風化している。頁岩製。22・23は砥石である。22は粘板岩、23は砂岩製。26は滑石製の石鍋を転用した温石で、小口は研磨し、穿孔を施している。

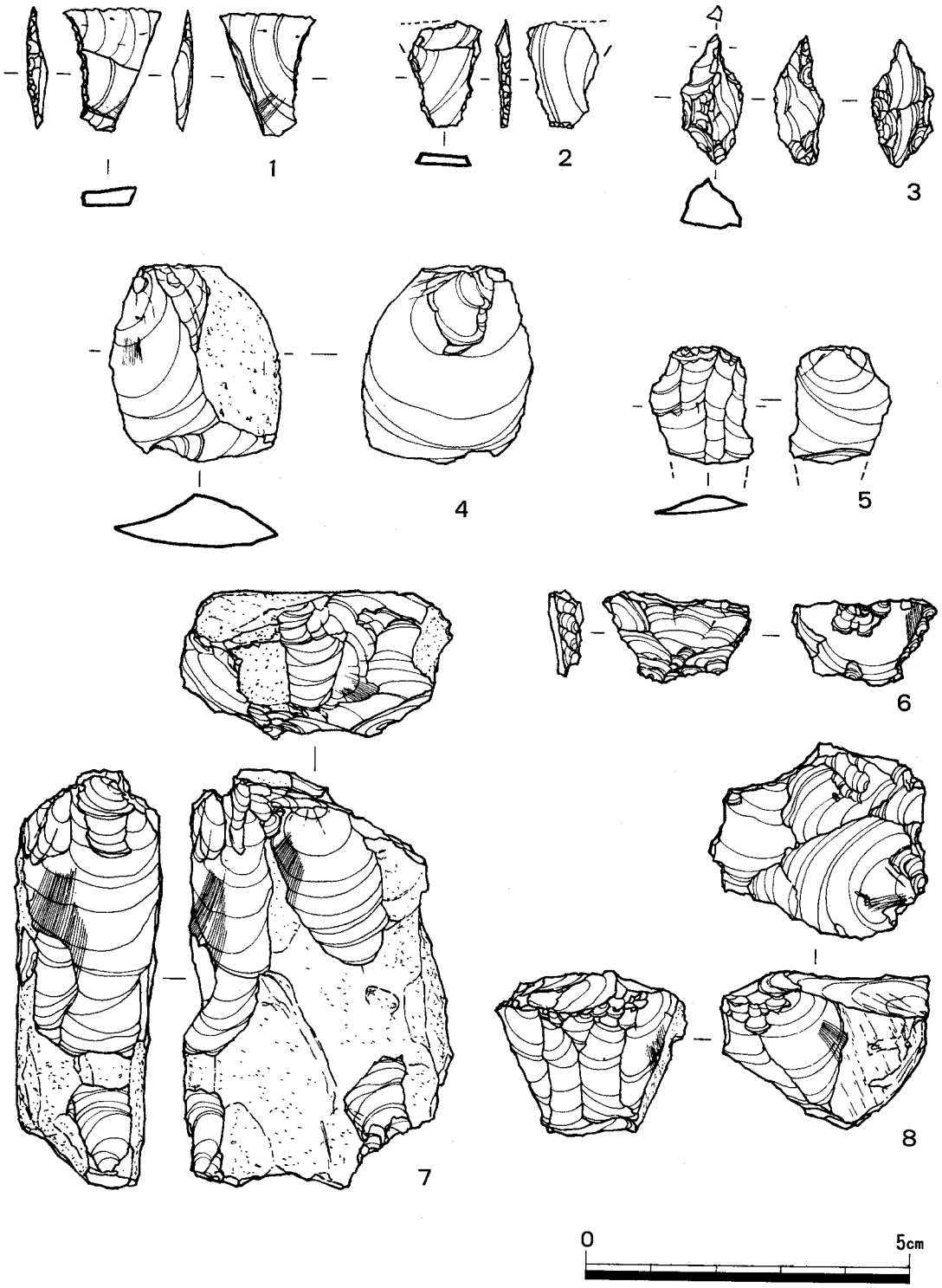


Fig46. 石器実測図 (1/1)　(包含層；1・2・3・6，SC02；4
SC10；5，SD02；7，SE03；8)

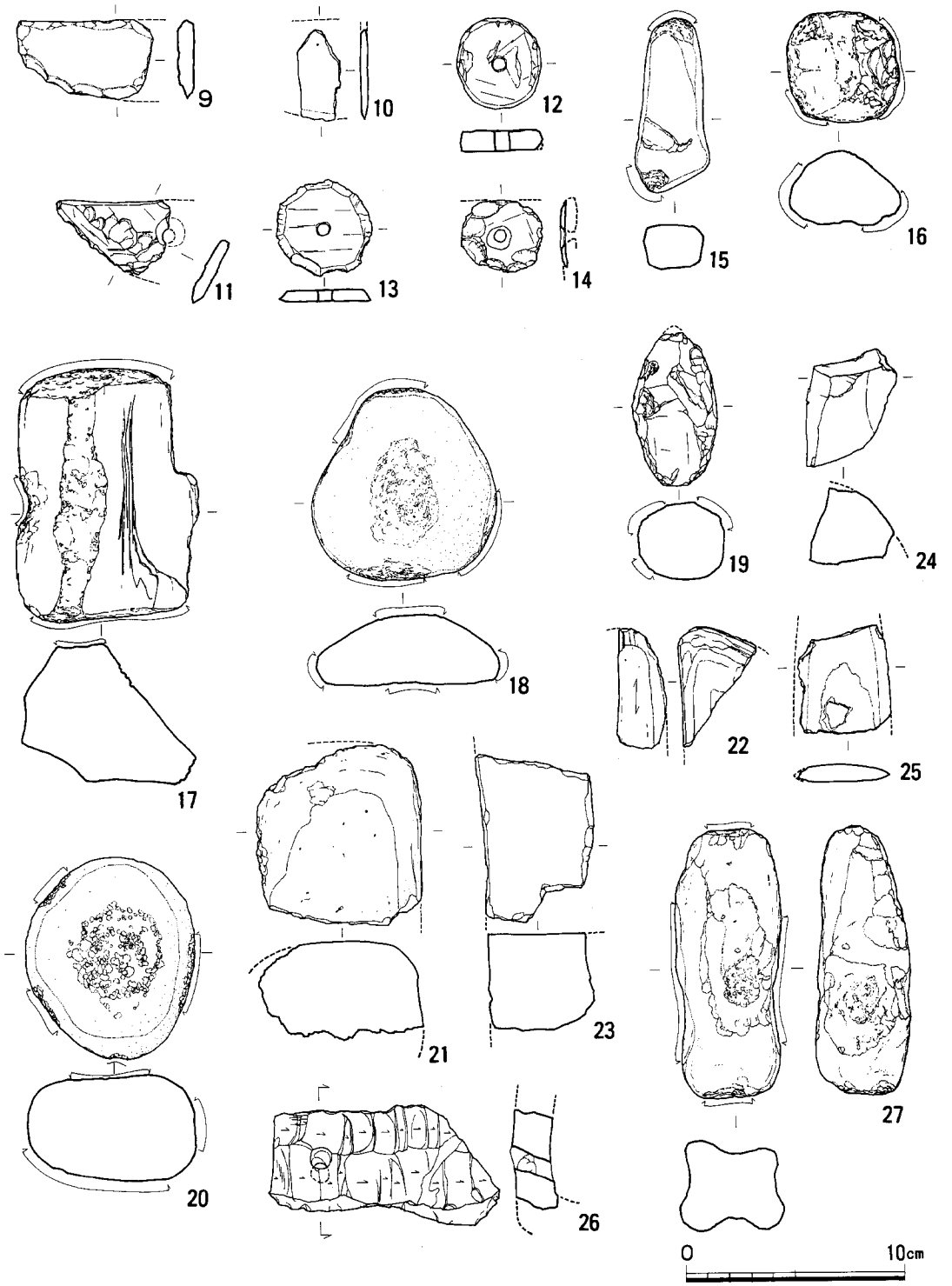


Fig 47. 石器・石製品実測図（1/3）

（表土; 9、包含層; 10・12、SC02；13、SC04；16、SC05；15、SC09；14、18、SD01；20・21・23・26、SD02；11、SE03；19・22・24・25・27、柱穴050；17）

第Ⅳ章 まとめ

1．発掘調査成果の整理と問題点について

第Ⅲ章での調査所見をもとに、今回の調査地点における問題点を整理し、まとめとしたい。

第７次調査においては、古墳時代後期の竪穴住居址を主な遺構として、弥生時代から中世にわたる遺構と遺物が検出された。遺物には先土器時代の台形石器も見られたものの、当初期待された包含層の確認までには至らなかった。しかし那珂台地の縁辺部においては、当該期の包含層が遺存している可能性があり、諸岡遺跡以外に福岡平野においては明確な包含層が確認されていないなかで、将来の調査が期待されよう。(注１) 出土遺物中最も量的に多かった、弥生時代中期の遺構を明確な形で把握することが今回はできなかった。おそらくは、古墳～奈良時代、中世の各時期をとおして、数次にわたる地形の改変を受けそのほとんどがこの地点においては消滅したものと思われるが、このことは当該地点周辺が生活居住地域として、継続的な土地利用がなされた一端を物語っていると考えることもできよう。いずれにせよ、那珂遺跡が、板付遺跡と同様に弥生時代以来の福岡平野における拠点的地点であったことは否定できないであろう。

検出された遺構は下図のように、出土遺物・遺構の切り合い関係等によって大きく五期に時期区分ができる。時期毎に、それぞれの問題点を述べてゆきたい。

Ⅰ期の遺構は、弥生時代後期後半～終末の住居址 SC05と甕棺 SK01のわずか２例のみであるが、本来は当該期の遺構はさらにあったことが予想される。遺構の分布から見ると少なくともこの時期までは、台地縁辺部はもう少し東側へ延びていたことが考えられよう。

Ⅱ期は古墳時代後期、小田氏による須恵器編年に比定すると、Ⅲ－ｂ期からⅣ期に一部かかる時期と思われる。(注２) 遺構は主として竪穴住居址で10軒が確認された。これらの住居址の分布の在り方で注目されるのは、調査区の北側に集中的に建替えが行われる一方で、切り合いもなく点在するといった分布上の偏りが認められることと、この在り方とともに、共通する方向性か

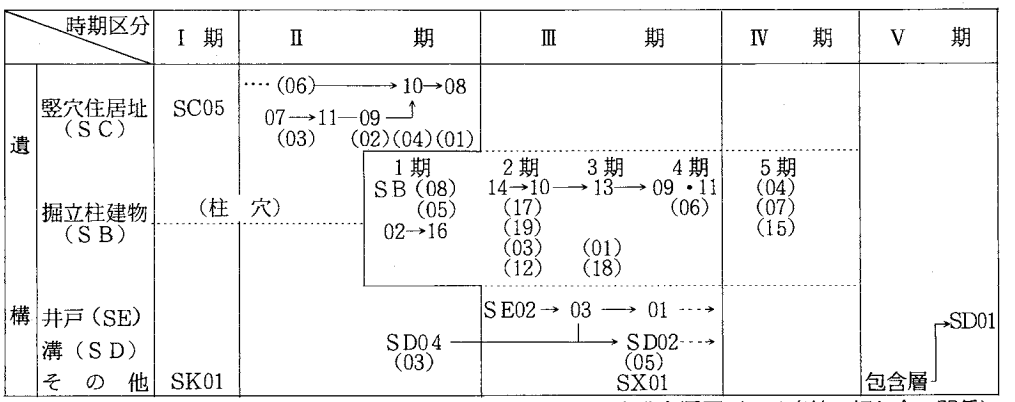


Fig48. 那珂遺跡群第７次調査地点時期別遺構変遷図（→は直接の切り合い関係）

ら想定された住居址の並存関係をみると、集中的に建替えが行われている北側を中心とするかのようにSC03・02・04・01の順で推移したと考えられることである。これは可能性として、一定の家屋群内で、建替えに際し占地上の何らかの規制が影響したものとも思われる。個別の住居址についてみると、家屋規模が全般的に小さく、床面積が14〜15㎡ほどであること、平面形がやや歪な方形で、四隅の一つが若干張り出す平面形のもの（SC02・03・04・09）があること、また竈に対面する壁際にまとまった量のよくしまった粘土が残るもの（SC02・08・09・10）があることなどが挙げられる。平面規模については、調査面積が狭く、集落内における全体の家屋の規格性や傾向が窺えないために、一概に小規模であるとは言えないが、当遺跡よりもやや先行する城南区浄泉寺遺跡(注3)、片江辻遺跡例(注4)などと比べると5〜15㎡ほど小さい傾向がある。これが時期差によるものか、同一集落内における機能差に基づいた大小の差であるのかについては、周辺調査の追加を待って検討されるべきと思われる。竈に対面する粘土に関して、まとまって検出された例としては、甘木市立野遺跡(注5)がある。検出された古墳時代後期の竪穴住居址112軒中約6割に、当地点で検出されたようなカマド対面粘土がみられ、報告者は、出入口に関連する施設であろうとしている。当地点でのSC02の場合は、扁平な礫石を床面上に据え、その上を灰白色粘土が覆っているが、立野遺跡では、粘土下部に柱穴状の小竪穴のある例が多いことが注意される。粘土によって梯子等の付属物を固定するとともに足場としていたとも考えられるが、今後の類例の増加を注意したい。

Ⅲ期は奈良時代後半から平安時代にかけての時期である。井戸、掘立柱建物、及びそれらを画する溝等からなる。掘立柱建物は、既述したように、平面的には4〜5ブロックにまとまり、各ブロック内で数回の建替えが行なわれている。これは建替えにあたって場の選定が一定の規制に則って行われたことを反映しており、各建物の方向性と相俟って或る時期内にまとまる建物群であると考えられる。1〜4期の建物群の各方向性は、SB02を初めとするⅠ期の建物群が日野氏の復元された当該地点周辺の条里地割の南北線N-37°-Wにやや合うもののそれ以降の建物群は、地形に制約され、台地の尾根筋に並行して建られる傾向(注6)が窺われる。これらの建物と井戸、溝との細かい並存関係については明確でないが、各遺構からの遺物の出土傾向は、SE01〜03のそれとほぼ同じ時期内におさまることから、井戸の使用から廃絶の期間（8世紀半ばから9世紀初め）にかけて、数回の建替え、溝の位置の若干の変更等を伴いながら並存していたと思われる。

これらの遺構の性格については、極めて狭い範囲の調査であるために明言はできないが、大量の須恵器、布目瓦、製塩土器などの出土遺物、高床の倉庫群と考えられる掘立柱建物群をみると、一村落の一隅であるとは言えない面がある。いくつかの異った建物群で構成された、規模の大きな施設の一端とも考えられる。当地点とほぼ同時期の調査された周辺遺跡のうち、板付遺跡G—8a調査区(注7)、那珂久平遺跡(注8)においては、復元条里にほぼ合致する溝が検出されてお

り、少なくとも三笠川と諸岡川との間に形成された沖積地には奈良時代半ばに遡る条里が存在したことが除々に判ってきている。特に那珂久平遺跡では、那珂郡家の比定にあたって、立地上から再検討をせまる所見が得られており、当該期における那珂遺跡を中心(注9)とした地域の歴史的な再構成は流動的な状況である。これは、台地部の調査が比較的少なかったことにも理由があるが、当地点を含めて、那珂台地の当該期の遺跡の再評価は今後の調査に期待したい。

Ⅳ期は、5期とした建物群が該当する。時期は明確ではないが、少なくとも包含層よりは古い時期のものであろうと思われる。建物相互間には、規模、方向性など統一性は窺われず、時期幅があるものか、復元において無理があるものかやや問題がある。

Ⅴ期は包含層が形成され、SD01の掘削から埋没までの時期で、14世紀代から16世紀代ごろにかかる時期(注10)が考えられる。SD01と並行すると思われる遺構は検出されていない。当該期の地形の改変は相当のものであったと思われ、この時期に、先行する各時期の遺構は削平され、消滅している。これはおそらく、中世後半における新たな開田が、同時期の水田が検出された那珂深ヲサ遺跡等の沖積部のみならず、台地部にも及んだ可能性を示唆していると考えられる。SD01は台地部と沖積部(注10)を画する溝であるとともに、台地部への灌漑用の水路として設けられ、若干の路線の変更を伴いながら現在の那珂小学校東縁を流れる水路へ移行してゆくと思われる。

以上各時期の問題点を述べたが、次に井戸からまとまって出土した須恵器について記す。

2．井戸出土の遺物について

発掘区の東縁部付近で切り合って検出された3基の井戸（SE01～03）からは、多種の土器と木器が出土した。ここでは、各井戸から出土した土器の年代とその特徴についてふれてみる。

年代について

SE01～03出土遺物は、およそ8世紀から9世紀にわたる時期のものと考えられる。この時期の資料は最近増えているものの未だ不十分で、その年代決定は大宰府出土遺物の編年に依るところが大きい。しかし、大宰府史跡出土遺物も量的には少なく、編年される器種も限(注12)られる。この意味でも、井戸より出土した一括の土器は補足するのに重要と言えるであろう。

SE01の土器　時期決定の指標となるものは土師器椀121である。大宰府史跡の出土遺物からはSE400上層出土の椀が近似するものとしてあげられる。器形はともに体部がほぼ直線的にのび平底をなす。底部端につけられた高台(注13)は121のものが細身でやや長いという感じをうけるが、外反してのびていくのは共通する。調整方法は121は不明で、比較できない。

SE02の土器　出土遺物が少ないので、細かい時期を決めるのは困難である。検出時の切り合い関係から、SE03にやや先行するものとしか判断できない。

SE03の土器　最も多量に出土し、器種も多様である。前代の混入もあるが、ほぼ一括資料として扱える。その年代決定は土師器の椀、坏等に復元できるものがなく、須恵器の坏が指標となる。SE03出土の坏蓋は、体部の差違はあるがふくらみがないものが多く、口縁端部は断

面三角形を呈し、内側に鋭い稜をもつ。坏身は体部と底部の境が不明瞭で、底部端よりやや内側に高台がつく。高台は短く、わずかに外方へのびるものが多い。後出の体部と高台が直線的になるものは見出せない。 大宰府史跡の出土遺物ではSK1280、 SK1285のものが近いと思われる。(注14)

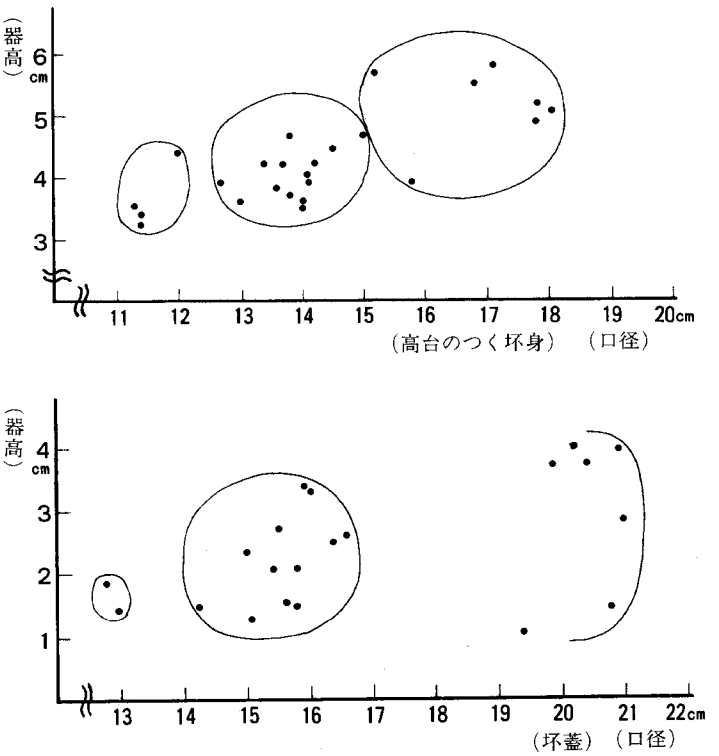
以上の、各井戸出土土器の年代からその埋没時期をSE01は9世紀初頭、SE03は8世紀中頃〜後半、SE02はSE03にやや先行するが近い時期に推定する。

その他

SE03出土遺物の各器種における特徴を2、3述べておく。SE03から出土した須恵器の坏については、その法量をグラフ化してみた。(Tab 3) 前章の遺物説明で述べたように坏身、坏蓋では3群に分類できる。坏身では口径11cm〜12cm内外にかけてのものが少量でまとまり、口径13cm〜15cmにかけてのものは口径14cm、器高4cm位を中心に最も多く集中する。口径15cm以上のものになると口径、器高ともばらつきが大きくなる。坏蓋でも法量は異なるものの同様の傾向が認められる。この事は、同時期ぐらいと思われる牛頸石坂窯跡—C地点—の報文中で考察されている事とほぼ一致する。(注15) 同じ供膳形態である皿においても、量的に少ない事や、同時期として扱えるか等問題はあるが(注16)法量から三種ほどの分化が認められる。しかし、このような器種分化が、時代の推移とともにどのように変化するものか、資料を持ち得ずここで明らかにすることはできない。

SE03出土の土師器の甕は249を除き同時期のものと考えられる。甕256に近似するものとしては干潟遺跡のⅣ式に比定される甕(注17)があげられるが、胴部の張る把手付甕等については今後資料の追加を待ちたい。なお249は他の甕より古式のものと思われる。カマドは同時期と思われる大宰府条坊跡のSK015出土のものと器形、調整方法等が似ている。(注18)

以上まとまりがないが気づいた点を述べてみた。



Tab 3. SE03出土須恵器法量グラフ

Tab 4．井戸出土須恵器観察表

SE01

法量の（　）は推定値、復元値を示す。

遺物番号	器種	法量（cm）①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高	調整及び特徴	備考
126	坏身	⑤ 0.45	外面底部回転ヘラ切り。残存部その他回転ナデ。高台は厚さ2.5㎜の細身でやや外がわに直線的にのびる。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存少片
128	鉢	① 21.9　② 9.5（推定）	残存部すべて回転ナデ。口縁部は外面が若干外側にはり出す。端部上面は平坦に近い。色調外面淡赤褐色、内面灰色。胎土微砂粒を少し含む。焼成軟。	残存⅔
129	鉢	底径14.8	外面底部回転ヘラ削り。内面底部不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調灰褐色。胎土砂粒を若干含む。焼成良好。	残存底部の一部

SE02

遺物番号	器種	法量（cm）①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高	調整及び特徴	備考
130	坏蓋		残存部すべて回転ナデ。口縁部はやや外傾し端部は丸い。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存少片

SE03

遺物番号	器種	法量（cm）①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高	調整及び特徴	備考
134	坏蓋	① 15.0　② 4.0	天井部外面⅓回転ヘラ削り。天井部内面中央は不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調内外黒灰色。胎土砂粒若干含む。焼成良好。	残存½弱
135	〃	① 13.0　② 4.2	天井部外面⅓回転ヘラ削り。天井部内面中央は不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調暗灰色。胎土精良。焼成良好。	残存½
136	坏身	① 13.4 受け部径15.4 ② 4.2　立ち上がり高1.3	底部外面½回転ヘラ削り。残存部他は回転ナデ。外面底部にカキ目が残る。色調暗灰色。胎土は砂粒を比較的多く含む。焼成良好。	残存⅙
137	〃	① 11.1～11.2 受け部径12.8 ② 4.0 立ち上がり高0.95	底部外面½回転ヘラ削り。底部内面中央若干の不定方向のナデ。他は回転ナデ。底部内面中央焼きぶくれ。色調灰色。胎土砂粒若干含む。焼成良好。	残存⅙
138	〃	① 11.4～11.5受け部経13.8　② 3.5(復元)立ち上がり高0.9	底部外面½回転ヘラ削り。残存部他は回転ナデ。色調暗灰褐色。胎土精良。焼成良好堅緻。	残存⅕
139	〃	① 13.4 受け部経15.6 ② 3.5　立ち上がり高0.45	天井部外面⅓回転ヘラ削り後未調整。天井部内面中央不定方向のナデ。色調灰白色。胎土精良。焼成軟。	残存½
140	坏蓋	① 12.8（推定）　② 1.5 （残存部のみ）	天井部外面½回転ヘラ削り。天井部内面中央不定方向のナデ。外面口縁部に沈線が入る。端部は丸い。色調黒灰色。胎土砂粒若干含む。焼成良好。	残存⅔
141	〃	① 13.0　② 1.1 （残存部のみ）	天井部外面½回転ヘラ削り。天井部内面中央不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁部は短く端部は弱い稜をもつ。色調灰色。胎土砂粒を比較的多く含む。	残存⅔
142	〃	① 15.4　② 2.05 ③ 2.25　④ 0.6	天井部外面⅔回転ヘラ削り。内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。つまみは丸みをもつ。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅕

遺物番号	器種	法量（cm） ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高	調整及び特徴	備考
143	坏蓋	① 15.5 ② 2.7 ③ 2.0 ④ 0.7	天井部外面1/3強回転ヘラ削り。天井部内面中央不定方向のナデ。他は回転ナデ。つまみ上面は平坦に近い。口縁端部は鋭い。色調黒灰色。胎土砂粒を比較的多く含む。焼成良好。	残存4/5
144	〃	① 15.0 ② 2.35 ③ 2.2 ④ 0.65	天井部外面2/3回転ヘラ削り。天井部内面中央不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁部は比較的短く端部は弱い稜をもつ。色調灰褐色。胎土精良。焼成良好。	残存1/2
145	〃	① 16.4 ② 1.8 （残存部のみ）	外面はほぼ全面に灰釉がかかりまた器面が粗れているため調整不明。天井部内面中央不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁端部は丸い。色調暗灰色。胎土砂粒を比較的多く含む。焼成良好。	残存3/5
146	〃	① 16.6 ② 2.6 ③ 2.65 ④ 0.7	天井部外面1/2回転ヘラ削り。天井部内面2/3不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面回転ヘラ削りと回転ナデの境に変換点をもつ。口縁端部は鋭い。外面一部に重ね焼きによる色調の変化がある。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存3/5
147	〃	① 20.0〜20.4 ② 4.0 ③ 2.5 ④ 0.7	天井部外面2/3回転ヘラ削り。天井部内面2/3不定方向のナデ。他は回転ナデ。内、外面に重ね焼きによる色調の変化がある。色調外面灰色、内面暗灰色。胎土精良。焼成良好。	ほぼ完型
148	〃	① 21.0（推定） ② 2.5（残存部のみ）	天井部外面2/3回転ヘラ削り。天井部内面2/3不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁端部は丸い。色調灰白色。胎土砂粒をやや含む。焼成やや軟。	残存2/5
149	〃	① 20.8（推定） ② 1.3 （残存部のみ）	天井部外面2/3弱回転ヘラ削り。天井部内面2/3不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調暗灰色。胎土精良。焼成良好。	残存2/5
150	〃	① 14.4（推定） ② 1.5 ③ 1.6 ④ 0.2〜0.4	天井部外面1/3強回転ヘラ削り。内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。つまみ上面中央部がややくぼむ。色調青灰色。胎土砂粒を比較的多く含む。焼成良好。	残存2/5
151	〃	① 15.1 ② 1.2	天井部外面1/2回転ヘラ削り。天井部内面中央不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁端部は丸い。外面灰釉がかかる。色調外面灰褐色、内面灰色。胎土砂粒を比較的多く含む。焼成良好。	残存2/5
152	〃	① 15.8 ② 1.5	天井部外面1/2回転ヘラ削り。天井部内面2/3不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調外面青灰色、内面褐色。胎土精良。焼成良好。	残存1/5
153	〃	① 15.8 ② 1.5 ③ 2.4 ④ 0.75	天井部外面2/3回転ヘラ削り。天井部内面2/3不定方向のナデ。他は回転ナデ。内外面一部に灰釉がかかる。内面重ね焼きによる色調の変化あり。色調外面暗灰色、内面灰色。胎土精良。焼成良好。	残存1/2
154	〃	① 15.8 ② 1.6	天井部外面2/3回転ヘラ削り。天井部内面2/3不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁端部はやや丸みをおびる。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存1/5
155	〃	① 15.9 ② 3.4 ③ 2.35 ④ 0.8	天井部外面1/3回転ヘラ削り。天井部内面中央若干の不定方向のナデ。他は回転ナデ。内外面に重ね焼きによる色調の変化を有す。口縁端部は比較的鋭い。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	完型
156	〃	① 16.0 ② 3.3 ③ 2.1 ④ 0.5	天井部外面1/3回転ヘラ削り。天井部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁端部は鋭い。外面灰釉がかかり、重ね焼きの痕跡を呈す。色調暗灰色。胎土精良。焼成良好。	残存4/5
157	〃	① 20.4 ② 3.7 ③ 3.2 ④ 0.7	天井部外面2/3弱回転ヘラ削り。天井部内面中央に若干の不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面重ね焼きによる色調の変化を呈す。色調灰色。胎土精良。焼成やや軟。	残存4/5
158	〃	① 19.9 ② 3.7 ③ 3.0 ④ 0.7	天井部外面2/3回転ヘラ削り。天井部内面2/3若干の不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁部は比較的短く、端部はやや丸みをおびる。外面重ね焼きによる色調の変化を呈す。色調灰褐色。胎土精良。焼成良好。	完型
159	〃	① 20.9 ② 3.95 ③ 2.8 ④ 0.7	天井部外面2/3回転ヘラ削り。内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁部は内傾し内面の体部との境には沈線が入る。端部は丸みを帯びる。色調青灰色胎土精良。焼成良好。	残存3/5
160	坏身	① 11.8 ② 3.4	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面中央不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部の境は明瞭な稜を有し、ほぼ直線的に起ちあがる。色調青灰色。胎土精良。焼成良好。	残存2/5
161	〃	① 12.9 ② 3.95	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面体部と底部との境は曲線的。色調灰色。胎土精良。焼成やや軟。	残存4/5
162	〃	① 14.6 ② 3.8	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部の境は比較的明瞭な稜を有す。色調灰色。胎土精良。焼成はやや軟。	残存2/5

遺物番号	器種	法量（cm） ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高	調整及び特徴	備考
163	坏身	① 14.2 ② 4.0	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調灰色。胎土精良。焼成やや軟。	残存4/5
164	〃	① 14.2 ② 4.3	底部外面回転ヘラ削り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調灰白色。胎土精良。焼成良好。	残存1/5
165	〃	① 14.7〜14.8 ② 4.0〜4.1	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境は不明瞭。色調外面褐色、内面暗灰色。胎土砂粒をわずかに含む。焼成やや軟。	残存2/5
166	〃	① 13.0 ② 2.9	底部外面回転ヘラ切り後若干のナデを加えるが未調整の部分を多く残す。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。焼き歪み有り。色調灰白色。胎土精良。焼成やや軟。	残存1/2
167	〃	① 12.8 ② 3.5	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存1/5
168	〃	① 13.0〜13.2 ② 3.2	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調灰白色。胎土精良。焼成やや軟。	残存2/5
169	〃	① 13.7〜13.8 ② 3.6	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。底部はほとんど平坦で、外面体部と底部との境は比較的明瞭。色調灰白色。胎土精良。焼成やや軟。	残存2/5
170	〃	① 14.4 ② 4.2	底部外面回転ヘラ削り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調外面黒灰色、内面灰白色。胎土精良。焼成良好。	残存4/5
171	〃	① 14.5 ② 4.4	底部外面回転ヘラ削り後ナデ。底部内面中央に不定方向の若干のナデ。他は回転ナデ。色調灰白色、部分的に淡赤褐色。胎土精良。焼成軟。	残存3/5
172	〃	① 12.0 ② 4.4 ⑤ 8.6 ⑥ 0.6〜0.65	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面体部と底部との境は比較的明瞭。色調淡赤褐色。胎土砂粒をやや含む。焼成軟。	残存1/2
173	〃	① 13.0（推定） ② 3.2〜3.5 ⑤ 9.0 ⑥ 0.2〜0.3	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。高台は中心からはずれた位置に貼付く。色調灰黒色。胎土砂粒を比較的多く含む。焼成良好。	残存2/5
174	〃	① 12.6〜12.8（復元） ② 4.2（復元） ⑤ 8.6 ⑥ 0.3〜0.31	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面中央不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境に鋭い稜をもつ。色調暗灰色。胎土精良。焼成良好。	残存2/5
175	〃	① 13.4 ② 4.3 ⑤ 8.0 ⑥ 0.3	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部中央不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境は不明瞭。色調暗灰色。胎土微砂粒を少し含む。焼成良好。	残存2/5
176	〃	① 13.6 ② 3.8 ⑤ 7.9 ⑥ 0.3	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定の方向ナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境は明瞭。体部は外に大きく開きながら起ちあがる。色調暗灰色。胎土精良。焼成良好。	残存3/5
177	〃	① 11.3 ② 3.55 ⑤ 7.25 ⑥ 0.3	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部の境はやや不明瞭。色調暗灰色。胎土砂粒を比較的多く含む。焼成良好。	残存2/5
178		① 11.4 ② 3.4 ⑤ 7.6 ⑥ 0.3	底部外面回転ヘラ削り後若干のナデ。底部内面不定方向のナデ。外面体部と底部の境はやや不明瞭。色調暗灰色。胎土精良。焼成良好。	残存2/5
179	〃	① 11.4 ② 3.25 ⑤ 7.2 ⑥ 0.4	底部外面回転ヘラ削り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面一部灰釉がかかる。色調黒灰色胎土微砂粒を少し含む。焼成良好。	完型
180	〃	① 13.0 ② 3.6 ⑤ 8.4 ⑥ 0.3〜0.4	底部外面回転ヘラ削り。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境は不明瞭。色調黒灰色。胎土精良。焼成良好。	残存2/5
181	〃	① 12.7（推定） ② 3.9 ⑤ 8.7〜9.2（推定）⑥ 0.5	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部の境は不明瞭。高台焼き歪む。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存4/5
182	〃	① 13.8 ② 3.7 ⑤ 10.8 ⑥ 0.4	底部外面回転ヘラ切り後若干のナデ。底部内面中央若干の不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面体部と底部の境は明瞭。色調暗灰色。胎土精良。焼成良好。	残存4/5

遺物番号	器種	法量（cm）①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高	調整及び特徴	備考
183	坏身	① 13.8 ② 4.65 ⑤ 9.7 ⑥ 0.6～0.35	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面体部と底部との境は明瞭。色調灰色。胎土微砂粒を少し含む。焼成やや軟。	残存⅕
184	〃	① 14.01 ② 3.6 ⑤ 9.6～9.9 ⑥ 0.45	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境は丸みをおびる。色調外面灰黒色、内面灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅖
185	〃	① 14.4 ② 4.2 ⑤ 9.1 ⑥ 0.2～0.3	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境は不明瞭。色調淡赤褐色。胎土精良。焼成軟。	残存⅗
186	〃	① 14.0 ② 3.5	底部外面回転ヘラ切リ後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境は明瞭。色調暗灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅖
187	〃	① 14.1～14.3 ② 4.2 ⑤ 10.4	底部外面回転ヘラ切り。残存部底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境は明瞭。色調暗灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅕
188	〃	① 15.1～15.3 ② 5.7 ⑤ 10.8 ⑥ 0.6	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境は明瞭。色調暗灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅖
189	〃	① 16.8（推定） ② 5.5 ⑤ 11.0（推定） ⑥ 0.45	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面体部中央でわずかに屈曲。外面体部と底部との境は不明瞭。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅖
190	〃	① 17.8 ② 4.9 ⑤ 11.2 ⑥ 0.4	底部外部回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。高台は少し中心がずれた位置に貼付。外面底部と体部との境は比較的明瞭。色調灰色。胎土微砂粒を少し含む。焼成良好。	残存⅕
191	〃	① 17.1 ② 5.8 ⑤ 11.75 ⑥ 0.5	底部回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。外面体部と底部との境は丸みをおびる。色調灰黒色。胎土精良。焼成堅緻。他は回転ナデ。	残存⅕
192	〃	① 13.7 ② 4.2 ⑤ 8.95 ⑥ 0.3	外面底部回転ヘラ切り後ナデ。底部内面若干の不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境は不明瞭。外面一部灰釉かかる。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅕
193		① 13.8 ② 4.1 ⑤ 8.6 ⑥ 0.2～0.5	底部外面は回転ヘラ切り後若干のナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面体部と底部の境は不明瞭。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅗
194	〃	① 14.1 ② 4.0 ⑤ 9.5	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部との境は不明瞭。外部一面灰釉かかる。色調灰黒色。胎土精良。焼成良好。	残存⅕
195	〃	① 14.1 ② 3.9 ⑤ 10.1 ⑥ 0.35	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面体部と底部の境は不明瞭。色調灰色。胎土砂粒を少し含む。焼成良好。	残存⅕
196	〃	① 14.5 ② 4.45 ⑤ 10 ⑥ 0.3～0.2	底部外面回転ヘラ削り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面底部と体部の境は不明瞭。色調灰白色。胎土精良。焼成良好。	残存⅗
197	〃	① 15.8（推定） ② 3.9 ⑤ 10.4（推定） ⑥ 0.4	底部回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。高台はやや内側に貼付。外面底部と体部との境はやや不明瞭。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅖
198	〃	① 15.0（推定） ② 4.7 ⑤ 8.8（推定） ⑥ 0.15～0.35	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。体部はやや外に開く。外面底部と体部の境は明瞭な稜をもつ。色調灰色。胎土微砂粒を少し含む。焼成良好。	残存⅖
199	〃	⑤ 10.4 ⑥ 0.3	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。外面底部と体部との境は不明瞭。色調淡赤褐色。胎土砂粒を少し含む。焼成軟。	
200	〃	① 18.0～18.1 ② 5.1 ⑤ 11.8 ⑥ 0.3～0.4	底部外面回転ヘラ削り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面体部と底部との境は不明瞭。色調灰色。胎土砂粒を比較的多く含む。焼成良好。	残存⅖
201	〃	① 17.8（推定） ② 5.2 ⑤ 10.0（推定） ⑥ 0.2～0.3	底部外面回転ヘラ削り。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面体部と底部の境は強い稜がはしる。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅖
202	Ⅲ	① 14.5 ② 1.9	底部外面回転ヘラ切り後若干のナデ。底部内面若干の不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調暗灰色。胎土砂粒を少し含む。焼成良好。	残存⅗

遺物番号	器種	法量（cm）①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高	調整及び特徴	備考
203	皿	① 15.3　② 2.3	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調灰色。胎土砂粒を比較的多く含む。焼成良好。	残存3/5
204	〃	① 15.0　② 2.2	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調灰黄色。胎土精良。焼成軟。	残存3/5
205	〃	① 17.7　② 2.35	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調青灰色。胎土精良。焼成良好。	残存1/2
206	〃	① 17.2　② 2.7	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調暗青灰色。胎土精良。焼成良好。	残存3/5
207	〃	① 18.6　② 2.2	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存3/5
208	〃	① 19.2　② 1.6	底部外面回転ヘラ切り後ナデ。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。底部は上方にややそる。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存4/5
209	高坏		坏部外面回転ヘラ削り。坏部内面回転ナデ。脚部内外に絞り痕有す。脚部中央部に横位の2条以上の沈線をもつ。脚部外面にタテ方向3条のヘラ記号有り。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	全体の3/5
210	〃	① 14.9　② 7.4 脚端径8.6　脚高5.6	坏部外面回転ヘラ削り。坏部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。脚部内外に絞り痕有す。坏部口縁端部は鋭い稜をもつ。脚裾端部は比較的鋭い稜をもつ。色調灰黒色。胎土微砂粒を少し含む。焼成良好。	残存全体の3/5
211	〃	脚端径10.4〜10.6 脚高4.4	残存部坏部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。脚端部はやや外方にのびる。脚部一部に灰釉かかる。色調灰色。胎土微砂粒を少し含む。焼成良好。	残存脚部の3/5
212	〃	脚端径10.5 脚高5.0	坏底部内面中央不定方向のナデ。他は回転ナデ。脚部外面にわずかに絞り痕が認められる。脚端部近くは外反する。脚端部はやや丸みをおびる。色調青灰色。胎土砂粒を少し含む。焼成良好。	残存脚部の3/5
213	〃	脚端径10.5 脚高5.9	残存部坏底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。脚端部近くはほぼ直にはねる。色調灰色。胎土微砂粒を少し含む。焼成やや軟。	残存脚部の4/5
214	〃	脚端径10.5 脚高5.3	残存部坏底部内面不定方向のナデ。坏底部外面回転ヘラ削り。他は回転ナデ。脚裾部は端部までの起状が小さい。脚端部は丸く収める。色調灰色。胎土精良。焼成軟。	残存脚部の4/5
215	〃		残存する坏部内面若干の不定方向のナデ。他は回転ナデ。脚部の外面わずかに絞り痕が認められる。器壁は薄く2.5㎜程度である。色調灰黒色。胎土砂粒を比較的多く含む。	残存脚部の2/5
216	〃		残存する坏底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存脚部の3/5
217	〃	① 19.0 ② 2.9（坏部のみ）	坏底部外面1/2回転ヘラ削り。坏底部内面中央不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁部外面は端部近くで外反し、端部上面はやや凹面をなす。色調青灰色。胎土砂粒を多く含む。	残存坏部の2/5
218	〃	① 20.6（推定） ② 3.0（坏部のみ）	坏底部外面1/2回転ヘラ削り。坏底部不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁部外面端部近くで外反し強い稜をもつ。端部は丸みをもつ。内面天井部中央付近径約10cmの円内は灰白色に色変。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存坏部の2/5
219	〃	① 22.8 ② 1.8（坏部のみ）	坏底部外面は3/4程まで回転ヘラ削り。坏底部内面3/4不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁部外面は端部近くで外反し、端部上面はやや丸みをもつが平坦に近い。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存坏部の1/5
220	〃	① 21.4（推定） ② 1.7（坏部のみ）	坏底部面は口縁部近くまで回転ヘラ削り。坏底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁部外面は端部近くで外反し、端部上面はやや丸みをおびるが平坦に近い。	残存坏部の1/5
221	〃	① 22.2 ② 2.5（坏部のみ）	坏底部外面1/2回転ヘラ削り。坏底部内面1/2不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁部外面は端部近くで外反し、端部上面はやや丸みをおびるが平坦に近い。色調暗灰色。胎土砂粒を少し含む。焼成良好。	残存坏部の2/5
222	長頸小壺	② 4.4〜4.6（胴部のみ） 胴部最大径9.1	底部外面不定方向のナデを施す。内面肩部以下不明。他は回転ナデ。肩部と胴部の境は丸みをもつ。色調底部外面と頸部内面灰色。他は灰黒色。胎土砂粒を少し含む。焼成良好。	胴部と頸部一部

遺物番号	器種	法量（cm） ①口径 ②器高 ③つまみ径 ④つまみ高 ⑤高台径 ⑥高台高	調整及び特徴	備考
223	長頸小壺	② 5.5〜5.7（胴部のみ） 胴部最大径9.8	底部外面不定方向のナデを施す。内面は肩部以下不明。他は回転ナデ。肩部と胴部との境の稜は鋭い。色調暗灰色。胎土精良。焼成良好。	胴部と頸部一部
224	坩	① 9.8 ② 4.7 ⑤ 6.2 ⑥ 0.2〜0.3	胴部外面½回転ヘラ削り。底部内面中央不定方向のナデ。他は回転ナデ。口縁は内面では外反し、外面は短くやや内傾する。端部は丸みをもつ。高台は短く外方にのびる。色調外面灰黒色。内面暗灰色。胎土微砂粒を少し含む。焼成良好。	残存½
225	長頸壺	① 12.0 ② 12.4 （頸部のみ）	頸部⅓以下内外面とも絞り痕が残る。他は回転ナデ。口縁端部付近は外方へのび、端部は鋭い稜をもつ。色調灰黒色。胎土砂粒を多く含む。焼成良好。	頸部のみ
226	壺蓋	① 17.4 ② 4.0 ③ 4.2 ④ 0.7〜0.9	天井部外面½回転ヘラ削り。内面天井平坦部不定方向のナデ。他は回転ナデ。端部は丸い。つまみ上面の起伏は小さい。天井部と体部の境は不明瞭。色調暗灰色。胎土砂粒を多く含む。焼成良好。	残存⅜
227	短頸壺	① 10.4 ② 19.3 ③ 11.6 ④ 1.0	外面体部下半回転ヘラ削り。内面底部不定方向のナデ。内面底部近くは、底部より体部にかけて、放射状のナデ。他は回転ナデ。外面口縁部は端部近くでわずかに外湾。内面口縁端部近くはわずかに内傾。端部上面は平坦ないし、わずかに凹む。端部は丸みをおび稜は不明瞭。色調灰色。胎土砂粒を多く含む。	残存⅘
228	鉢?	① 12.0	内面底部不定方向のナデ。残存部他は回転ナデ。口縁端部近くで内傾し、端部はやや丸みをおびた面をなす。端部の境の稜はやや鋭い。色調灰色。胎土砂粒を少し含む。焼成良好。	残存⅜
229	甕	① 6.5	外面肩部以下平行タタキ、内面肩部以下同心円文タタキ、色調灰色。胎土精良。焼成良好。口縁端部がやや鋭い稜をもって肥厚する。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅙
230	甕		外面肩部以下平行タタキ後ナデ消し。内面肩部以下同心円文タタキ後ナデ消し。タタキ痕は浅くわずかにその痕跡をとどめる。その他は回転ナデ。頸部からの立ちあがりは直立気味である。色調灰色。胎土精良。焼成良好。	残存⅙
231	鉢	① 23.6（推定）底径15.5 ②18.1	外面体部下半回転ヘラ削り。底部内面不定方向のナデ。他は回転ナデ。外面口縁端部はやや丸みをおびる。端部近くは逆ハの字状を呈す。色調暗灰色。胎土砂粒を少し含む。焼成良好。	ほぼ完型
232	甕		外面擬格子タタキ。内面平行タタキ。色調外面灰色。胎土精良。焼成良好。	底部近く一部

注記（参考文献）

注１、福岡市教育委員会　1974板付周辺遺跡調査報告書(1)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集
福岡市教育委員会　1984『諸岡遺跡―第14・17次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集
注２、小田富士夫・柳田康雄・真野和夫　1970『野添・大浦窯跡群』　福岡県文化財調査報告書第43集
注３、福岡市教育委員会　1983『浄泉寺遺跡―遺構編―』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第99集
注４、福岡市教育委員会　1977『片江辻遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第40集
注５、福岡県教育委員会　1986『甘木市所在立野遺跡の調査(3)』　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―８―
注６、日野尚志　1976『筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について』
佐賀大学教育学部研究論文集　第24集（Ⅰ）
注７、福岡市教育委員会　1982『G―８ａ調査区』　板付周辺調査報告書(8)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第83集
注８、福岡市教育委員会　1986『那珂久平遺跡Ⅰ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第133集

注９、注６に同じ。日野氏は小字名「群久」（君休）から、福岡条里区七図―里に位置する地点を那珂郡家に比定し、郡家域を方六町としている。ちなみに第７次調査地点は、六図二里の南東隅里境に位置している。
注10、SD01床面出土の土師皿ｂ（75・76）は、法量及び形態上、大宰府史跡 SX1200の土師皿に類する。また SD01の下層出土の青磁椀（69）、及び SD01上層の遺物の出土傾向は、大宰府史跡第57次調査暗茶色土層と同様な傾向を示しており、14世紀半ばから15世紀を経て、16世紀前ごろまでには SD01は埋没したと考えられる。九州歴史資料館　1978『第45次調査』　大宰府史跡　昭和52年度調査概報
九州歴史資料館　1979『第57次調査』　大宰府史跡　昭和53年度調査概報
注11、中世の水田址が検出されたのは、周辺では、那珂深ヲサ第１次・第２次、板付水田遺跡第４区、那珂君休遺跡、那珂久平遺跡などがある。

注12、森田　勉　1983「大宰府の出土品③―土器・陶磁器」　佛教芸術 146
この他、大宰府史跡以外の遺物を用いた編年に、「向佐野、長浦窯跡の調査」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告（Ⅵ）　1975、「干潟遺跡Ⅰ」福岡県文化財調査報告書第59集などがある。
注13、九州歴史資料館　1973　大宰府史跡　昭和47年度発掘調査概報
横田賢次郎　1979「大宰府出土の土師器に関する覚え書き（３）」九州歴史資料館論集５
注14、九州歴史資料館　1978『第45次調査』　大宰府史跡・昭和52年度調査概報
注15、大野城市教育委員会　1985『牛頸石坂窯跡―Ｃ地点―』　大野城市文化財調査報告書第14集

注16、報文中では、口径が11〜12cm、14cm、18cmに集中する傾向がみられ唐尺の使用が考えられている。掲載はしなかったが、「牛頸石坂窯跡」の観察表をもとにグラフ化を行ない、ドットの分布が SE03と類似する事が認められた。故に、SE03出土須恵器を３群に分類するのに参考とした。
注17、注12に前掲

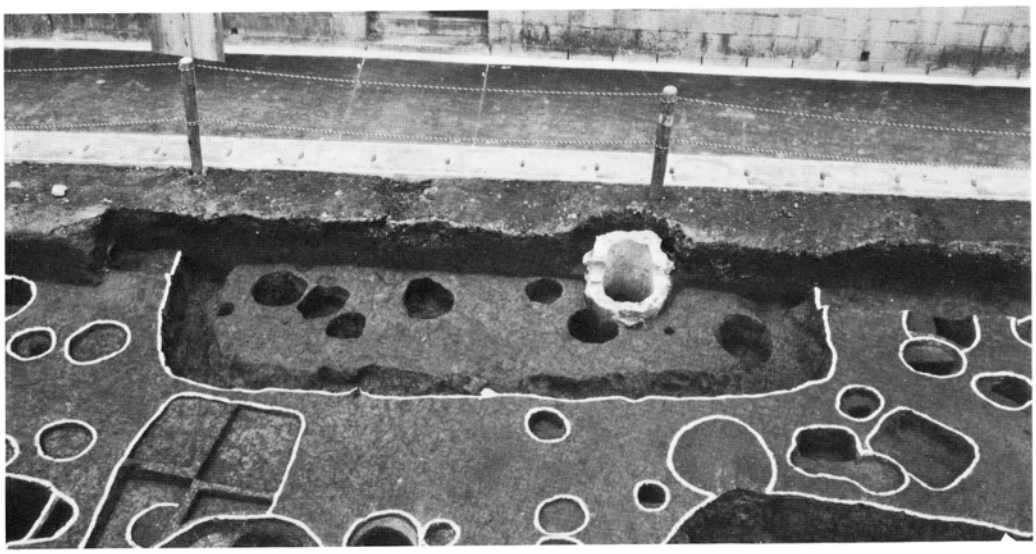
注18、大宰府町教育委員会　1982『大宰府条坊跡　観世音寺土地区画整理に伴う発掘調査（１）』大宰府町文化財報告書第５集

図　　版

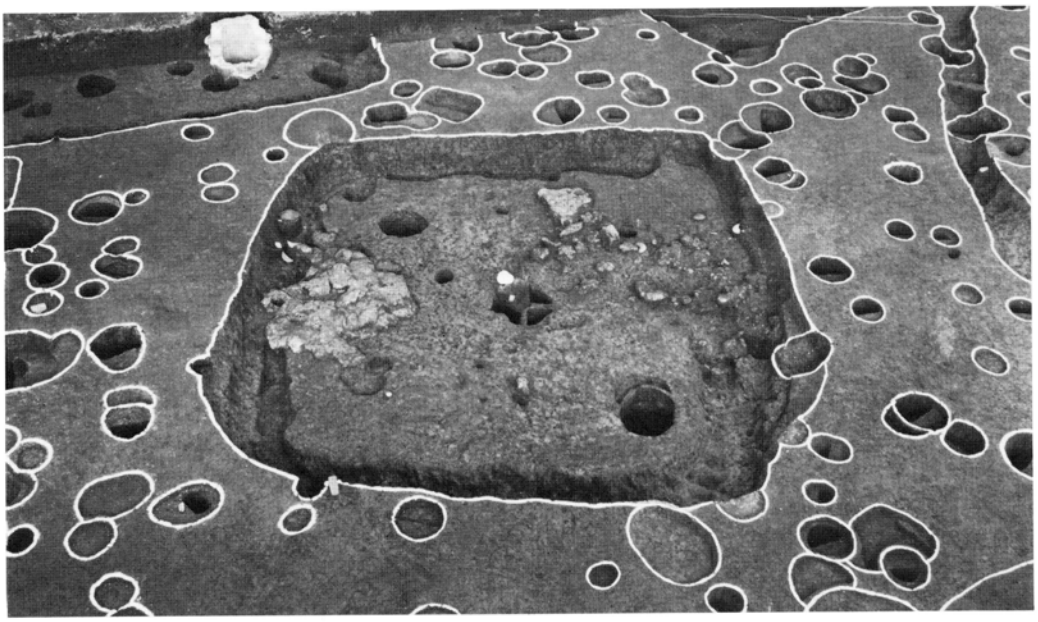
那珂遺跡群第７次調査地点遠景（南東から）

1．調査前近景（南から）

2．調査終了全景（北から）



1．SC01完掘状況（東から）

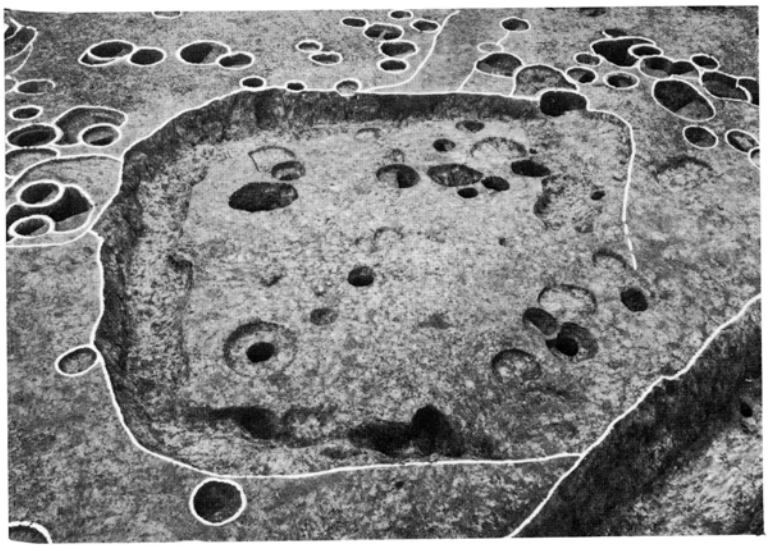


2．SC02完掘状況（南東から）

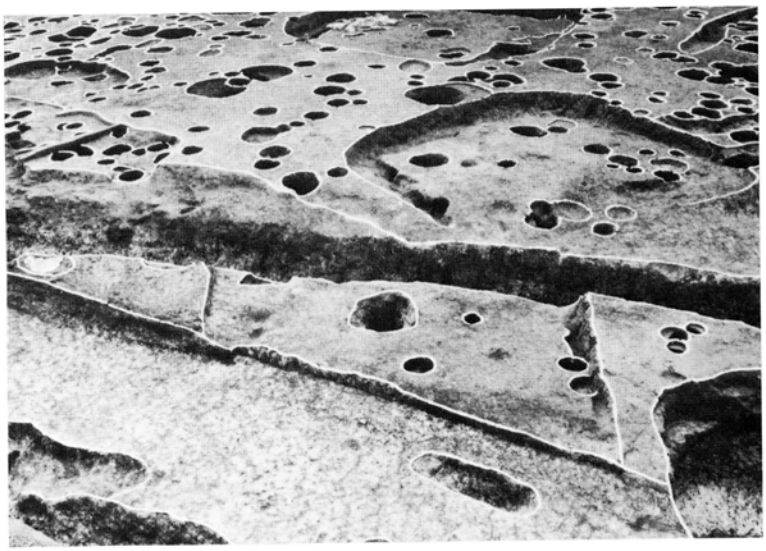
3．SC02南壁粘土塊出土状況（北東から）

4．SC02カマド主軸断面（南東から）

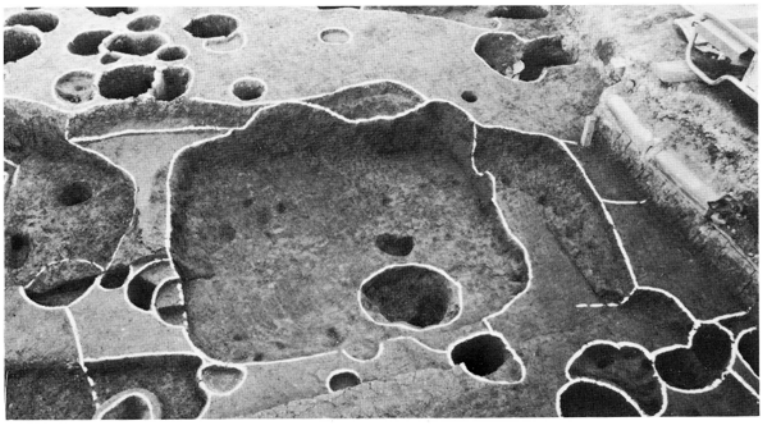
1．SC03完掘状況
（東から）



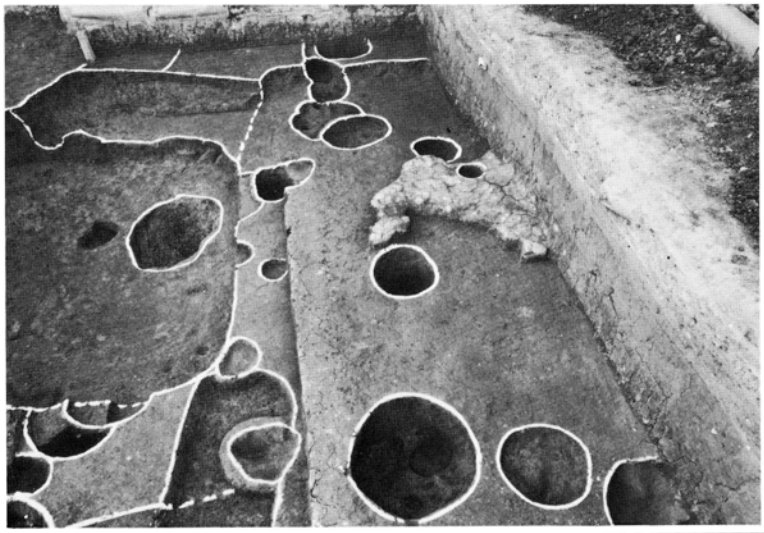
2．SC04完掘状況
（南東から）



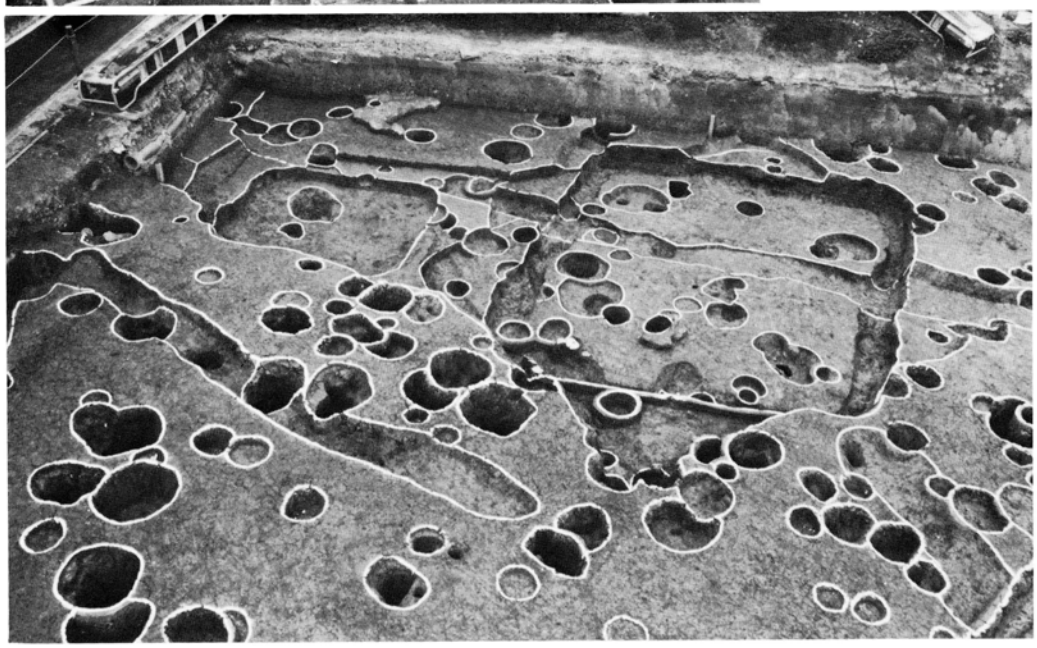
3．SC05完掘状況
（東から）



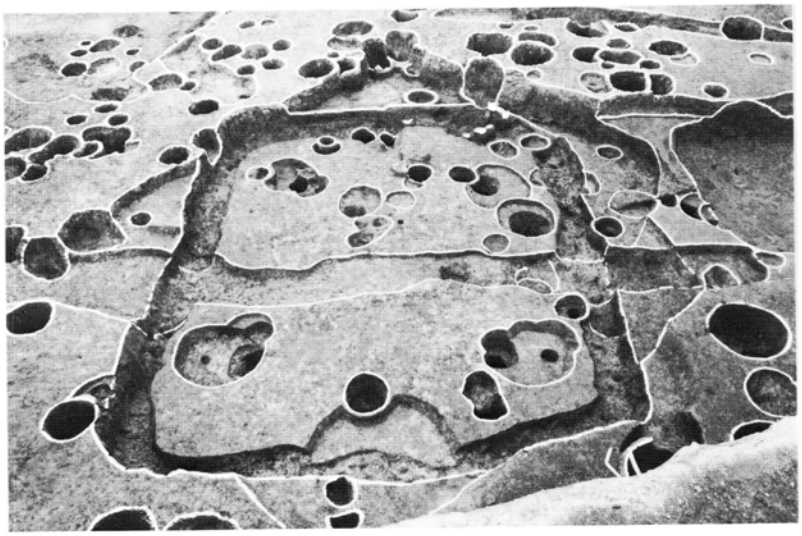
1．SC06完掘状況
（北から）



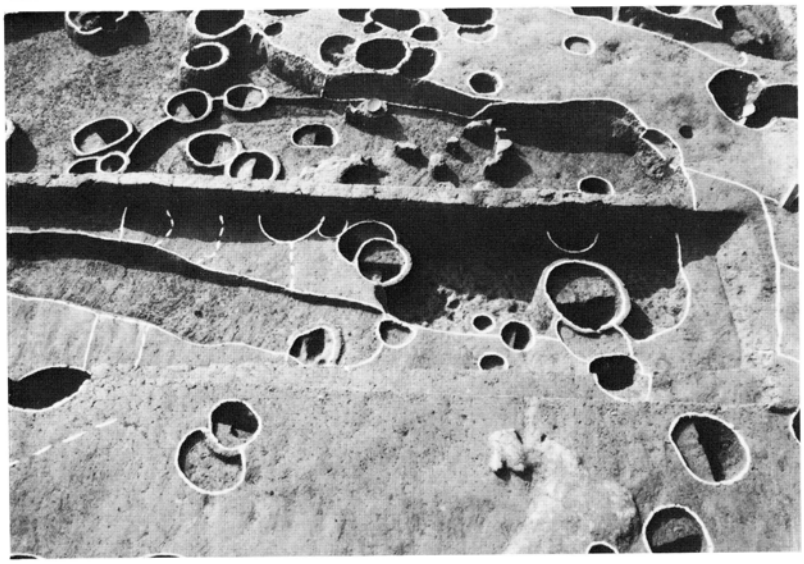
2．SC08完掘状況
（東から）



3．SC07～11完掘状況（南から）



1．SC09完掘状況
（北北東から）

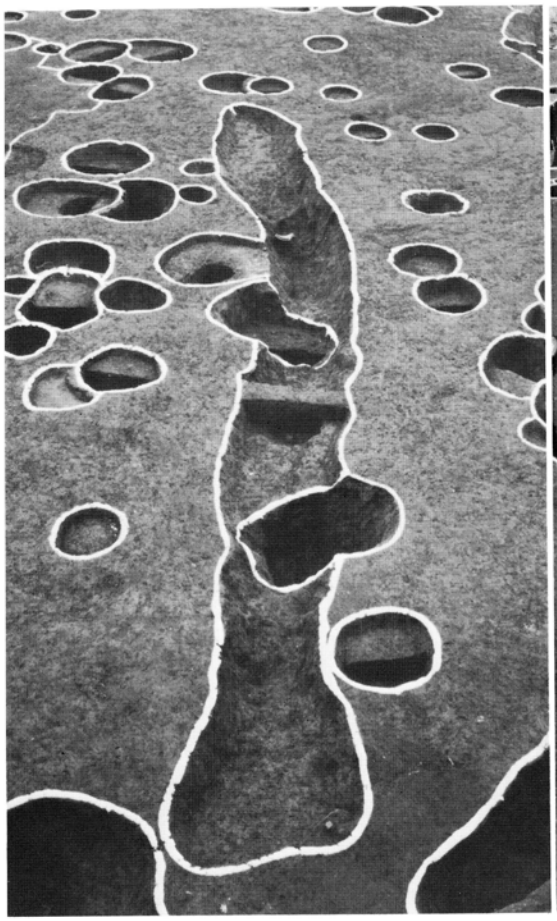


2．SC10完掘状況
（北から）

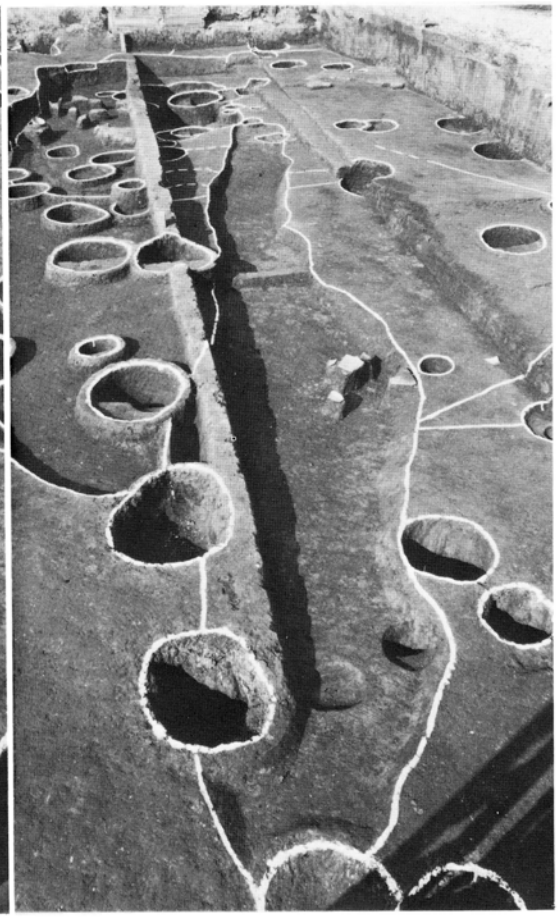
3．SC11完掘状況
（北東から）

1．SD01・02・04完掘状況（北から）

2．SD01・02・04完掘状況（南から）

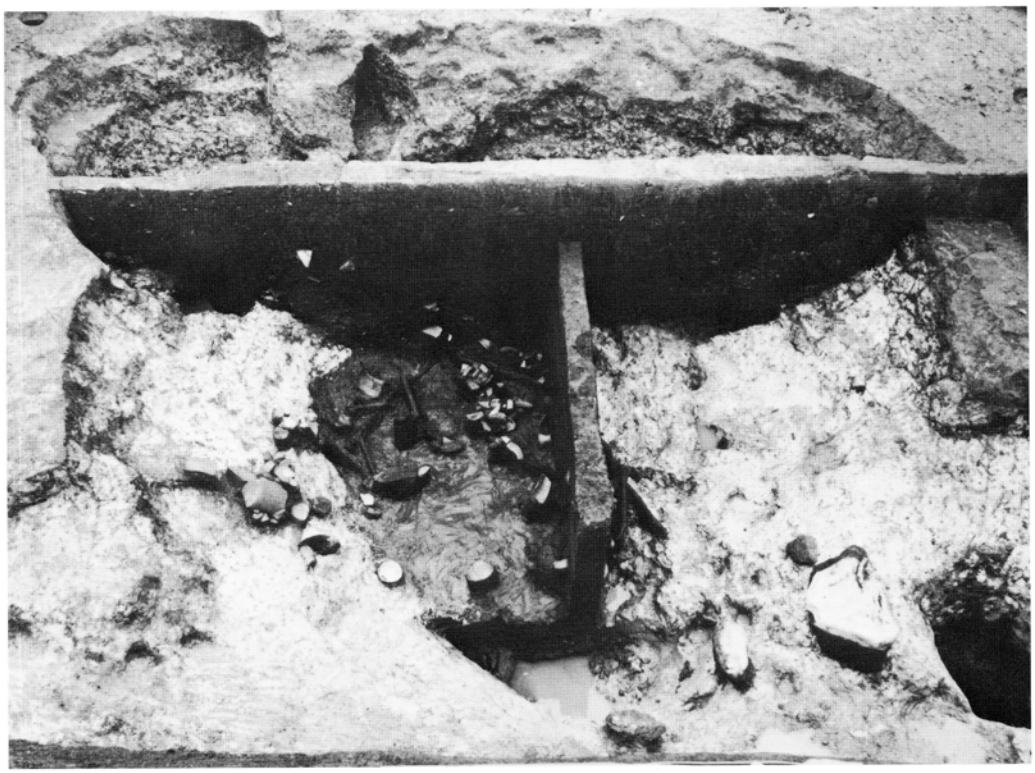


1．SD03完掘状況（北北西から）

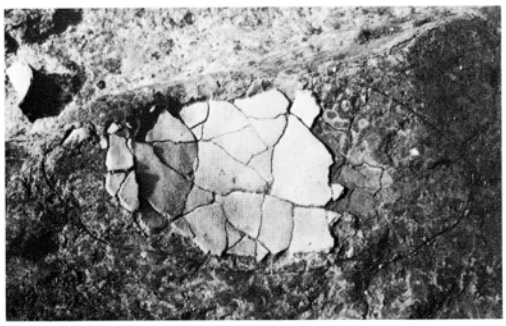


2．SD05完掘状況（東から）

3．SE01・02・03完掘状況（南東から）

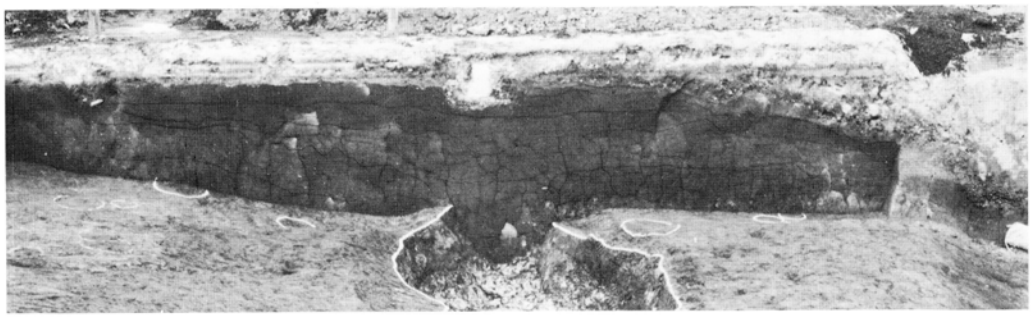


1．SE03埋土上層下面遺物出土状況（南東から）

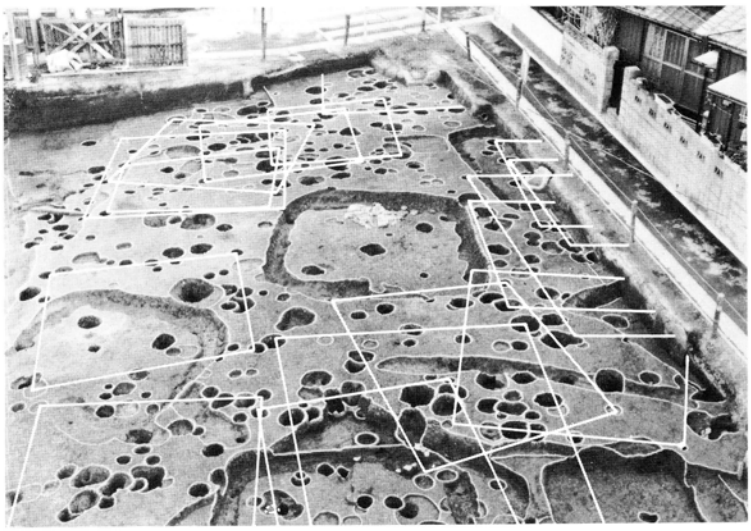


2．SK01出土状況（南東から）

3．SX01遺物出土状況（南東から）

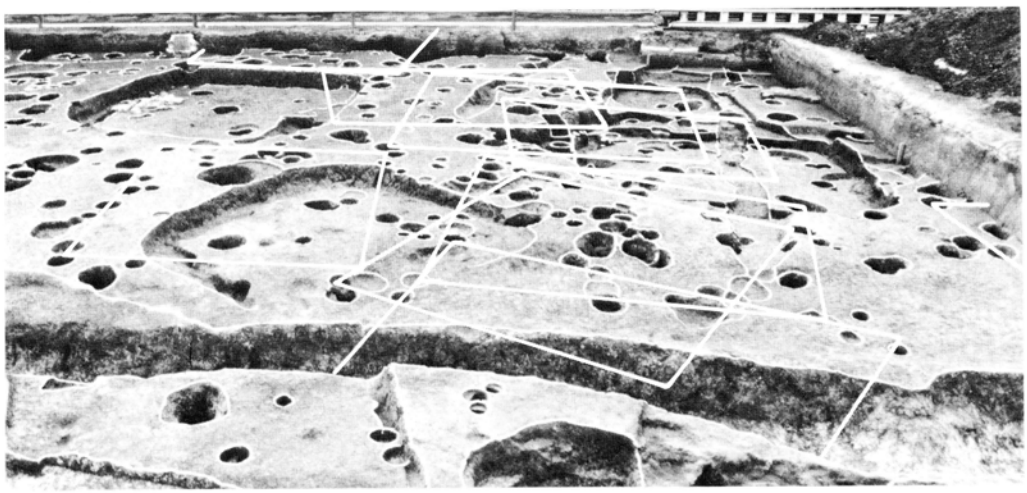


4．調査区北壁土層堆積状況(部分写真)（南から）

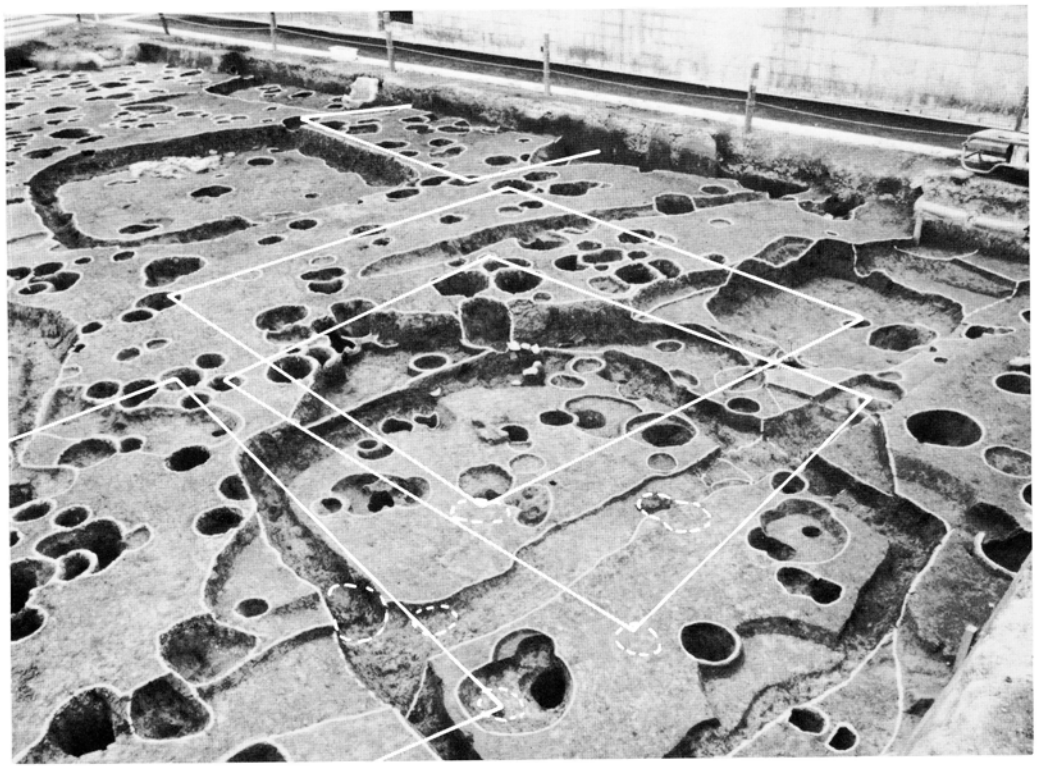


1．掘立柱建物群
分布状況(1)（北から）

2．掘立柱建物群分布状況(2)（北東から・一部省略）



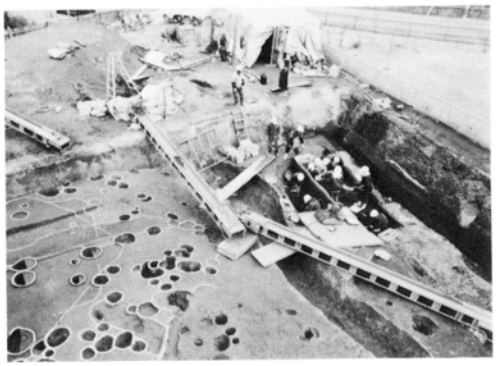
3．掘立柱建物群分布状況(3)（東から）



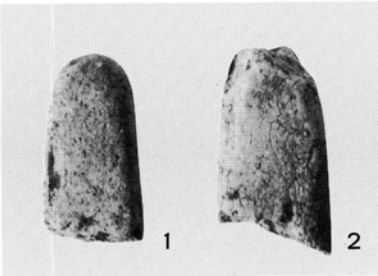
1．掘立柱建物群分布状況(4)（北東から・一部省略）

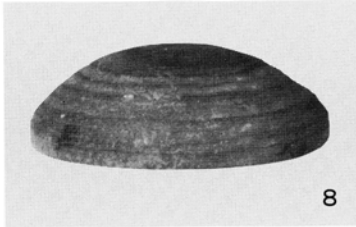
2．

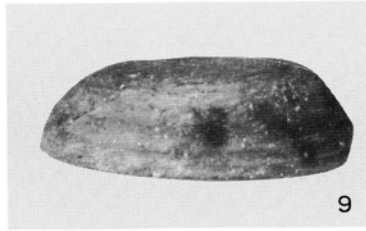
3．

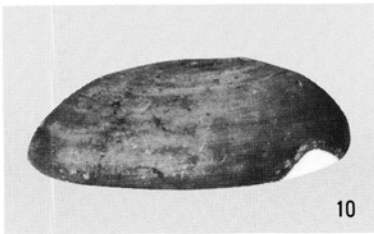


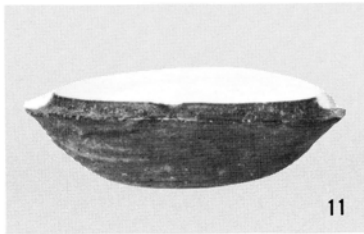
2．調査区南側作業風景（北東から）
3．SC02、SD03掘下げ作業風景（南から）
4．SE02・03掘下げ作業風景（南西から）

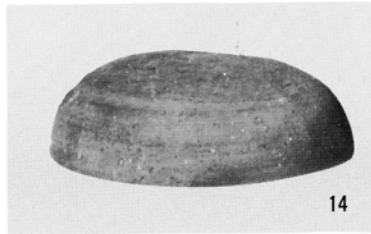


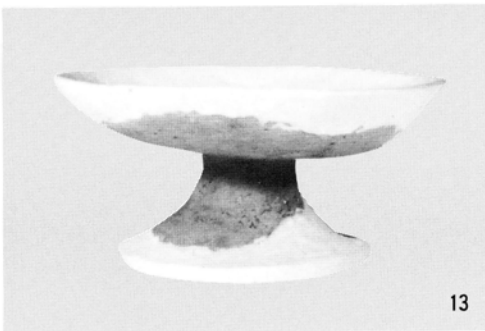


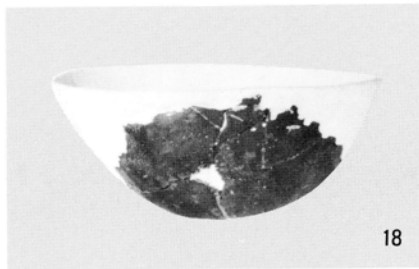


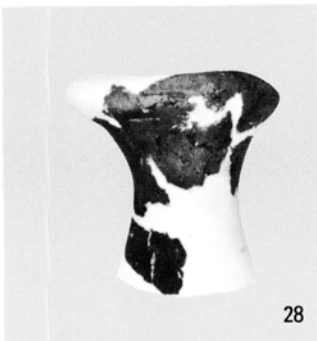


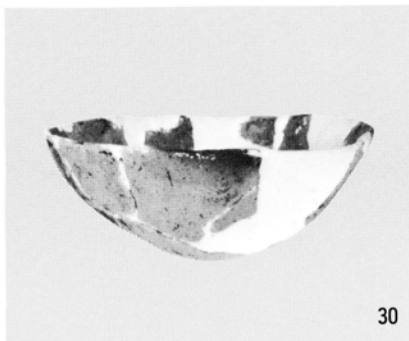


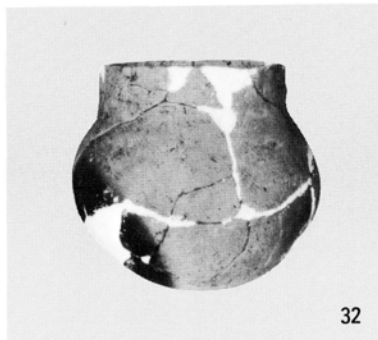


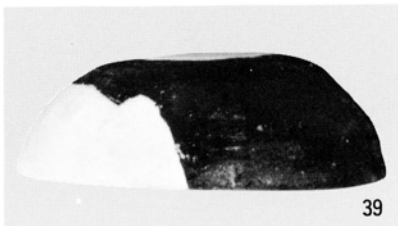


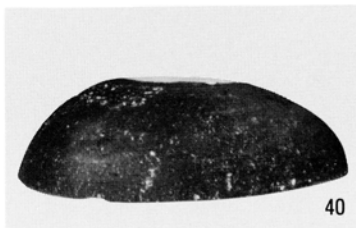




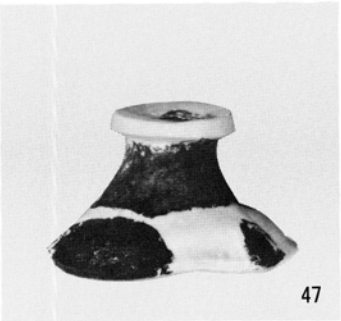


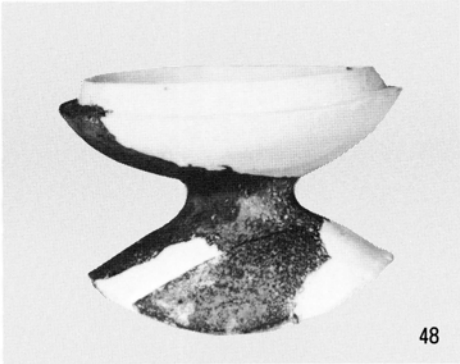


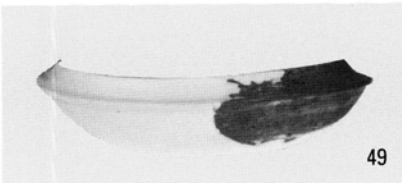


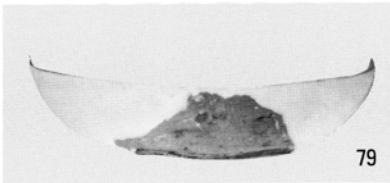


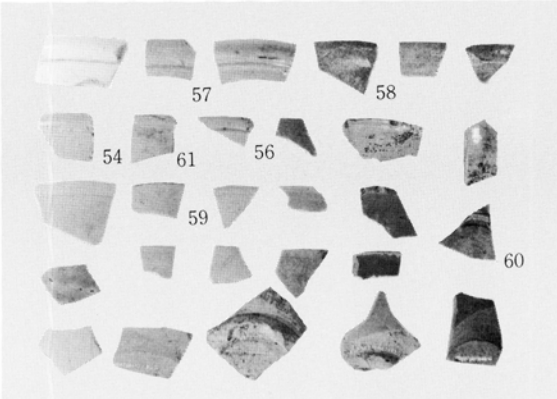
那珂７次ＳＣ01・02・05・09出土土器（18・30・32は1/5、他は1/3）

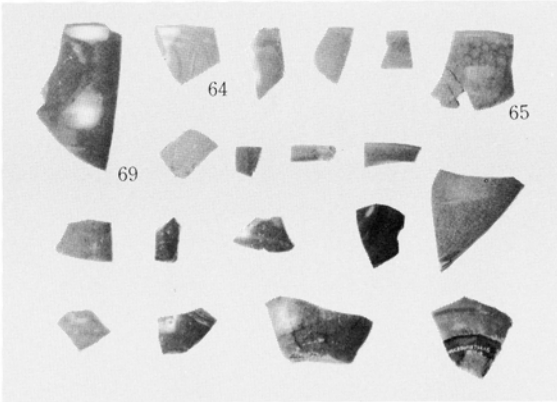


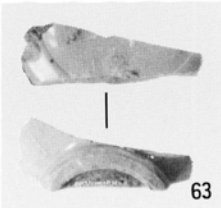


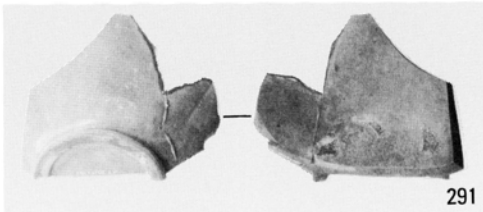




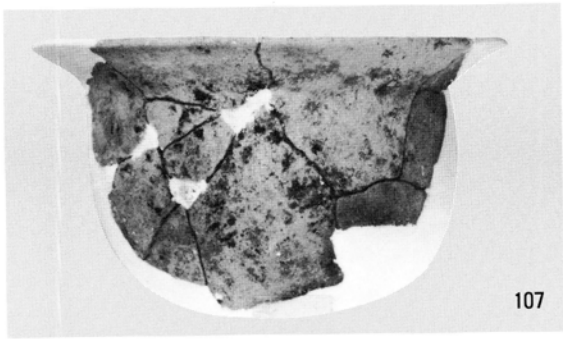


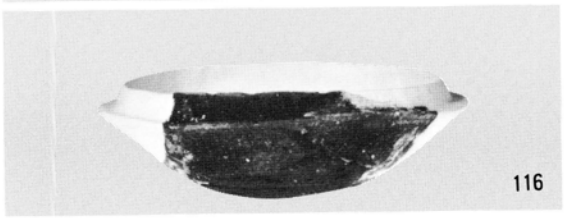


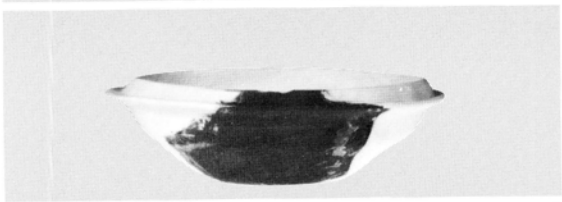


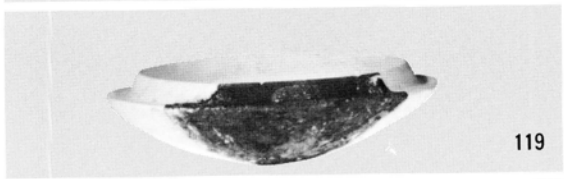


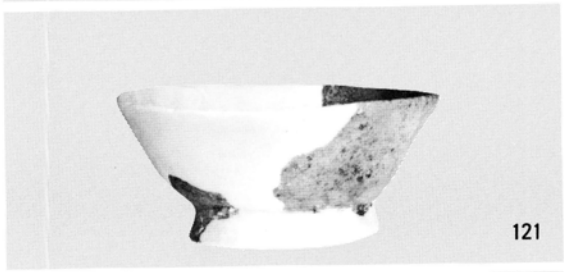
那珂７次ＳＣ09・11・ＳＤ01出土土器（291は、柱穴 SD299出土
51は1/5、68は1/2、他は1/3）

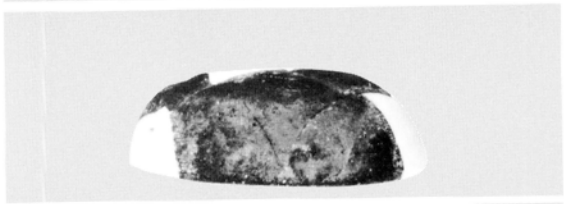


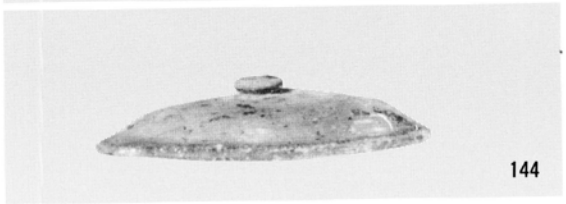


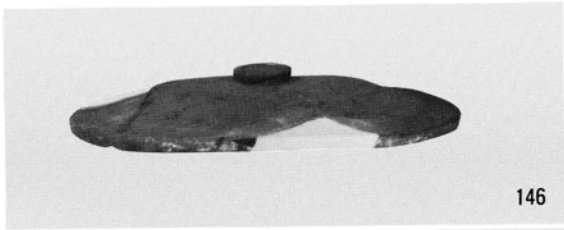


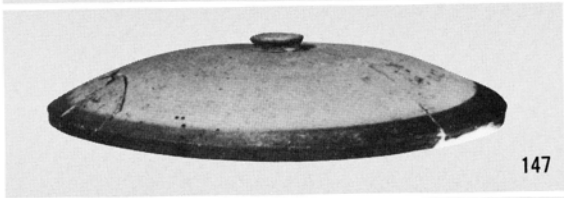


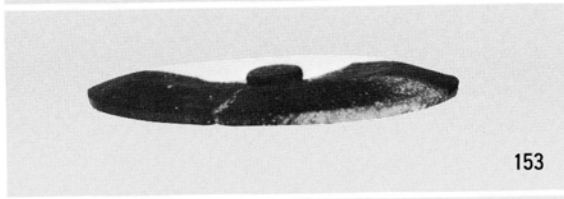


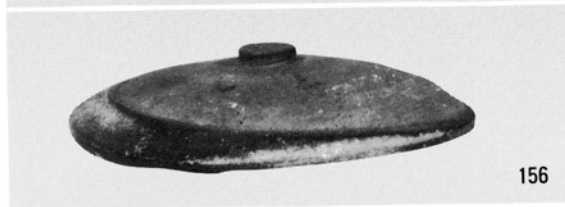


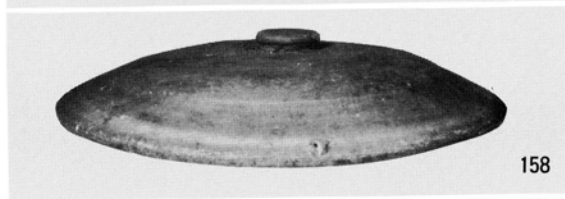


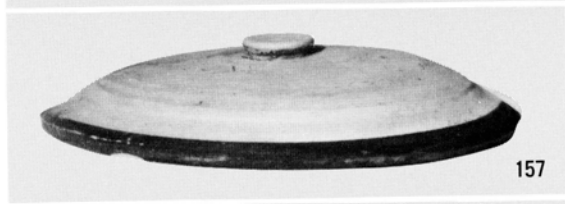


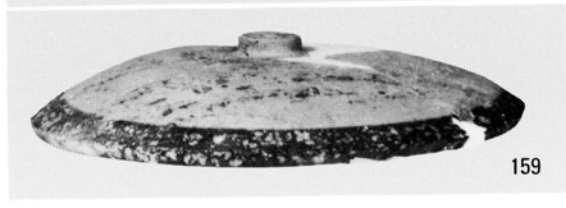




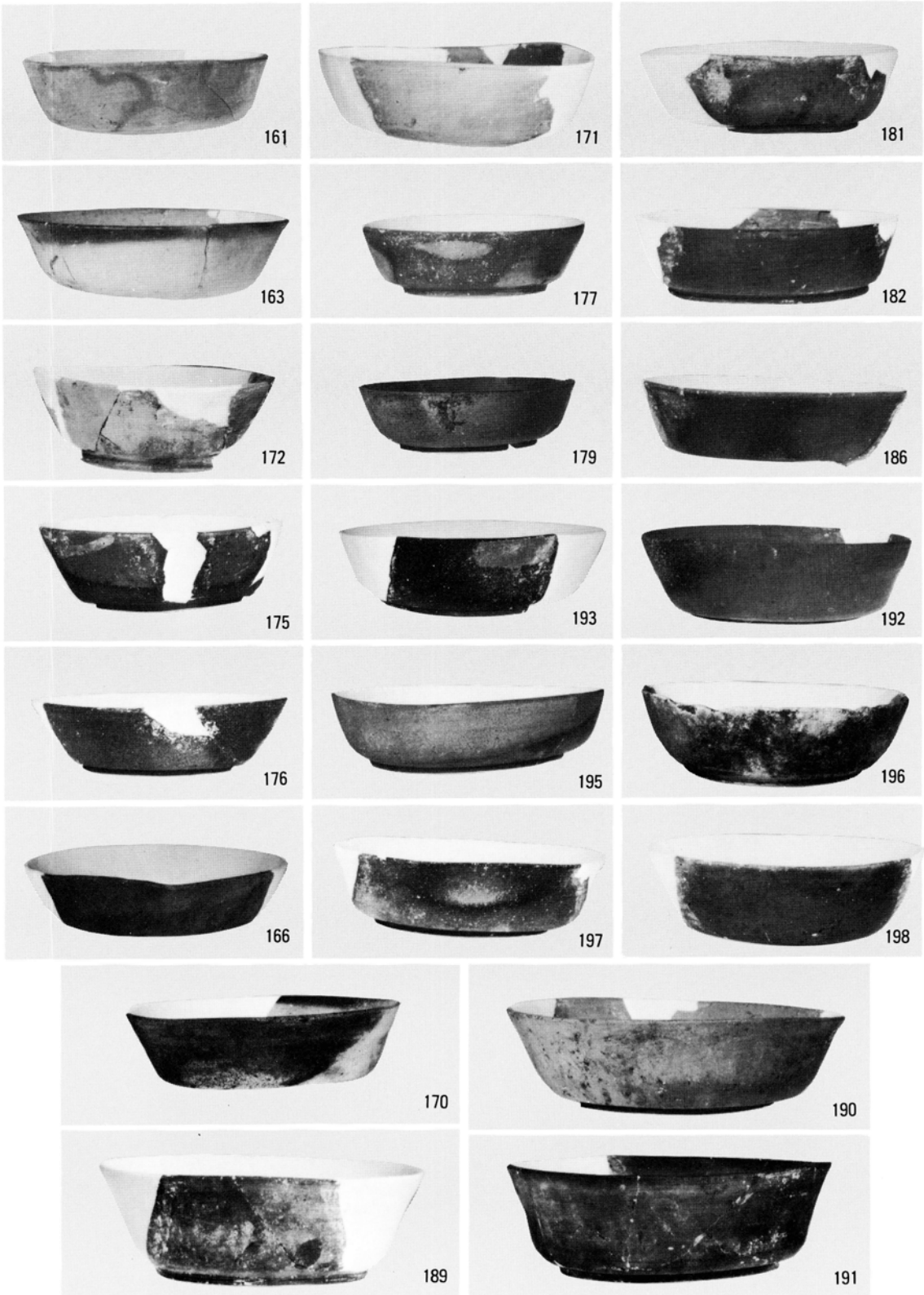




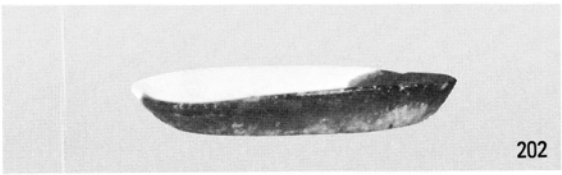


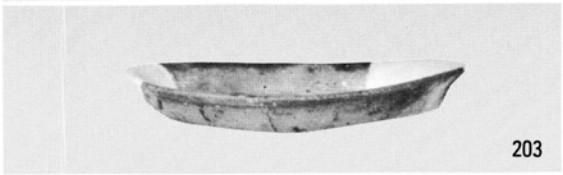


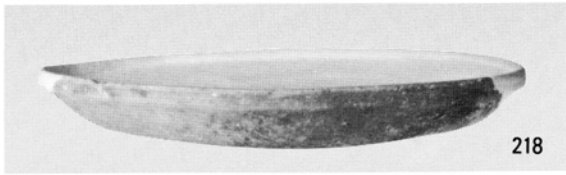
那珂７次ＳＤ02・05、ＳＥ01・02・03出土土器（107は1/5、他は1/3）

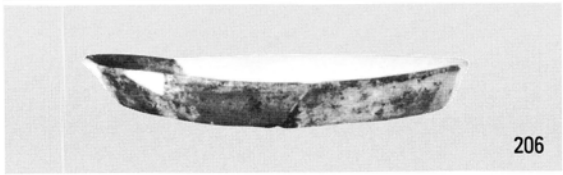


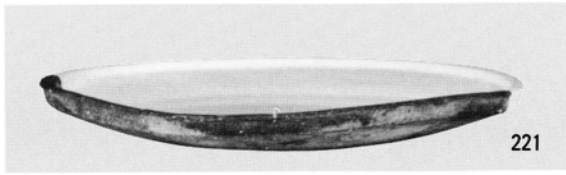
那珂７次ＳＥ03出土土器（1/3）

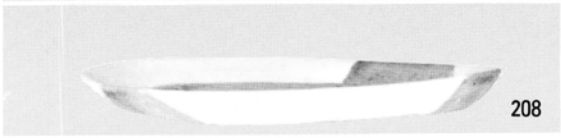


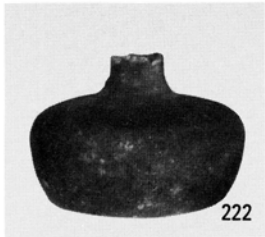


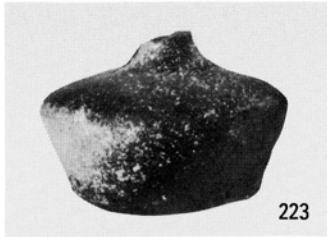




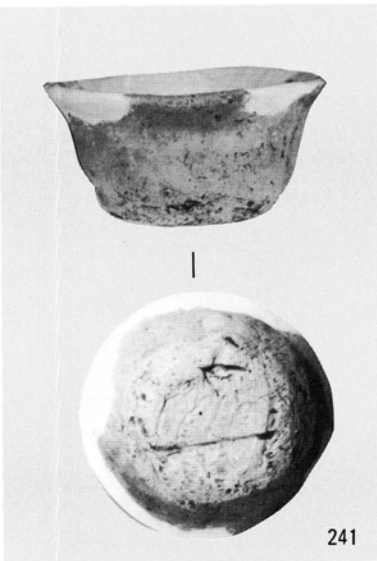


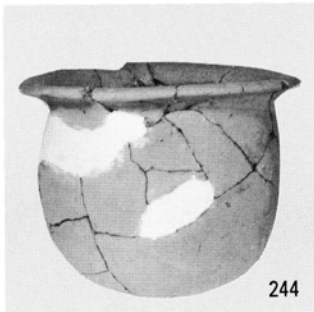


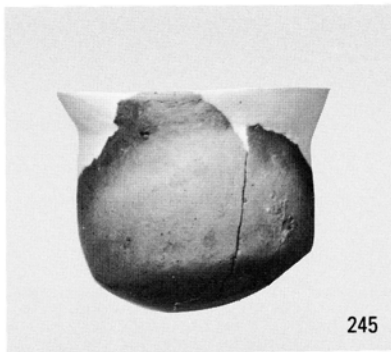


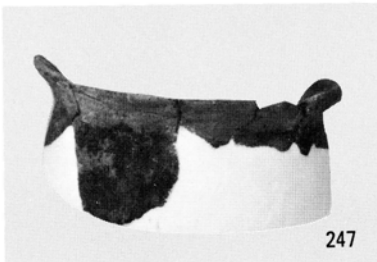


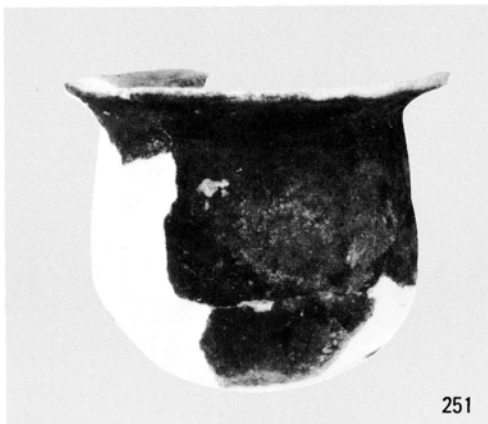
那珂７次ＳＥ03出土土器（227・231は1/5、他は1/3）

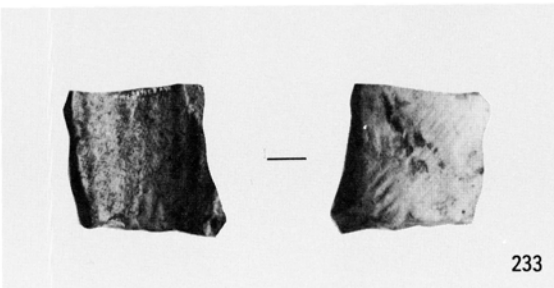


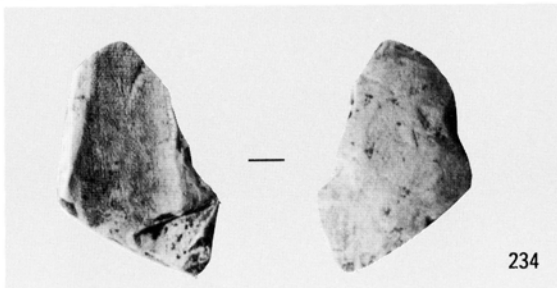




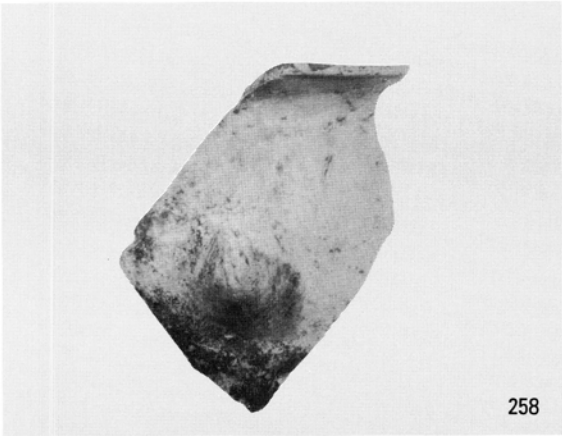


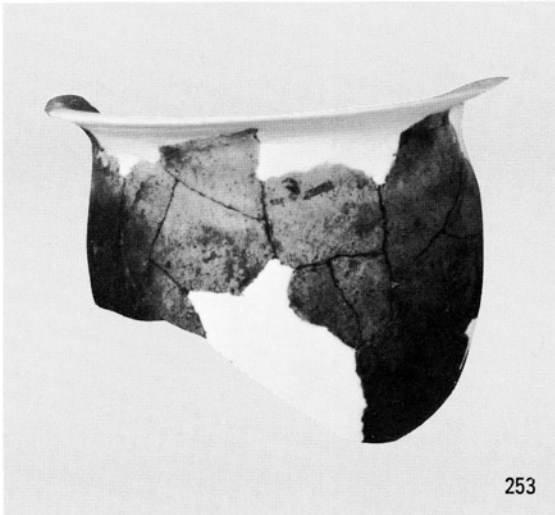


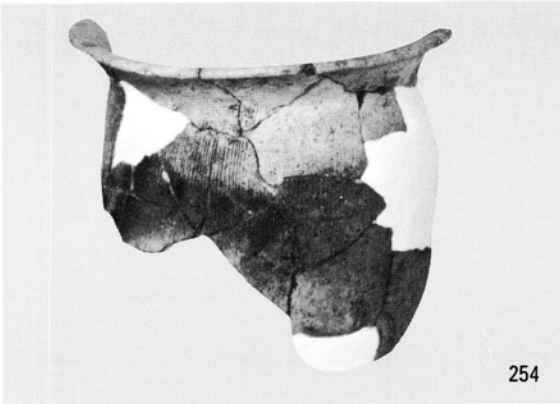


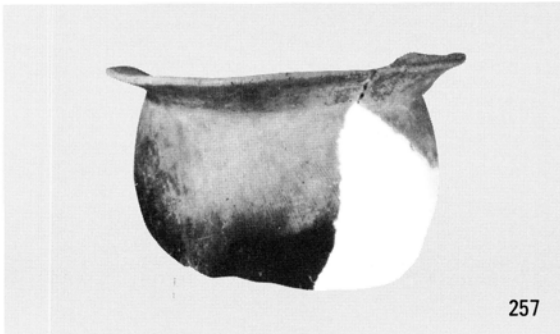


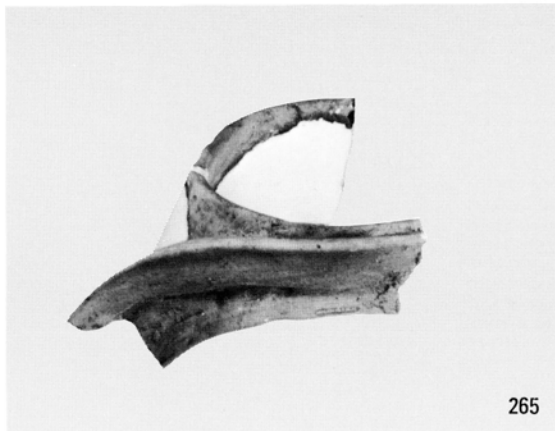
那珂７次ＳＥ03出土土器（240・241・233・234は1/3、他は1/5）



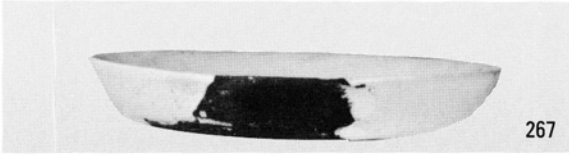


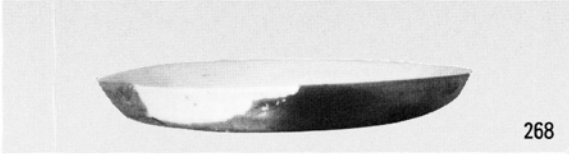


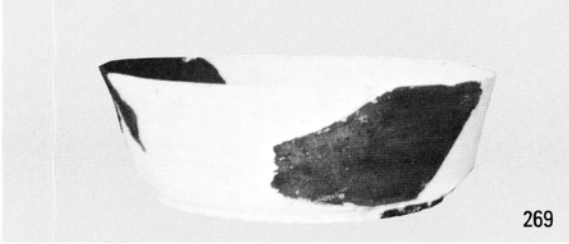


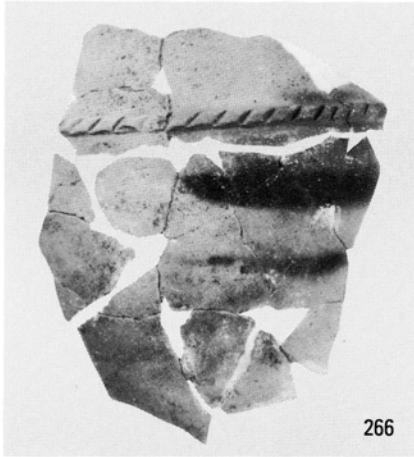


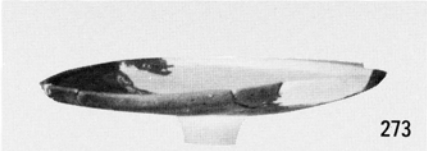
那珂７次ＳＥ03出土土器（1/5）

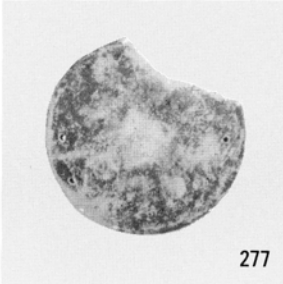


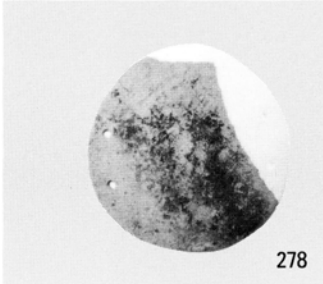


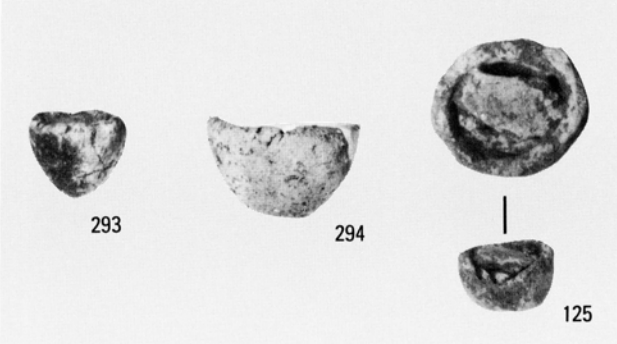




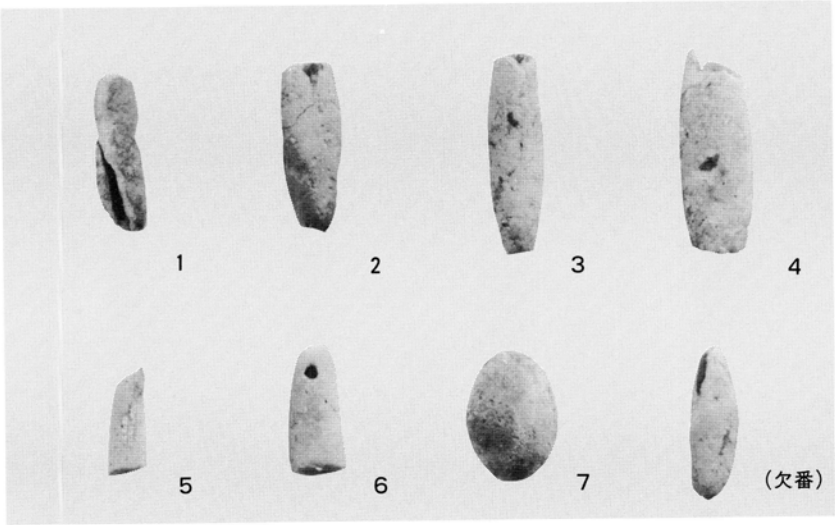


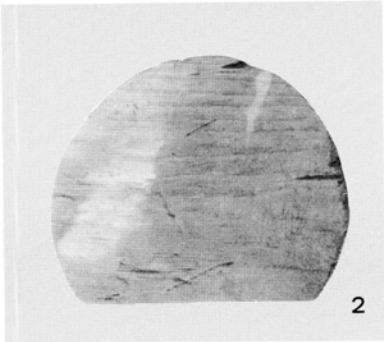




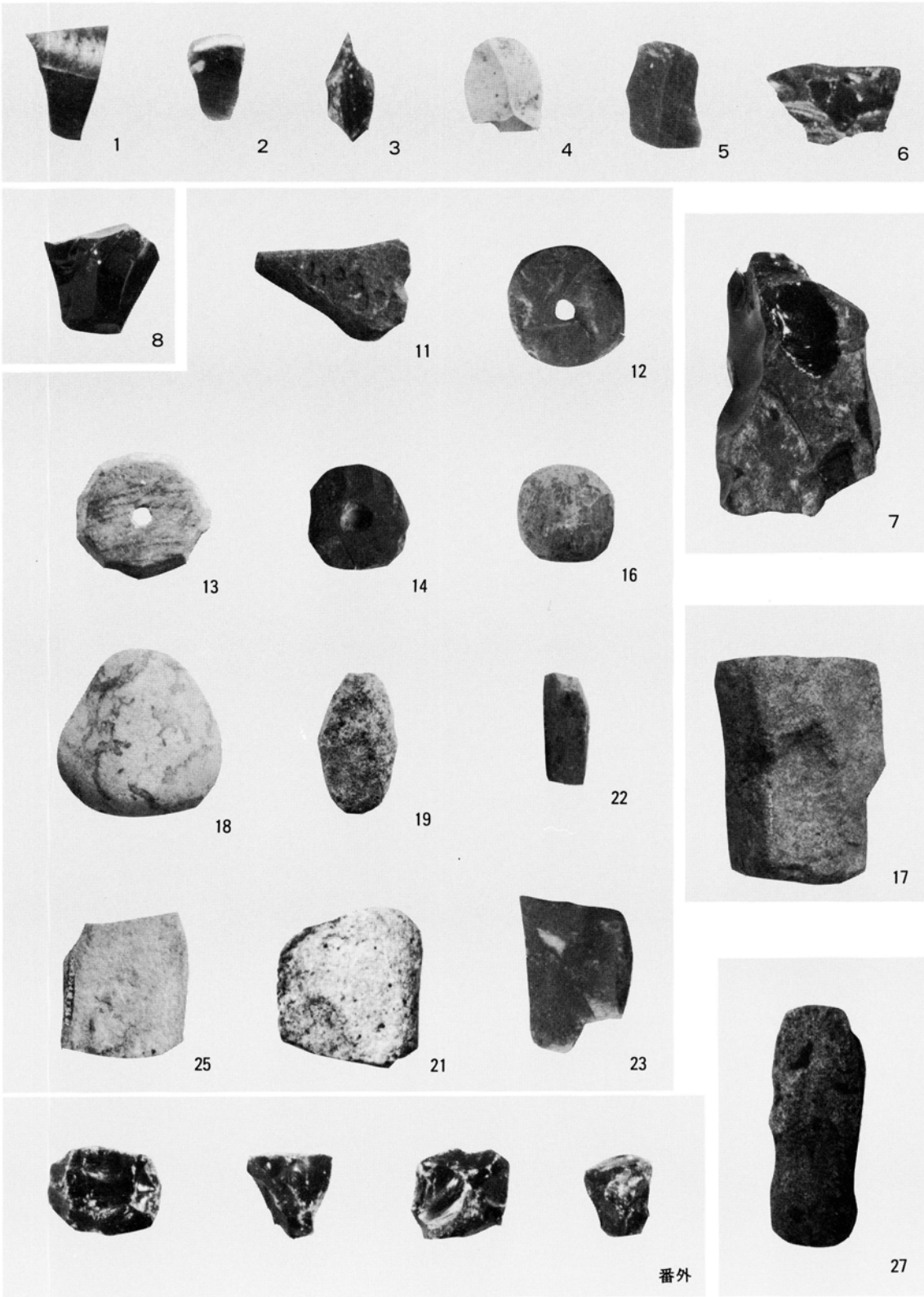


那珂７次ＳＫ01、ＳＸ01、柱穴出土土器（125はＳＥ01出土、266は約1/8、277、278は1/5
125は上1/2、下1/3、293、294は1/2、他は1/3）





那珂７次包含層、SC06・11、SD02・04出土土製品、井戸出土木器
（土製品は2/3、木器は1/3）



那珂７次出土石器（1～6・最下段は1/1、7・8は2/3、11～27は1/3）

福 岡 市 西 区

拾六町ツイジ遺跡
第２次

—城原公民館建設に伴う埋蔵文化財調査報告—

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会社会教育部社会教育課が計画した城原公民館新設工事に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課が1985年７月25日より８月20日に発掘調査を行なった福岡市西区拾六町190－１に所在する拾六町ツイジ遺跡第２次調査報告書である。

2．本書の挿図は、二宮忠司、藤村佳公恵が行ない、写真は大庭友子が行なった。

3．本書の執筆、編集は二宮が行なった。

4．本遺跡調査番号は8523である。

本　文　目　次

頁

第１章　はじめに　１．調査に至る経過 …… 61

２．調査の組織と構成 …… 61

３．遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 61

第２章　調査の記録　１．遺構　２．遺物 …… 65

挿　図　目　次

Fig49.　拾六町ツイジ遺跡周辺図　（１/25,000） …… 62

Fig50.　拾六町ツイジ遺跡第１次・２次調査位置図（１/2,000） …… 63

Fig51.　土層図、遺構配置図（１/80、１/100） …… 64

Fig52.　出土木器実測図　（１/６、１/８） …… 66

図　版　目　次

PL21.

上段　(1) 調査前の遺跡全景　(2) 堰状遺構と杭列検出状況

(3) 建築材出土状況　(4) 杭列検出状況

下段　(5) 出土木器

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

1979年、福岡市教育委員会社会教育課より西区拾六町490－1の城原小学校校庭内に公民館建設の計画が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。城原小学校は、昭和55年から56年にかけて校舎部分の調査を行ない、弥生～古墳時代の水田址とともに各種の木製品が出土していることでよく知られた拾六町ツイジ遺跡で、計画の範囲も水田址か杭列遺構の検出が確実なところであった。社会教育課との協議により本遺跡も調査を行なうこととなり、小学校が夏休みに入る月の昭和60年7月25日より同年8月20日に発掘調査を実施することにした。調査対象面積495㎡に対し、実施した調査面積は220㎡と狭い。これは周辺の建物、構造物との関連で安全を計る必要性から生じたものである。

2. 調査の組織と構成

調査委託　福岡市教育委員会社会教育課

調査主体　福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課

事務担当　折尾学（係長）、岸田隆

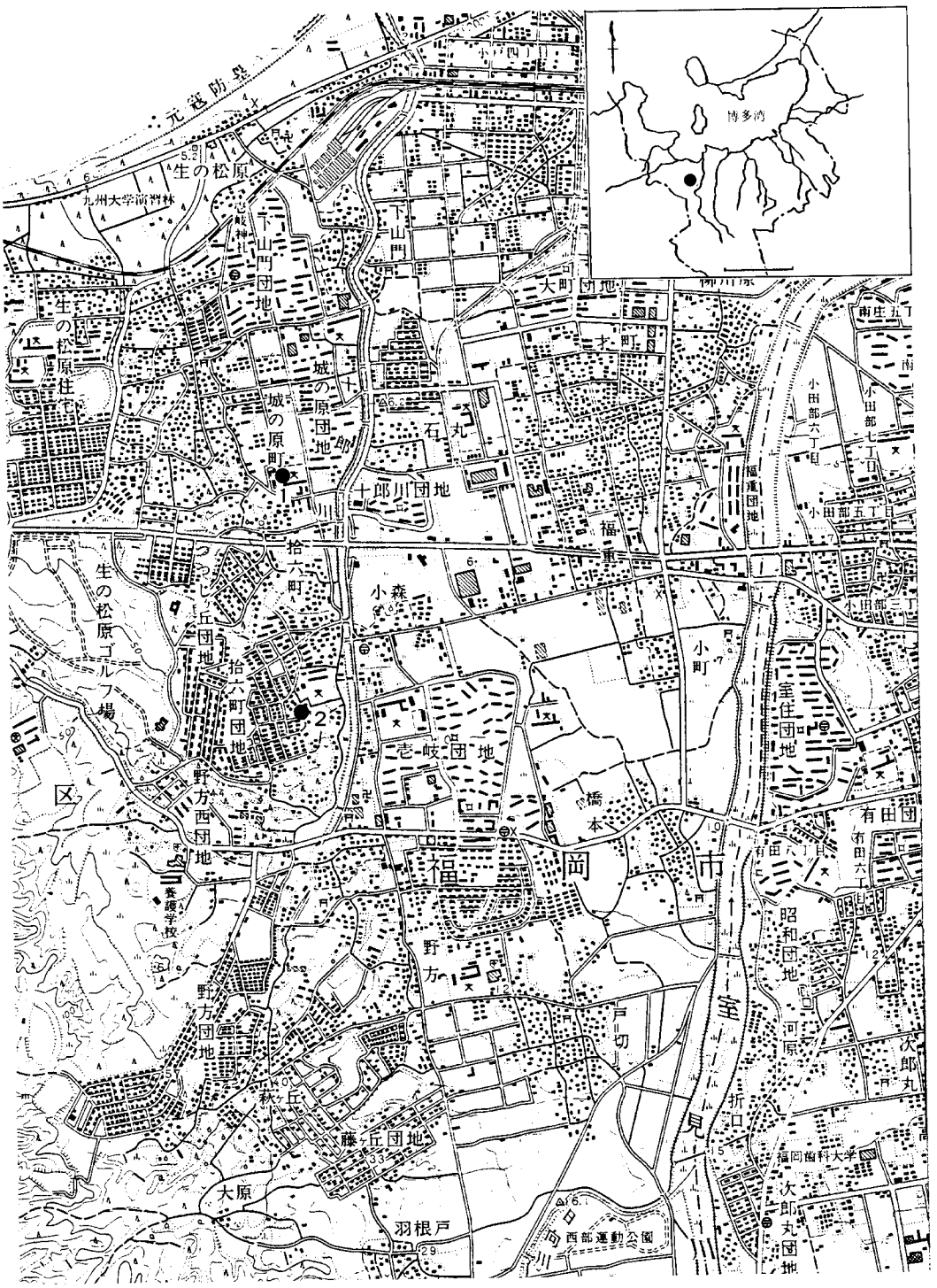
調査担当　二宮忠司、佐藤一郎、**補助員**、田中稿二、大庭友子、藤村佳公恵

調査・整理作業員　太田孝房、北島義浩、鬼丸邦宏、榊太郎、柴田大正、三原淳司、藤崎一寿
山野訓弘、青柳恵子、太田頼子、奥田洋美、平田ミサ子、南里三佳、藤崎洋子、山野住実恵、北島藤子、尾崎京子、斉藤美紀枝、真名子順子、清水文代、杉村文子、中牟田サカエ、西納テル子、西納トシエ、能美八重子、藤タケ、真鍋チエ子、山下サノエ、米嶋ハツネ

調査開始にあたっては社会教育課、地元公民館館長、同主事、城原小学校のみなさまに数多くの御協力と御援助を受けました。御礼を申し上げます。

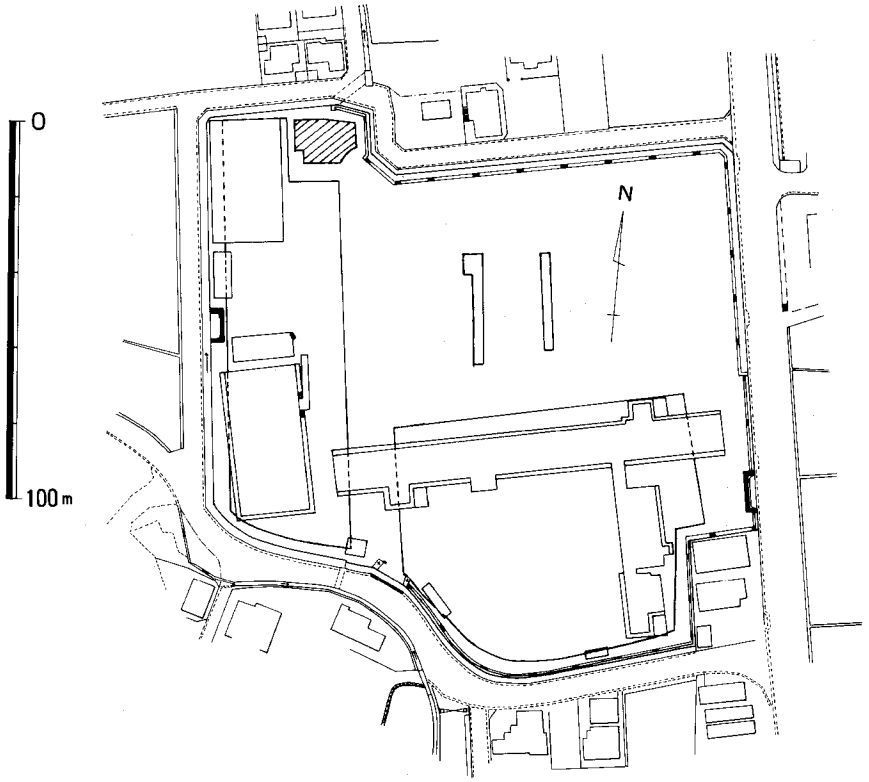
3. 遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡の位置と周辺の遺跡・環境については、1983年に報告された拾六町ツイジ遺跡の中で、松村道博、山口譲治両名が詳細にふれているので本稿では割愛する。福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集を参照していただきたい。本遺跡は拾六町ツイジ遺跡第2次調査となる。



1拾六町ツイジ遺跡　2コノリ遺跡

Fig 49. 拾六町ツイジ遺跡周辺図（縮尺1/25,000）



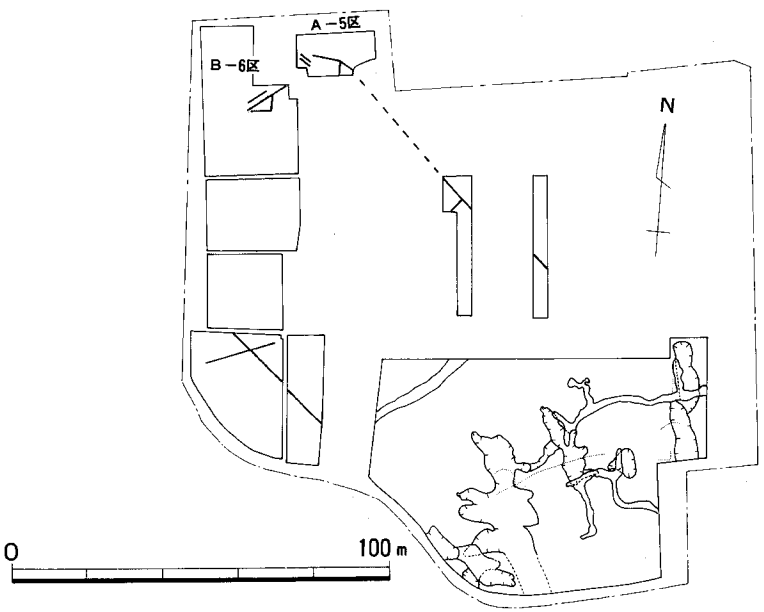


Fig 50. 拾六町ツイジ遺跡第１次・第２次調査位置図（1/2,000）

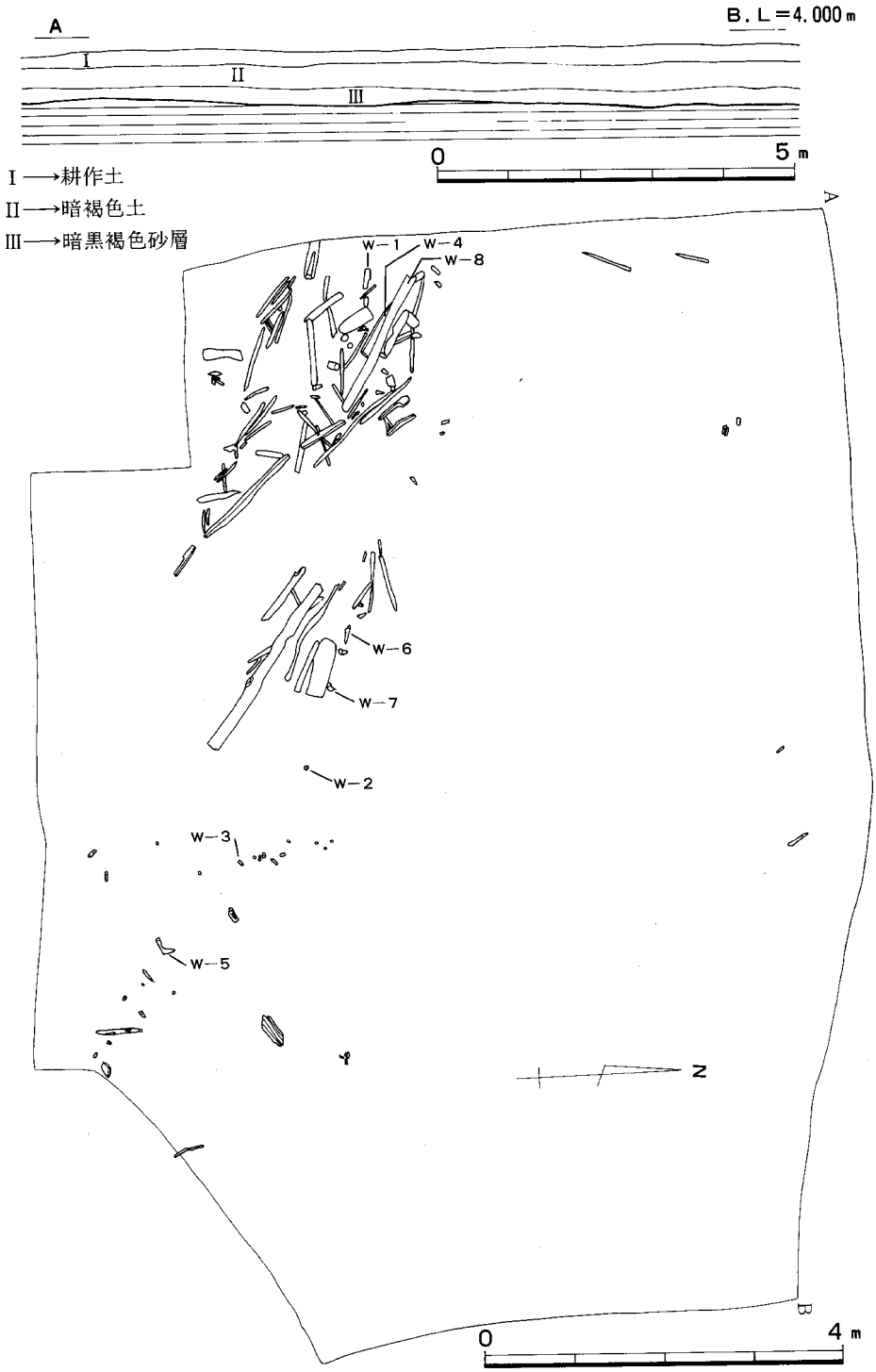


Fig51. 土層図、遺構配置図（1/80・1/100）

第II章　調査の記録

本遺跡は昭和55年から昭和56年度にかけて発掘調査が実施された拾六町ツイジ遺跡の第２次調査にあたる。第１次調査では、学校開校の関係で運動場部分の調査は次回の調査に委ねることとなり一部が今回の発掘調査となった。発掘調査は昭和60年（1985年）７月25日より８月20日にかけて実施した。発掘対象面積495㎡の調査を開始したが、盛土が1.5ｍと構造物等の関係で220㎡の調査面積となった。遺構は杭列遺構や建築材の検出が確認されたが土器・石器等の時期を決定できるものはまったく出土しなかった。第１次調査等の関係から弥生時代から古墳時代にかけての杭列遺構と考えられる。

１．遺　構（Fig51、PL21）

調査区が狭いため、今回の調査だけでは、杭列遺構が検出できたとしか言えないが第１次調査報告との関連でこの杭列遺構がどのようになるかを決定したい。

今回の調査は第１次調査報告のＡ－５区に位置する。第１次調査のＢ－６区に２条の杭列があり、この杭列は北東（Ａ－５区）につづく様相を示している。これが今回検出された杭列遺構である。Ｂ－６区から延びた杭列はＡ－５区で堰として作られた杭列まで達するものと思われる。この杭列から東南につづく杭列を検出した。この中間から枝分れした南に延びる杭列も１条ある。全体的に把握することにつとめたが未調査部分の方へ杭列がつづくためその詳細は不明。

土層は北壁部（Fig51）で、盛土1.5ｍ、耕作土25㎝、暗褐色土40㎝、暗黒褐色砂層20㎝、黄褐色砂層とつづく。杭が打ちこまれた土層は暗褐色土層の約20㎝下からである。

２．遺　物（Fig52、PL21）

杭、建築材、流木以外他の遺物の出土はない。**1**は三又鍬の上端部で大型のものである。そのほとんどが欠損している。材質はカシと思われる。**2**は三角の割材である。面取が行なわれている所からかなり大きな材を使用している。端部だけ加工し杭として使用している。**3**は割材でも角材として作られたもので、これも端部だけの加工で杭として使用している。**4**は柾目材で風化のため肉の部分が剝落し年輪の部分だけが特出している板材である。**5**は上端部のねじれ等からこれで完形と思われる。枝の先端部を基部とし、面取を３方向から行ない尖らせている。中央の枝分れ部分は丁寧に切断されている。径５㎝、長さ68㎝の丸木杭である。**6**も端部の状態からほぼ完形と思われる。部分的に皮がついているが焼けている部分もある。径６㎝、長さ59㎝の丸木杭である。**7**は枝の先端部を上端とし、下端は切り裂いた状態に加工を加え杭としている。径６㎝、長さ45㎝を計る。**8**は建築材の一部と考えられる。くの字形に作り上端部にほぞ穴を持つ。上下とも割れているため、その全長は不明。

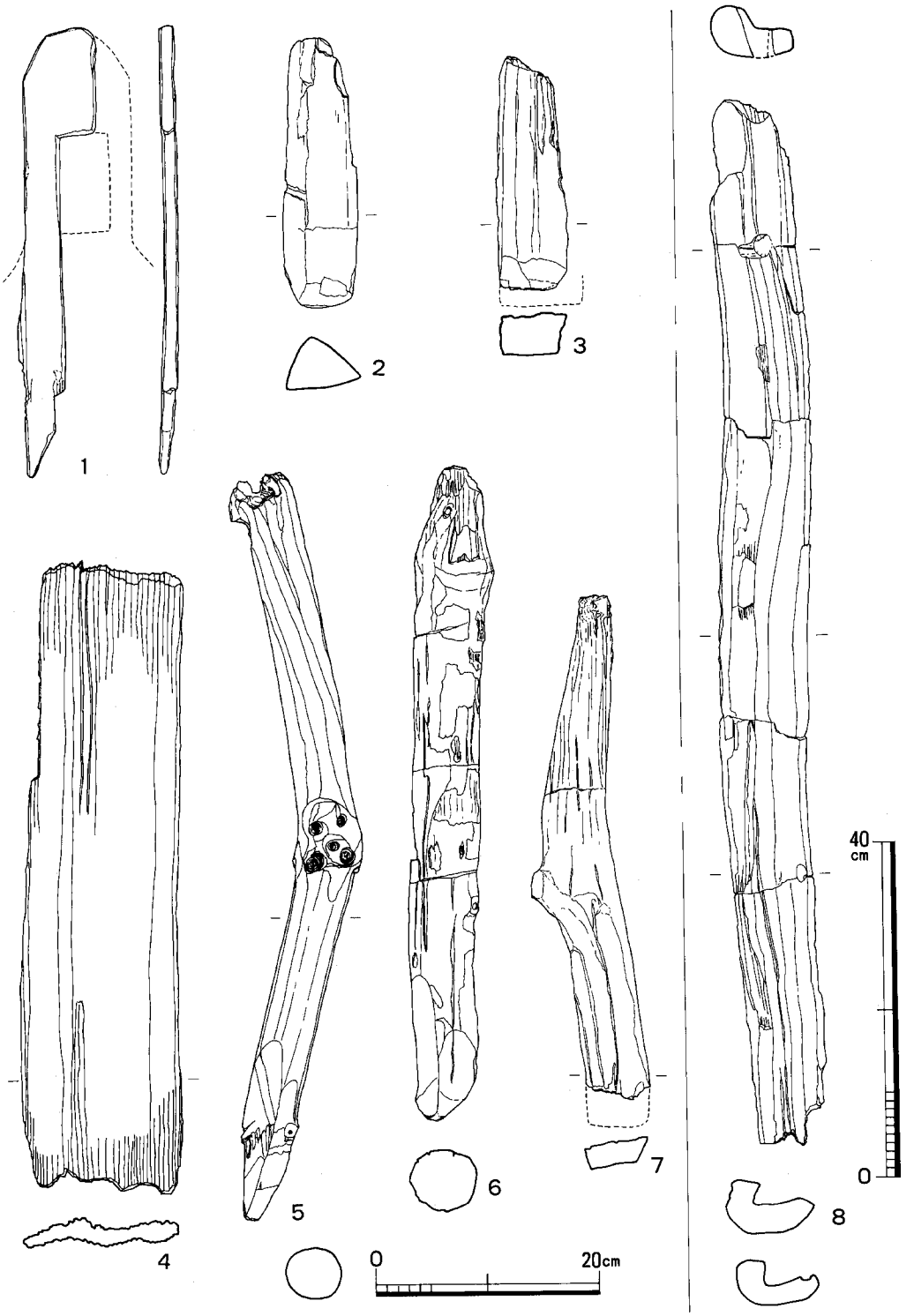
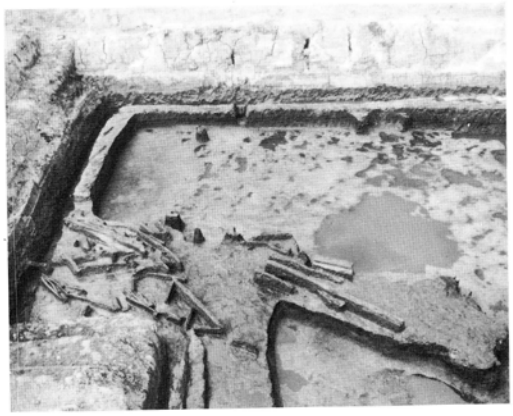


Fig 52. 出土木器実測図（1/6・1/8）

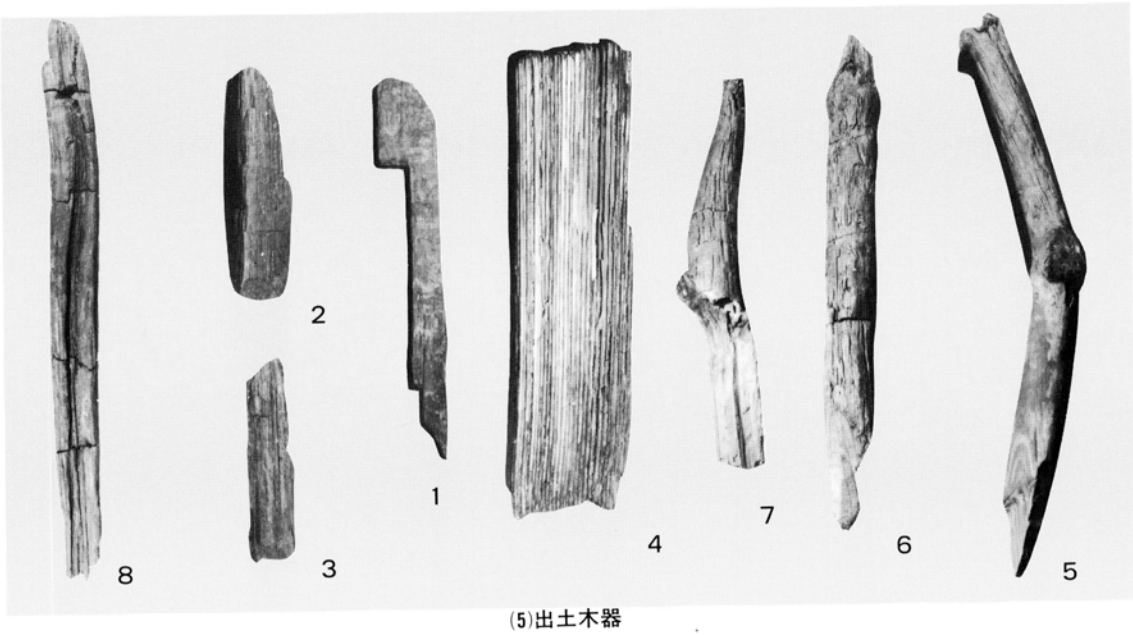
(1) 調査前の遺跡全景（南から）



(2) 堰状遺構と杭列検出状況（南から）

(3)建築材出土状況（北から）

(4) 杭検出状況（北から）



(5)出土木器

福 岡 市 西 区

拾六町コノリ遺跡
第２次

—壱岐公民館建設に伴う埋蔵文化財調査報告—

例　　言

1．本書は、福岡市教育委員会が発掘調査を行った西区拾六町784所在のコノリ遺跡の報告書である。

2．本遺跡は、『福岡市文化財分布地図・西部Ⅰ』上では遺跡として周知されていない。従って当地点から丘陵基部のコノリA・B遺跡を含めた範囲を新たにコノリ遺跡と呼ぶことにする。遺跡略号はKNRとする。

3．本書の執筆は吉武が行った。

本　文　目　次

頁

第Ⅰ章　はじめに …… 67

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 67

第Ⅲ章　調査の記録 …… 70

第Ⅳ章　おわりに …… 72

挿　図　目　次

Fig53.　周辺遺跡分布図（福岡市文化財分布地図・西部Ⅰ　1／20000） …… 68

Fig54.　コノリ遺跡遺構配置図（1／150） …… 69

Fig55.　コノリ遺跡遺構実測図（1／80） …… 71

Fig56.　コノリ遺跡出土遺物実測図（1／3） …… 71

図　版　目　次

PL22.　(1)コノリ遺跡全景　（北から）

(2)コノリ遺跡全景　（南から）

PL23.　(1)掘立柱建物・SB02～04（西から）

(2)掘立柱建物・SB05（西から）

(3)コノリ遺跡出土遺物（約1／3）

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会社会教育課では昭和61年度事業として壱岐公民館の改築を計画し、同埋蔵文化財課に対して埋蔵文化財の有無の確認の申請を行った。申請地及びその周辺は拾六町団地等の造成にあたって著しく削平されており現況では遺跡の空白地帯となっているが、周辺遺跡や立地状況から見て、その存在が充分に予想された。埋蔵文化財課では同年５月20日に当該地の試掘調査を行ったが、旧公民館解体前のことであり、調査地点はその東端部に限られた。が、それでも弥生土器や須恵器を出土するピット・溝状の遺構等が確認され、少なくとも東側には遺跡が残っていることが分った。社会教育課では新公民館の開館を昭和62年４月に予定しており、早急な対応が望まれた。協議の結果、野方中原遺跡調査班（重要確認調査）がこれに当たることになり、昭和61年８月５日～29日にかけて発掘調査を行った。

2. 調査の組織

調査主体	福岡市教育委員会	教育長　佐藤善郎
調査総括	埋蔵文化財課長	柳田純孝
	埋蔵文化財第一係長	折尾学
調査庶務	埋蔵文化財第一係	岸田隆
調査担当	文化財主事	二宮忠司
	埋蔵文化財第１係	佐藤一郎・吉武学
調査補助	田中稿二・加藤元信（明治大学）、山村信栄（慶応大学）、大庭友子	
整理補助	藤村佳公恵	

なお、調査にあたって、作業員の方々をはじめ、壱岐小学校・壱岐公民館の方々の御協力を得た。記して謝意を表したい。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

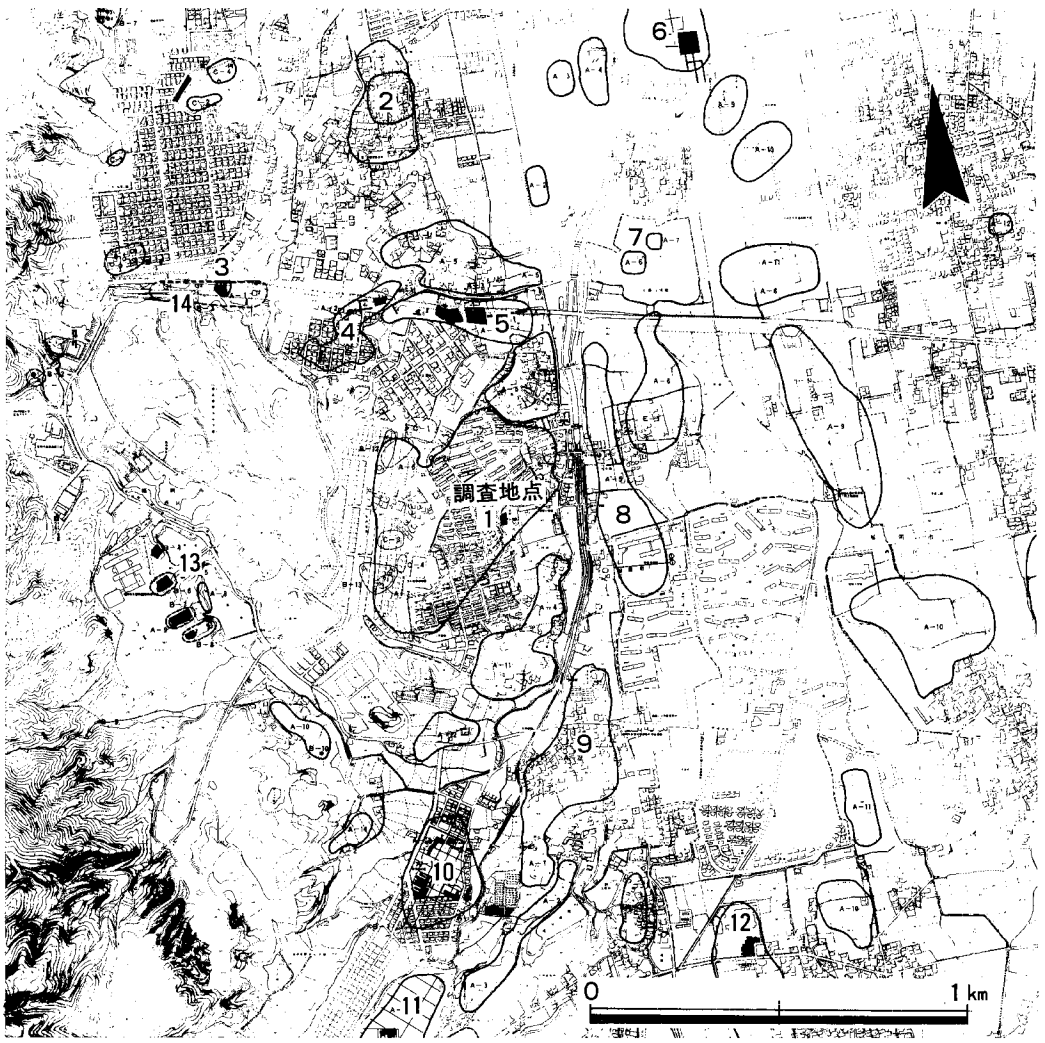
コノリ遺跡は福岡市西区拾六町784番地に所在する。

遺跡の位置する早良平野は所謂飯盛～叶～長垂山塊によって旧糸島郡と境をなしているが、これらの山塊からは平野部に向かって八手状に丘陵が伸びている。コノリ遺跡はこのような低丘陵の先端に位置しており、標高約14ｍを測る。現在は周辺の団地・学校等の造成によって地

形は著しく変形されており、遺跡の空白地帯になっている。

遺跡の所在する拾六町周辺は「和名抄」に言う『額田郷』に比定される地域であり、特に弥生時代以降に遺跡の急増が見られる。野方久保遺跡・史跡野方中原遺跡・宮の前遺跡などはその代表的なものであり、これらは奈良時代に城原廃寺を生み出す力として引き継がれてゆく。その他、周辺の奈良・平安時代の代表的な遺跡には下山門遺跡・下山門敷町遺跡・野方塚原遺跡等があり、いずれも製鉄に関連する遺構・遺物が発見されている。

なお、調査地点の乗る丘陵の基部にはコノリ遺跡・同古墳群・同製鉄遺跡等の遺跡群があり、1973年に古墳群の調査を日大に委託している。しかしその内容が全く不明であるため、新旧の調査地を含めた丘陵全域をコノリ遺跡と呼ぶことにし、今回の調査をその2次調査とした。



1.コノリ遺跡(黒ヌリ部が調査地点)　2.城原廃寺　3.大又遺跡　4.宮の前遺跡　5.湯納遺跡　6.下山門敷町遺跡　7.石丸古川遺跡　8.牟田々遺跡　9.野方久保遺跡　10.野方中原遺跡(国指定史跡)　11.野方塚原遺跡　12.戸切遺跡群　13.広石古墳群　14.高崎古墳群

Fig 53. 周辺遺跡分布図(福岡市文化財分布地図・西部Ⅰ 1/20,000)

（アミ部分は全て攪乱）

Fig 54. コノリ遺跡遺構配置図（1/150）

第Ⅲ章 調査の記録

1. 調査の概要

開発面積は、公民館用地1007.4㎡であったが、調査区の西側では既に基盤である花崗岩風化土が露出しており、又周辺の地形から見ても西側半分については遺構が削平されて消滅していると予想された。その為、調査はまず西側にトレンチを入れ、遺構が存在しないことを確認した後、そこを排土置き場として、東側半分（360㎡）に対して遺構の精査を行った。その結果、調査区は旧公民館の基礎が縦横に走るなど寸断された状況にあり、遺跡本来の景観は既に失われていることが判明した。遺構としてはピット群と溝状の遺構１条を検出し、検討した結果、奈良時代に属する掘立柱建物４棟を確認した。ピット群には弥生土器片や黒曜石のチップ等を出土するものがあるが、住居跡等の特定の遺構としては捉えられなかった。

2. 遺構（Fig 55. PL23）

(1)掘立柱建物（SB02～05）

掘立柱建物は４棟を確認したが、SB05以外の３棟は調査区東南で重なって検出された。

SB02は重なり合う３棟の中でも柱穴が最もしっかりしているものだが、東側が削平されており全形が不明である。現状では１間×２間であるが、東側に延びるものと考えられる。主軸方位はＮ－45°－Ｅ。柱穴径は45～52㎝、深さは42～50㎝を測り、平面形はほぼ円形を呈する。柱痕跡は径16㎝と19㎝のものがある。柱穴からは奈良時代の土器片が出土した。

SB03は東南隅の柱穴が削平されているが、梁行１間×桁行２間にまとまるものである。主軸方位をＮ－５°－Ｗに置き、梁行178㎝、桁行284㎝を測る。柱穴径は63㎝のものを除くと20～24㎝にまとまり、深さは８～24㎝とバラつくが、柱穴基底面のレベル差は少ない。柱穴の平面形は大型のものを除くと、ほぼ円形である。奈良時代の土器片が少量出土している。

SB04も02同様東側を削平されているが、１間以上×３間になる建物として復元し得る。主軸はＮ－14°－Ｅで、現状での桁行は442㎝を測る。柱穴は23～34㎝、深さは13～30㎝で平面形はほぼ円形である。須恵器片等が出土した。

SB05は調査区のほぼ中央にあるが、攪乱により柱穴ひとつを失っている。２間×２間の建物で主軸はＮ－20°－Ｗ。梁行平均281.5㎝、桁行295㎝を測る。柱穴は径12～53㎝、深さ14～40㎝で基底面のレベル的にもかなりのバラつきがある。土師質土器の細片が出土した。

(2)溝状遺構（SD01）

溝状遺構（SD01）は調査区の東側中央部付近にある。北側は既に削平されており、南側は浅くなって終っている。地形から見て南から北へ向って流れる溝だった可能性がある。

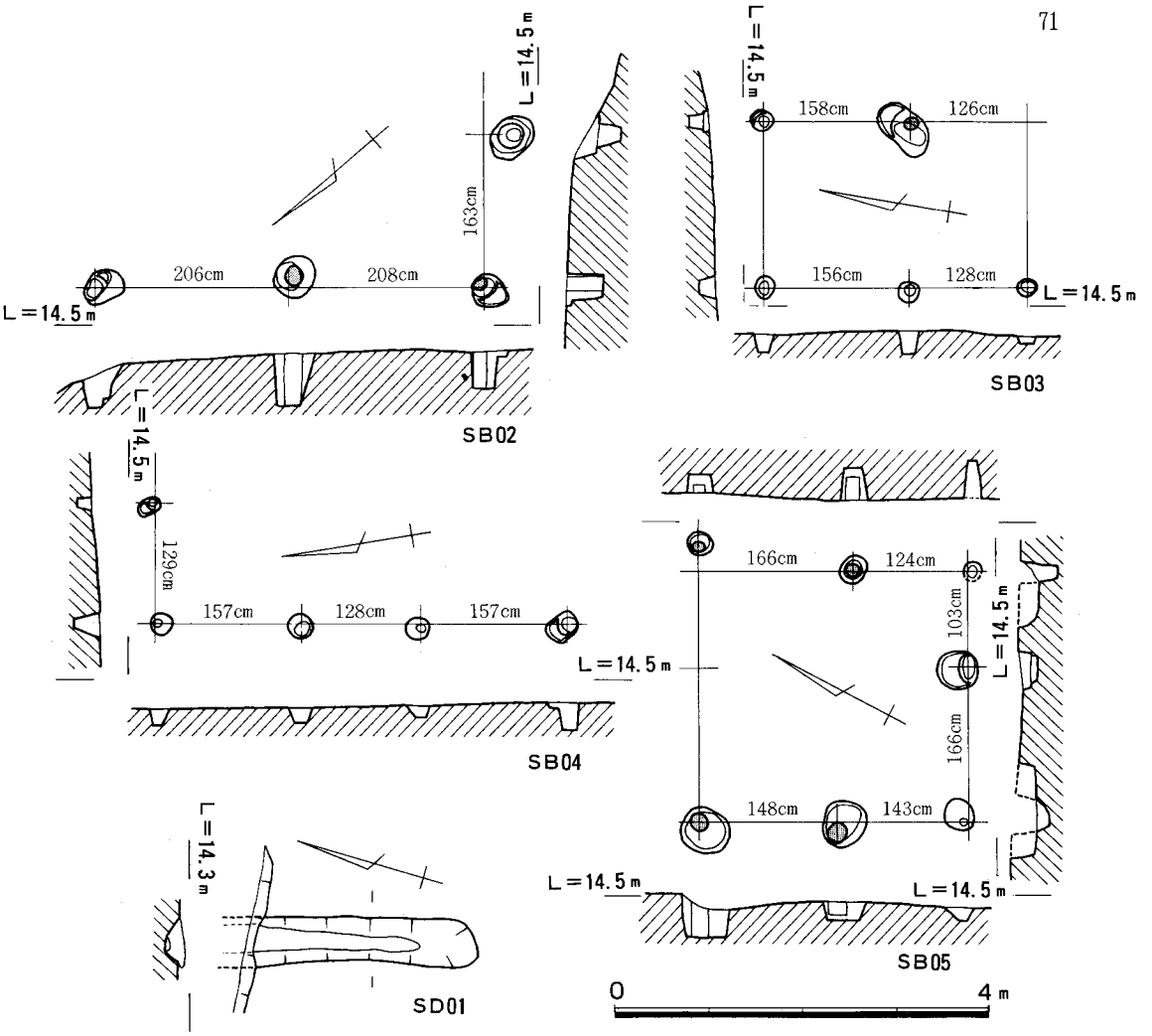


Fig55. コノリ遺跡遺構実測図（1/80）

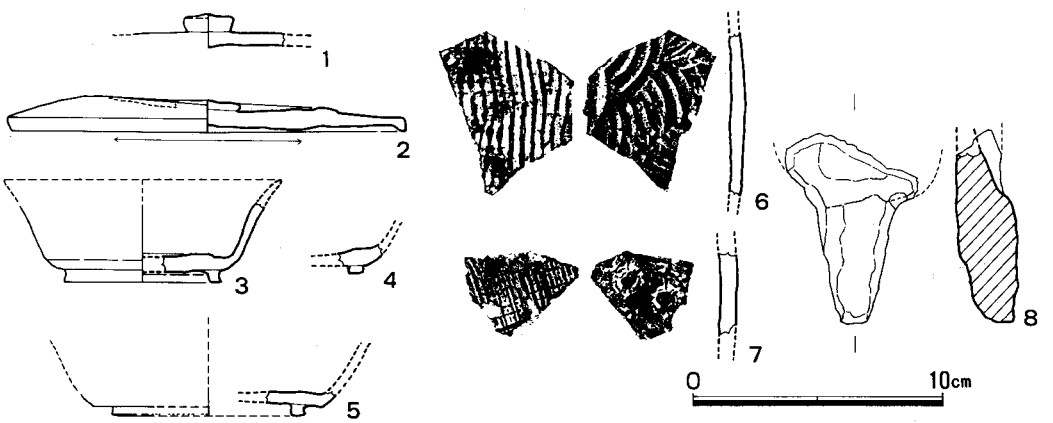


Fig56. コノリ遺跡出土遺物実測図（1/3）

（3はSB02、6はSB04、4・7はSD01、他はピット出土）

3. 遺物 (Fig56. PL23)

遺物はピット群、溝状遺構、及び攪乱坑から出土した。このうち遺構に伴うものとしては図化したもの以外は細片がほとんどである。又、攪乱坑からはスラッグがまとまって出土したが遺構に伴うものはない。Fig56のうち、3はSB02に、6はSB04に、4・7はSD01にそれぞれ伴って出土した。

1・2は須恵器の坏蓋である。1は宝珠状つまみがやや扁平で、色調は淡灰褐色を呈し、焼成はやや不良で、胎土は精良である。2は坏蓋を利用した転用硯で約5分の4を残している。宝珠状つまみは扁平で口縁端部は三角形を呈す。焼成時の歪みが著しい。色調は淡灰褐色、焼成は良好、胎土に砂粒を含む。法量は器径15.9cm、器高1.3〜1.4cmを測る。ロクロ回転は時計回りである。図に示した範囲は器面が著しく摩耗しており、墨も若干残っている。

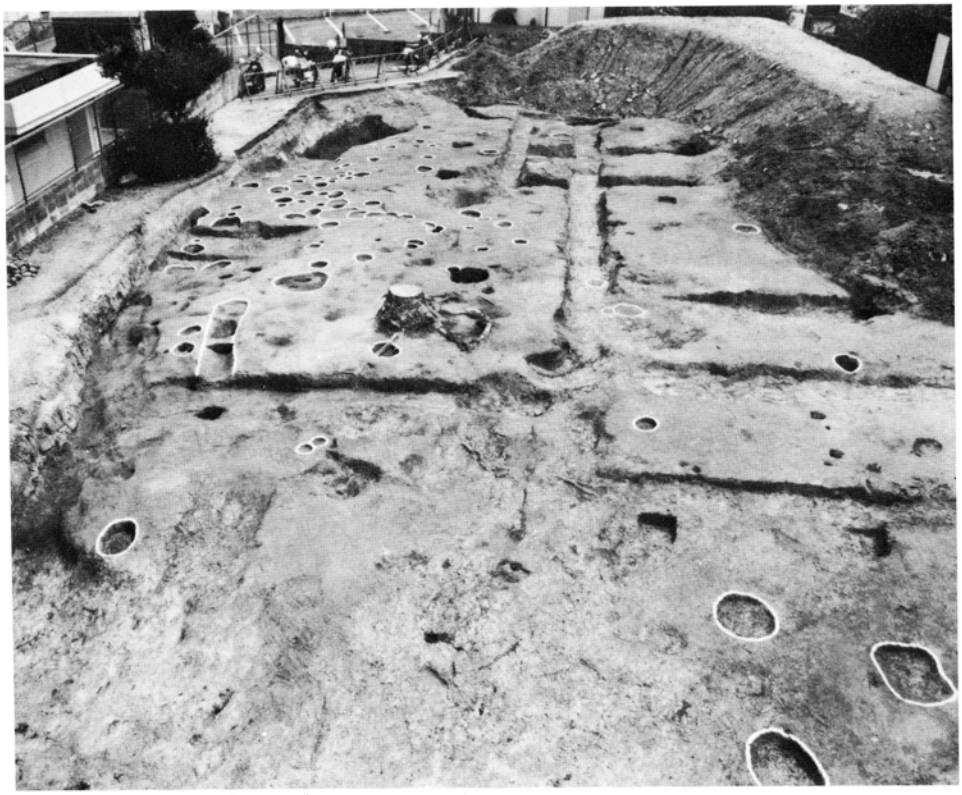
3〜5は須恵器坏身である。いずれも小破片であるが、3点とも高台底面が全面着地するもので、5は高台が若干内側に寄っている。3は色調灰褐色、焼成良好、胎土精良、推定での底径が6.2cm。4は色調淡青灰色、焼成良好、胎土精良。5の色調は外面が濃灰褐色、内面が淡青灰色を呈し、焼成は良好、胎土精良で、推定底径7.6cmを測る。ロクロ回転はいずれも時計回りと思われる。

6・7は須恵器甕胴部片である。6は外面平行叩き、内面は大きめの円弧叩きを施す。色調は外面が黒灰褐色、内面が灰褐色を呈し、焼成は良好で、胎土には多量の黄白色粒子と少量の黒色粒子を含んでいる。7は外面格子目叩き（叩き板に木目と直交する溝を刻んだためのものか)、内面は車輪状の叩きを施す。色調は外面が淡赤褐色、内面が暗青灰色で、焼成良好。胎土に黄白色の粒子を含んでいる。

8は弥生時代に属する柄杓形土製品である。柄部寄りの2分の1を残しており、色調は淡黄褐色を呈し、焼成はやや脆く、胎土には砂粒を多量に含む。

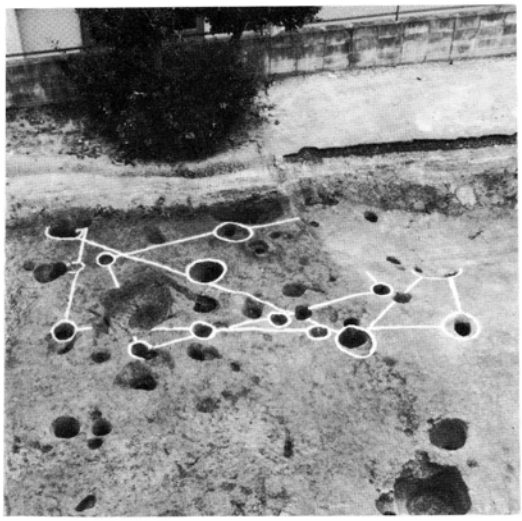
第Ⅳ章 おわりに

調査地点は、狭い面積の上著しく削平されており、当然のことながらそこから得られた情報も非常に限られたしかも断片的なものであった。調査の成果としては、①調査地点は丘陵の東南隅であり、その東側は十郎川によって削られた段丘となっている。遺跡の主体部は西側ないし北側に広がっていたものと考えられる。②弥生時代及び奈良時代の遺物が出土したが、主体を占めるのは後者である。遺構としては奈良時代の掘立柱建物4棟他を検出した。③製鉄関係の遺物は出土していないが、攪乱坑からはスラッグが出土しており奈良時代のものである可能性が高い。硯の出土とも考えあわせると、鉄生産に関わる遺跡の一部である可能性もあろう。

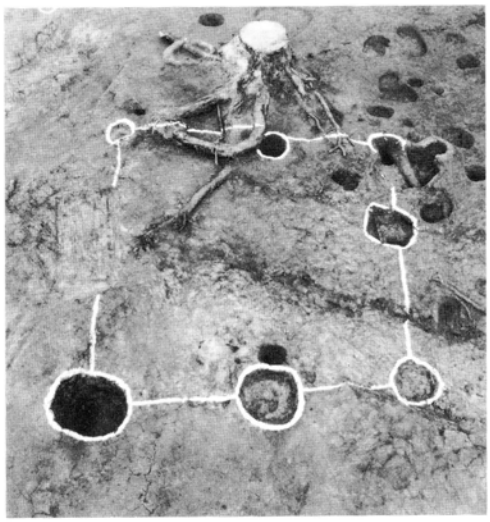


(1)コノリ遺跡全景（北から）

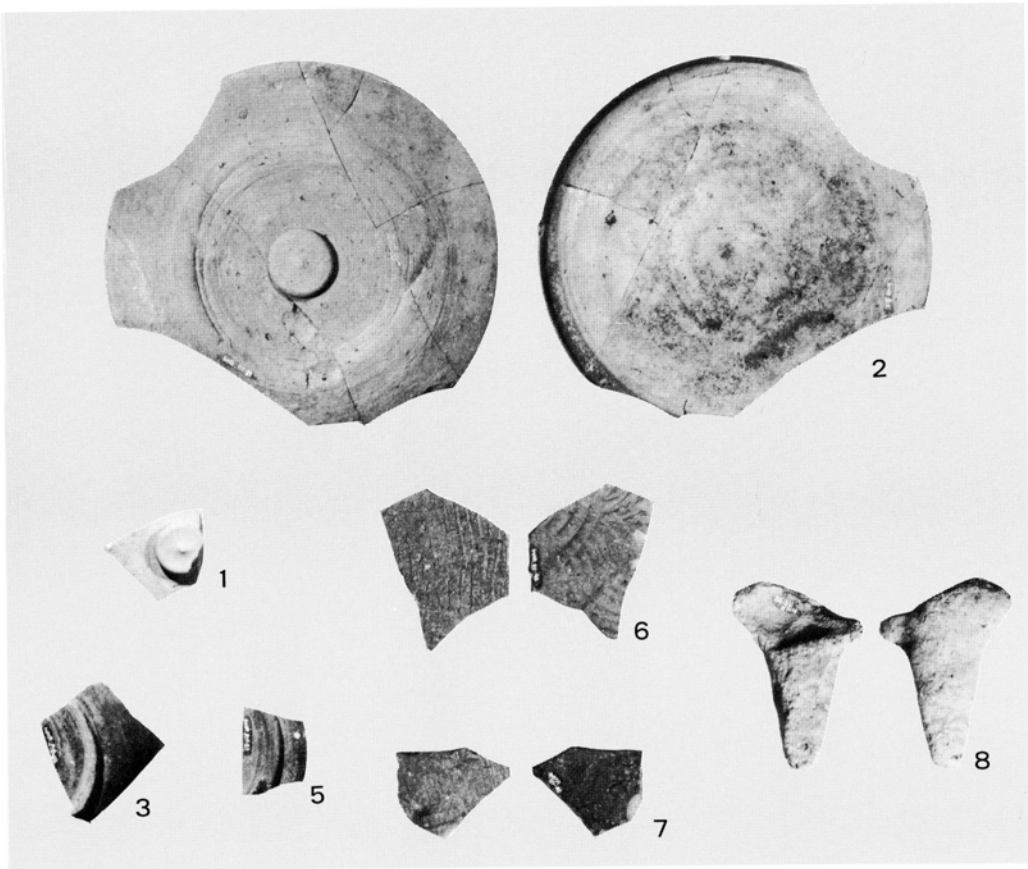
(2)コノリ遺跡全景（南から）



(1)掘立柱建物・SB02～04（西から）



(2)掘立柱建物・SB05（西から）



(3) コノり遺跡出土遺物（約1/3）

福　岡　市
公民館建設関係
埋蔵文化財調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第162集
1987年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7－23

印刷　川　島　弘　文　社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目4番4号